ヴァンプ！！

イケダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヴァンプ！！

【Ｎコード】
Ｎ０９５２Ｖ

【作者名】
イケダ

【あらすじ】
誰しもがＰＳＩ（超能力）が使えて当たり前の世界でほとんどその力が使えない少年、タイセー・イセジマ。
そんな落ちこぼれが幼馴染のカリンや乱暴者のマツリ、無口なヨナ&真面目なヤマダ、エロなランコなどのクラスメイトたちに色々と肉迫される物語。

【主要登場人物紹介】

＜フルリアナス・ハイスクールの生徒＞

★　タイセー・イセジマ（♂）　：　主人公。平凡で虚弱な落ちこぼれ。ＰＳＩ（サイ）の力（超能力）ほぼ無し。

☆　カリン・タカツキ（♀）　：　タイセーの幼馴染でクラスメイト。ＰＳＩ能力は各分野とも高め。
◇とても気位が高い女の子。

☆　マツリ・テンマ（♀）　：　タイセーのクラスメイト。念動力、特にテレキネシスが得意。
◇とてもじゃじゃ馬な女の子。

☆　ヨナ・コシミズ（♀）　：　タイセーのクラスメイト。感応能力が高く、猫と会話ができる。
◇とても無口な女の子。

☆クルミ・カシムラ（♀）　：　タイセーのクラスメイト。お菓子の当たりを見分ける能力あり。
◇とても甘えんぼな女の子。

☆　ナナセ・ヤマダ（♀）　：　タイセーのクラスメイトでクラス委員長。数時間先の出来事を予知できる。
◇とても真面目な女の子。

☆　ランコ・コダチ（♀）　：　タイセーのクラスメイト。中距離の瞬間移動が出来る。

◇エロ担当な女の子。

＜その他＞

☆　イブキ・モリ（♀）　：　タイセーのクラス担任。少々思い込みの激しいところがある。

★レドウォールド・アレトゼー（♂）　：　カリンの従者。主君を護る事のみに生きる剣士。

（基本無愛想だがタイセーのみ例外）

☆　シヅル・イセジマ（♀）　：　タイセーの長姉。クール。ヘンタイその1。

☆　キサラ・イセジマ（♀）　：　タイセーの次姉。ほんわか。ヘンタイその2。

※登場人物はまだ増える予定です

（自サイトにも掲載中）

序章　：　僕の人生オワッテル

『ＰＳＩ（サイ）が全然使えない、お前の人生オワッテル　』

――　この世に生を受けて十五年。
まだ人生の辛酸を舐めたことはほぼ無いけれども、今までで一番傷ついた言葉がこれだ。

確かに僕は念動力や予知や透視、精神感応などのＰＳＩ（超能力）が使えない。
しかし、精神波長がすこぶる良い時は羽のように軽いテイッシュを念動力を駆使してＢＯＸケースから引っ張り出す事ができる。
……とはいっても、それは年に一度程度のミラクルで、出せてもたった一枚が関の山なんだけど。

だから、大なり小なりある程度のＰＳＩが使えることは至極当たり前のこの世界で、僕のような存在は非常に稀有な存在だ。ある意味珍獣。ある意味エイリアン。
そんな未確認生物体の僕が、高い潜在能力を持つ生徒ばかりを集めるこのフルリアナス・スクールに入学したことが全ての間違いの元だった。

……というか、どうして僕がこのスクールに入れたのか今をもって謎のままだ。

こんな生けるカスのような僕が名門フルリアナスに入れるわけがないのに、気付けば三月初旬にはスクールの入学許可案内が自宅のポストに届いていた。
僕は入学試験を受けるどころか入学願書すら提出していなかったのに、だ。

だからこれは絶対にデリバリーミスだと確信して封を空けずにフルリアナス事務局に書類を返送したのだが、

「この入学許可証はタイセー・イセジマ殿に送付したものに間違いない」

という注釈つきで書類はまた僕の家に送られてきてしまった。
謎が謎を呼ぶ展開に僕はうろたえるばかりだったが、家族は涙を流さんばかりに大歓喜をしていた事を思い出す。一家、いや親戚縁者一族の中でダントツの落ちこぼれである僕がフルリアナスへ入学することになったのだ。その気持ちはわかる。

だがどう考えたってこれはありえない事だ。
しかし入学を断るさしたる理由も見つけられなかったため、僕は周囲の波に飲まれるままにズルズルとこのスクールのゲートをくぐることになってしまった。

本当にこれがすべての間違いの元だった――。

タイセー、受難の日

なぜこのスクールに入ったのが間違いだったのか。
その一番の理由、大いなる元凶が【　女の子ばかりのクラスに男は僕一人】という、

「あの、これなんてギャルゲーですか？」

的な仕打ちをされていることだ。
普通の男子なら鼻を下を伸ばして喜びそうなシチュエーションかもしれない。でも実際に体験すると悲惨としかいえない状況だ。
だってクラスメイトがすべて女の子ということは、僕一人が異分子。
ということは、体内に侵入したウィルスが即行で駆逐されるように、僕の存在もまさにそれと同じ。例えば体育の時間になると、

「あんたわざとダラダラして私たちの着替えを見ようとしてるんでしょ！　さっさと出て行きなさいよ変態男っ！」

などと罵倒されてその場から逃げ出し、ランチタイムの時は女の子特有のハイスピードトークで盛り上がる教室内にいることがいたたまれず、今度は学食へと逃げる有様だ。

しかもまだ弊害がある。
いきなりこの女人満載のクラスに入れられてしまったため、他のクラスの男子と仲良くなるきっかけを未だつかめていない。入学して二ヶ月が経とうとしているのに僕はスクール内で孤立を深めていた。

毎朝いつも気が重い。
ベッドから起きる度に“スクールを辞めたい”と思うようになり、家を出た後の足取りは、まるでふくらはぎに鉛のシートをベッタリと貼り付けたかのように日に日に重力が増してゆく。
しかしまさか入学したばかりで退学したいなどと周囲に言えるわけもなく、今朝も灰色の溜息をついてスクールへと向かった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「お！　今日も懲りずに来たか、エロタイセー！」

相変わらず声が大きい女の子だ。……声だけじゃなくて胸も相当大きいけど。
重い足取りで教室へ入った僕に、褐色の肌にちょっぴりクセ毛なミディアムヘアのクラスメイト、マツリ・テンマが目の前に現れ、話しかけてくる。
彼女は何の根拠もなしに僕を勝手にエロ呼ばわりし、からかって弄ぶ、少々バイオレンス的な傾向色のある女子だ。

「なぁなぁ！　今日はエロ１２０％で生きているお前に最高な女絡みのニュースがあるぞ！　聞きたいか？　聞きたいだろ？」

テンマさんはグイと顔と胸を近づけ、猫のような目で僕の顔を覗

きこむ。ここで「うん」と頷いてやればこの娘の機嫌を損なわないことは分かっていた。でも僕にだって譲れないものはある。だから顔を背け、素っ気無い声で返答した。
「いや、別に聞きたくないよ。それに僕、エロ１２０％でなんて生きてないし」
「はぁ〜！？　何だよその言い草は！？」

……マズい、テンマさんの表情が完全に変わった。吊り目の角度が著しく上昇してる。

「力もろくに使えないくせにこのあたしに逆らうなんていい度胸じゃん！　身の程を知らない腑抜け野郎に身体で教えてやるよ！」
そう叫んだテンマさんの猫のような目の瞳孔が一気に開く。その瞬間身体が急に軽くなった。
テンマさんの念動力で宙に浮かされた僕の身体は急激に上昇し、教室の天井に背中を強打する。天井が大きく揺れたために蛍光灯に付着していた埃が僕の目の前を薄く舞った。

「痛っ…！」

耐えるつもりだったが、思わず苦悶の声が漏れてしまった。つい声を出してしまったミスをカバーするため、できるだけ無表情を装う。
「ハハッざまぁないね！　悔しかったら反撃してみな！」
必死なポーカーフェイスの僕とは対照的に、宙に浮かされている僕を下から見上げたテンマさんは勝利に酔った表情で僕を煽ってくる。
テンマさんの得意なＰＳＩはこのテレキネシスだ。恐らくその分野では彼女がこのクラスで最強だろう。中肉中背の標準体型とはいえ、一応は男子である僕をここまで軽々と持ち上げることができる

のだから。
「どうだ！　効いただろ！？」
テンマさんは得意げな表情で被害者である僕に確認する。
早朝一番のこの喧嘩騒ぎにクラス内は騒然としているが、誰も彼女を咎めない。皆、好戦的なテンマさんに逆らうと面倒だと分かっているからだ。触らぬ神に祟りなし、ってところなんだろうな。
「どうだ！　反省したか、エロタイセー！　ＹＥＳかＮＯで答えろ！」
腕組みをしたテンマさんが今度は謝罪を要求してきた。
ここで彼女が望む答えを言わなければ恐らくこの制裁はまだ続いてしまうだろう。だから僕は言った。はっきりと。
「反省してない。だってする必要全くないし」
「お前っ…！」
テンマさんがギリリと奥歯を噛み締めた音がここまで聞こえてくる。
「もうちょい痛い目を見ないと分かんないようだな！」
身体の前面を圧迫していた力が唐突に消えた。宙に浮いていた身体がグラリと揺れ、即座に急降下が始まった。多分今度は念動力を背面に移し、このまま一気に床に叩きつけるつもりだろう。
そう思った僕は少しでもダメージを減らそうと両腕をクロスさせ、落下に供えて体勢を整えた。しかし床に身体が衝突する直前で落下がピタリと止まる。
「甘いっ！」
そうテンマさんが叫ぶと先ほどよりも加速したスピードで身体が上昇する。
もう一度背中から天井に叩きつけるつもりだったのか……。だが

両腕で背後を上手くカバーすることは出来ない。このままもう一度背中を強打するしか道は無かった。
激突した衝撃でうまく呼吸できなくなるかもしれない。せめて少しでもダメージを減らそうと、背中の筋肉に力を入れて次なる衝撃に備える。

――　テンマさんほどの力が無くてもいい
　ほんの少しだけでも僕も自在にＰＳＩを使えたら

思わず内心で愚痴る。
しかしこんな不甲斐ない自分が情けなくはあったが、テンマさんの言いなりにならなかったことに対しての後悔は微塵もなかった。

「行くぜ！　耐えて見せろよエロタイセー！」

激が飛んできたので奥歯を思い切り食いしばる。
しかし僕の背中は天井にめり込まなかった。
激突するその刹那、別の人間が放ったＰＳＩが僕の背後で発動し、背中をガードしてくれたからだ。そしてそれとほぼ同時に「うわぁっ！？」と叫んだテンマさんが壁際まで吹っ飛ぶ。

テンマさんからかけられていた念動力が解けたせいで身体が急に軽くなる。引力に導かれるままに真下の床に両足で着地したが、足元から伝わってきた衝撃で先ほど強打した背中がズキリと痛んだ。
「いってー！　誰だよ！　今あたしを突き飛ばした奴は！」
不意打ちで壁に激突したテンマさんが怒りの形相で立ち上がり、クラス内を睨みつける。

「私よ」

教室の自動扉付近から聞こえてきた涼やかな声。その声にクラス全員が振り返る。

腰近くまであるサラサラとした亜麻色の髪をなびかせ、凛とした表情で立っている上品そうな女の子。

この女の子が誰かは分からない。

だけど以前にどこかで出会ったことがあるような気がすごくする。

この気持ちを単なる僕の気のせいだ、として片付けるのは無理そうだ。だって、今戸口に立っているその女の子、僕の顔を遠慮など一切ナッシングの超強烈な視線でじーっと見つめてきてるから。形のいい少し薄めの桜色の唇が、何かをものすごく言いたげな形になっている。

でもこんな綺麗な女の子の知り合いなんて僕にはいない。誰だっけ、この娘……？

「誰だ、お前？」

見知らぬ顔だったため、テンマさんが怪訝な表情をする。

戸口に立っていた女の子は一度僕から視線を外し、テンマさんから浴びせられた質問に答えた。

「誰って……、私もここのクラス生だけど？」

「じゃあお前が今日から来るっていう転入生か！」

「言っておくけど転入生じゃないわ。元々四月から来るはずだったんだけど、ちょっと外せない用事があって二ヶ月ほど休学してただけ。……それよりあなた、なぜタイセーを苛めていたのかを三秒以内で速やかに答えていただけるかしら？」

今の台詞の後半に威圧的なオーラがかかった事に気付いたのは僕だけだろうか。
とても上品で丁寧な口調なのになぜか背中がゾクリとする。
目力がすごくある女の子だ。
あの大きくて澄んだ目でキッと睨まれたら、何も悪い事をしてないのに「生まれてきてごめんなさい」と即、謝ってしまいそうなくらいの迫力がある。

「あたしがこいつに何をしようとお前には関係ないだろ！　それよりお前、なんでこの男を知ってるんだよ！？」
「どうして知っているのか、ですって？」
肩口にかかるストレートの髪を静かに後ろに払った後、即行で答えが返ってくる。
「それは幼馴染だからよ。……ね、タイセー？」
気高ささえ感じるその凛とした表情で真っ直ぐ僕を見るその姿。
ようやく思い出した。

――　カリン・タカツキ。何年ぶりかで会った、僕の幼馴染。

告白

「……君、本当にカリンなの？」

幼い頃とだいぶ感じが違っているため、僕は念のためにそう問い返した。

「それ、本気で言ってるの？　冷たいわね、タイセー」

カリンの声が一気に硬くなり、テンマさんだけに向けられていた厳しい視線がついに僕にも向けられる。

予知能力が発動したわけではないけど、体内でなぜか危険警報が鳴った。

「タイセー……、久しぶりの再会とはいえ、私はあなたの記憶からあっさり消えてしまうくらいの儚い存在だったとでも……？」

「そそっそういうわけじゃないけどっ！」

ヤバい！　彼女の目ヂカラ、ハンパじゃないですっ！　カリンの眼光のあまりの鋭さに萎縮したため、口調までどもりがちになる。

「じゃあどういうわけなの？　分かるように説明してくれるかしら？」

カリンは細い腰に手を当て少し胸を反らすと、眉を片側だけキッと吊り上げる。

な、なんですか！？　この上品なモードだけど、でもしっかりと詰問されてる感じは！？

「かかっ、かっ、感じがだいぶ変わっているからっ！」

「それはいい意味で？　それとも悪い意味かしら？」
尋問が終らないぃーっ！！
出会って三分、僕らの間に強者と弱者の関係がいきなり成立した。きっと今の僕なんてコブラに一飲みされる寸前の小鳥の卵みたいな立ち位置だろう。
「そ、それはその、ななっ、なんていうかその、いいとか悪いとかじゃなくて、ぜっ、全然違う意味でっ！」
「全然違う意味？　一体どういう意味かしら？　ぜひ聞きたいわ」
「どっ、どういう意味って言われても……」

――　現在の僕の心境、ヘビに睨まれたカエル。思わずナメクジの登場を天に祈ってしまった。

「ちょっと待ちなっ！」
そんな僕の不純な祈りが、恐らく神界に曲がりくねって届いてしまったのだろう。天より遣わされたナメクジ役として、僕とカリンの間に怒り心頭のテンマさんが割り込んでくる。
「このあたしを差し置いて勝手に盛り上がってんじゃねーよ！」

あぁ、でもこれじゃ三すくみにならない。下手をすれば三つ巴じゃないですか神様。

「いいか転入生！」
テンマさんは足音荒く教室の床を踏み鳴らしてカリンの正面に立ちふさがると、人差し指を突きつけて毒づいた。
「あたしはこのエロ男をいたぶるのが楽しいんだ！　あんたもこのクラスで平穏に過ごしたかったらあたしに逆うなっ！」
「あら、タイセーがエロ男ですって？」
カリンは少しだけ眉根を寄せ、考え込むような表情で口元に手を当てる。

「……そうね、当たらずとも遠からずの部分は確かにあるかも。それは否定できないわ。でもだからといって、タイセーに乱暴するのは私が許さない。よく覚えておくことね」
「よく覚えておけだって！？」
カリンの尊大な口調に刺激されたテンマさんの目がまた光る。
「あたしに立てつくバカはこのエロ男だけかと思ってたけど、ここにもいたとはな！　さっきは油断してやられたけど、今度はそうはいかない！」

……この感じは……？

肌の表面が粟立つようなこの感覚。
感知能力も無いはずなのに、なぜかこの時は皮膚の表面が教室内に漂うオーラの逆流を読み取った。
「カリンっ！　危ない！！」
条件反射で思わず叫ぶ。しかしカリンの身体に何も変化は起きなかった。
「あなた、念動力が得意なのね」
カリンは少しだけ口元に笑みを浮かべると冷静な声でそう告げる。
「でもある程度のレベルで出せるのはまだそれだけみたいね。じゃあ私には勝てないわ。……そうね、例えばこれを防げるかしら？」

「わぁぁぁぁぁぁっ！？」

再びテンマさんが後方に吹っ飛んだ。しかし壁に大激突する直前でその勢いは落ちる。恐らくカリンが何かしらの手心を加えたのだろう。
「いいこと？　今後タイセーに手を出すことは許さないわ。もし手を出したら次は本気で潰すわよ。覚えておきなさい」
先ほどは言葉だけの威圧感だったが、今は全身からそのオーラが

発せられている。内から滲み出るカリンの迫力と力の差を見せ付けられたテンマさんを始め、クラス内全員が沈黙した。
しかしその数秒後、明らかにこの場の空気を読めていなさそうな女の子がカリンに向かって呑気な質問をする。

「あのぅ～、なんだかぁ、タイセー君をかばう今のあなたにぃ、すっごーく鬼気迫るものを感じたんですけどぉ、その理由はぁ、タイセー君と幼馴染だから……、なんですかぁ？」

確かこの子の名はクルミ・カシムラ。
ツインテールの髪型に、甘えた子供のような喋り方がかなり特徴的だったので割りとすぐに名前を覚えた子だ。
「私がタイセーを庇う理由……？」
カシムラさんの質問に、カリンは何を今更、といった表情でフッと笑った。
そして僕の側にまでつかつかと靴音高く歩み寄ってくると、またしても僕の目を真っ直ぐ見たままできっぱりと言う。

「それは私がこの男、タイセー・イセジマを好きだから。好きな男を守るのは惚れた女の当然の義務だと思うわ」

カリンの華奢な手がスッと上に上がり、僕の両頬をゆっくりと挟み込む。
「……ねぇ、タイセー？」
「すごぉ～い！　まさかぁ、このスクールでダントツＮｏ，１のダメダメなタイセー君を好きな人がいたなんて驚きですぅ～！」
「失礼な事を言わないで」
僕の両頬をその手でしっかりと押さえたまま、カリンはカシムラ

さんに対して静かなる抗議をする。
「タイセーはダメな男じゃないわ。まだ自分の潜在能力に気付いてない、ただそれだけのことよ。タイセー、これからは私とずっと、未来永劫まで一緒にいましょうね」
カリンの手がさわさわと僕の頬を優しくさする。
一方、僕の心臓は爆発寸前だ。
幼い頃も可愛かったけど、会わなかった間に更にメチャクチャ美少女になってるし、何年ぶりかで久しぶりに会ったと思ったらいきなり告白され、しかもいきなりこのボディフィット攻撃。僕のキャパは既に限界値を大幅に超えていた。
しかしカリンはまだ怒涛の追加攻撃をしてくる。
「……さぁタイセー、いくらトウヘンボクなあなたでも、これだけ伝えれば私の気持ちを余すところなく隅々まで理解できたわよね？
ならここで言いなさい。“　僕もカリンが大好きだよ　”　って。今すぐによ」
「えええーっ！？」
カ、カリンってこんなに積極的な女の子だったっけ！？
昔を必死に思い返しても、おとなしくていつもニコニコと笑っていたカリンの記憶しか浮かんでこない。ガチガチに固まっている僕を見て、カリンは「本当に変わってないわね、タイセー」と穏やかに笑う。

「でも安心したわ。私はあなたのそういう所が好きだったんだもの」
左頬に柔らかい唇の感触。
軽く爪先立ちしたカリンが僕の頬にキスしてきた。そしてクラス中の女子が見守る中、大胆に身を寄せてくる。
「だから私も焦らない。これからゆっくりと愛を育んでいきましょ

う。ね？」

え、えーと、もしかしてこれは夢…なのかな？

オーソドックスな確認方法、“　頬を思い切りつねる　”　を行おうと思い立つ。だがその前に先ほど天井に強打した背中を鈍く走る痛みが、これが紛れもない現実であるということを僕に教えてくれていた。

メデューサ現る　【前編】

カリンとテンマさん、この二名のアマゾネスによるバトル終了後、クラス内はやっといつも通りの騒々しさを取り戻した。

「私、ここに座るわ。いいわよね？」

当然のような顔で僕の隣席に座ろうとするカリン。でもその席は空いている席じゃないんだ。

「あっ、そこはコダチさんの席だから」

僕が慌ててその行動を制しても、カリンは涼しい顔で席を立とうとする気配すら見せない。

「でもこの席の子はまだ来ていないみたいだし、私が座ってもいいじゃない。それともタイセーはまさか私の隣がイヤだとでもいうの？」

カリンにキッと横目で睨まれ、そのアイビームの強烈さにたじたじになる僕。この身が石化しそうな勢いだ。

「まっまさか！　そんなことないよ！」

「なら決まりね。ここの席の子が来たら私が座るはずだった席に座ってもらいましょう」

「は、はい…」

……しかし何という見事なまでのゴーイングマイウェイっぷりなのだろうか。突き進みたいルートに多少の邪魔な置石があっても、君はこうやって強引に跳ね飛ばしていくんですね。

「ねぇタイセー、今日はずっと教科書を見せてくれる？」

一応は尋ねる形を取っているけど、カリンは僕の返事を待たずに

自分の机と僕の机をピッタリとくっつけ出した。
「カリン、教科書全部忘れてきちゃったの？」
「ううん、あるけど。でもタイセーと一冊の教科書を一緒に見たいの」
僕に向けられたカリンの笑顔を見つめて思わず絶句。カワイイ女の子からこんな事を言われて笑いかけられたら、どんな男だって間違いなく落ちちゃうよ……。
あ、そういえば僕の隣の席だった女の子、ランコ・コダチはよく遅刻したり無断欠席をする人なので、もしかしたら今日はこのまま来ない可能性もあるかもしれないな。でももし彼女が後で登校してきたら、まずきちんと謝って、カリンと席を替わってくれないか頼んでみよう。

「タイセー、どこに行くの？」

急に僕が席を立ったので、カリンも椅子から腰を浮かしかける。ついてこられたら少々困るので急いで理由を言った。
「トイレだよ」
「あ…、行ってらっしゃい」
カリンが恥らいながら軽く手を振る。良かった、さすがにトイレにまではついてこないか。
早くしないと一時間目が始まってしまう。
トイレから急いで戻ると教室の自動扉がなぜか開かなくなっている。あれ？　もしかしてロックされてる？　扉の前で耳を澄ましてみると、中で女の子達がキャーキャーと騒ぐ声が聞こえてきた。
そうだ、今日の一時間目は体育だった！
教室内ではすでに女の子達の着替えが始まっているのか。僕は自分のジャージを取る前に締め出されてしまったみたいだ。

フルリアナスには男子、女子それぞれのロッカールームが校内にちゃんとあるのだが、僕のクラスは女子ばかりなので、皆ロッカールームまで行くのを面倒くさがってこうして教室内で着替えを始めてしまうのだ。
あーあ、どうやら女子全員の着替えが終るまでここで待っていなきゃならないみたいだな。
そう思った時、教室の扉が急に開く。

「はい、タイセー！」

扉から出てきたのはまだ制服姿のカリンだった。その手には僕のジャージが入った袋を持っている。
カリンから体操着を受け取った僕は「ありがとう」とお礼を言った。
「タイセーも早く着替えてきたら？」
「うん、そうするよ」
そう言って去りかけると、カリンは「待ってタイセー！」と僕を呼びとめ、耳元に口を寄せてくる。条件反射で顔が赤くなった。
「あのね、今日の体育、タイセーにとって忘れられない授業にさせて、あ・げ・る」
「えっ…、そ、それどういうこと！？」
「後でのお楽しみよ♪　今日の体育はグラウンドの裏手に集合みたいだから間違えないようにねっ」
そんな意味深な言葉と魅惑的なウィンクを残し、カリンは着替えをするために再び教室の中に入っていってしまった。忘れられない授業ってなんだろう……？

ジャージが入った袋を片手に男子専用ロッカールームに向かう。
カリンにも教えられたが、今日の体育はグラウンドの裏手に集合することと教室内の連絡ボードにイブキ先生からの直筆メモが貼ら

れていた。
グラウンドの裏手って確かメッチャ高く切り立ったガケがそびえてなかったっけ……。あんなところに集合して今日の体育は何をするんだろう？

メデューサ現る　【中編】

グラウンドの裏手に行くと女の子達はまだ誰も来ていなかった。お喋りしながらの着替えだからきっと時間がかかるんだろう。
目の前にある切り立ったガケの前に、かなり大きくて分厚いマットが置いてある。というか、敷いてある。そのマットを見た時、なんだか嫌な予感がした。この場所でこれを使って行う授業って、まさか……。

「恐らくバンジージャンプ」

いきなり後ろから声が聞こえてきたのでビックリして振り向く。するとそこには同じクラスのヨナ・コシミズがいた。
コシミズさんの声、久々に聞いたなぁ。必要時以外ほとんど喋らないので時々存在を忘れそうになる、細くて小柄な女の子だ。

「今、そのマットを見て　“今日の授業は何だろう”　って考えていたんでしょ」

切れ長の澄んだ瞳を僕に向け、コシミズさんは肩口までの艶やかな黒髪を首の後ろでまとめだす。
「コシミズさん、今僕の思考を読んだの！？」
この女の子の一番得意なＰＳＩ（サイ）は精神感応だ。
でも人の心情を読み取れる力は使える側としてはとても魅力的だけど、勝手に読まれる側はたまったもんじゃない。プライバシーの大侵害もいいところだ。

「読んでいない」

コシミズさんは素っ気無い口調で否定する。たぶん僕が狼狽したのでとりあえずこの場は読んでいないということにしたのだろう。
髪をシンプルに後ろで一束に縛ったコシミズさんは、僕の前にまでつかつかと歩いてくると僕の顔をじっと見つめる。
「な、何？」
「いいから黙って」
コシミズさんが僕を見上げ、そう命令してくる。
「だ、だってそんな急に近くにきてじっと顔を見られたら気になるよ」
「……」
完全に無視された。
コシミズさんはしばらく僕の顔を穴の開くほど見つめていたが、ふぅとため息をつくと視線を落とす。理由は分からないけどそこまであからさまに落胆の表情を浮かべられたのでちょっぴり心が傷ついた。
「……あなたって不思議ね」
「え？」
「だってＰＳＩが全く使えないのにこのスクールにいる」
「うっ」

これは効いた。
触れられたくない急所を真正面からえぐられたのでライフポイントがほぼゼロになる。そして言葉を無くす僕に対し、コシミズさんの淡々とした言葉は続く。
「でも、きっとあなたがここにいるのは意味があるからに違いないわ。だって私」
そこで言葉がなぜか途切れる。
「だって、何なのさ？」

「……なんでもない」
「なんでもないってことはないだろ？」
そう聞き返すとコシミズさんは再び黙り込んだ。
「教えてよ。言いかけて止めるなんて気になるよ」
それでもコシミズさんは答えなかった。代わりにふわりとした感触がくる。コシミズさんが急に僕の身体にもたれかかってきたせいだ。
「どうしたの！？　具合でも悪いの！？」
「一分、いや三十秒でいい。このまま動かないで」
コシミズさんはそう命令するとその細い両腕に力を入れて僕に思い切り抱きついてきた。
「えぇっ！？　な、なにするんだよ！？」
身をよじって脱出しようと思ったけど背中に巻きついた腕が外れない。小柄な彼女にこんな力があるとは意外だった。たしかこの娘は念動力系は得意じゃないはずだけど、もしかしたら今はそっちの力も多少プラスしているのかもしれない。
「コシミズさん離してよ！　皆が来たら誤解されちゃうよ！」
「駄目」
「何でさ！？　それにそんなに締め付けられたら痛いんだけど…」
「いいからあと少し」
「だから何が！？」

いや、今はこんな押し問答をしている場合じゃない。
そろそろ他の女子も来そうなので早くコシミズさんから離れないと……。

「離してってば！」
「あっ」
かなり強引に振りほどこうとしたため、コシミズさんがバランスを崩して後ろに倒れる。慌てて背中に手を回して抱きとめようとし

たけど、結局二人一緒に分厚いマットの上に倒れこんでしまった。
一瞬だけ僕の体重がコシミズさんにかかってしまい、慌てて起き上がる。

「ごめん！　大丈夫！？　痛かった！？」

でもコシミズさんは僕の身体の下でじっと動かない。
マットに両手をついてコシミズさんの顔を覗きこむと、その髪と同じ、黒く濡れたような彼女の瞳に吸い込まれそうな錯覚に陥る。
「まさかどこかケガしちゃった……？」
コシミズさんは僕の顔を真下から見上げると、「ちょっとだけ分かった」と意味不明のことを呟く。
「ねぇだからさっきから何を言ってるのさ？」
コシミズさんが変なことばかり言うのでついこの体勢のままで話しかけたのがマズかった。

「……あらお邪魔しちゃったかしら？」

こ、この威圧感は……！
恐る恐る肩越しに後ろを振り返ると、そこにはとてつもなく冷たい微笑を浮かべた幼馴染が立っていた。

メデューサ現る　【後編】

「カ、カリン！！」
「知らなかった、あなたがその娘とそういう関係だったなんて」
カリンはニッコリと僕に笑いかける。でもその目は一切笑っていないのが恐ろしい。
おかげで風で大きくなびいているカリンの綺麗な亜麻色の髪が、今の僕にはメデューサの蛇髪の群れに見えてしまっています。

……うぅ、僕がこれから行う事は男子にあるまじき行為かもしれない……。

が、やっぱり命は惜しいんだ！　しかもこれは冤罪だし！　だから背筋を豪快な勢いで冷や汗が流れてゆく中、なりふり構わず必死に言い訳をすることにした。
「ちっ、違うよカリン！　コシミズさんが急に抱きついてきたんだ！　それで振りほどこうとしたらここに倒れちゃったんだよ！」

「嘘」

コシミズさんがゆっくりとマットから起き上がる。そして思わせぶりな流し目で僕を見つめ、クニャリとした悩ましげな仕草で乱れた黒髪をかきあげた。
「あなたが抱きついてきて　いきなり押し倒してきたんじゃない」
「えええええーーー！？」

なっ、何てこと言うのさコシミズさん！
君は誇大表現どころか事実を捏造していますよ！？　これは最早

ＪＡＲＯに通報していいレベルだっっ！

「そう、タイセーが押し倒したのね」

……あれ？

意外にもカリンはまだ笑顔だ。だけど、彼女の背後でどんどんと殺気のようなオーラが濃くなってきているように感じるのは僕の気のせいだろうか。

カリンは左肩にかかった髪を静かに後ろに払うと、穏やかな海のさざ波を思わせるような優しい声で言う。

「タイセー……、今日の体育はきっとあなたにとって一生涯忘れられない授業になるわ……。良かったわね……」

あわわわわわ！！　ねっねぇカリン、上辺はあくまで穏やかですが、その台詞の意味、絶対さっきと違うよねっ！？

さっきはキュートなウィンク付きで、「すっごく楽しいコトをしてあ・げ・る♪」的なラブコメモードだったのに、今は「覚悟なさい　あなたの命は風前の灯よ」的な、情け無用の一刀両断モードになっているようなのですが！？

斬られる。絶対に斬られるぞこれは。

どうやらここで人生のＴＨＥ　ＥＮＤフラグが盛大に立ってしまった僕は、慌てて全ての元凶であるコシミズさんに猛抗議をする。

「ひどいよコシミズさん！　なんでそんな嘘言うんだよ！」

「嘘じゃない。あなたが私にせまってきた。それが事実」

「違うって！　コシミズさんが勝手に抱きついてきたんだろ！？」

「自惚れないで。あなたのようなＰＳＩを使いこなせない男の子を好きになる女の子がいるわけないじゃない」

「！」

あぁコシミズさんにピシャリと言われたその言葉、今回もグッサリ刺さりました。この毎日せっせと働く健気な心臓の中心にまで。
なけなしのプライドが音を立てて砕けていく。この場からすぐに消えてしまいたかったけど、あいにく僕は瞬間移動（テレポート）も使えない。
……そうさ、コシミズさんの言う通りだよ。こんな落ちこぼれで駄目な人間を好きになってくれる女の子なんているはずがない。

「いるわよ、ここに」

僕のプライドが完全に崩れ落ちるのを間際で止めてくれたのは、カリンの凛とした声だった。コシミズさんがカリンへ視線を向ける。
「それはもう知ってる。だからあなた以外で、という意味」
「ヨナ、あなたはまだタイセーのことをよく知らないからそんな風にバカにできるのよ」
「……あなた、私の名前知ってるの？」
「えぇ。二ヶ月も休んでしまったから、クラスメイトの情報は全部頭に入れてきたわ。それよりヨナ、今あなたはタイセーをバカにしたけど、きっとあなたもいずれタイセーの虜になるわ。でもタイセーは誰にも渡さないから覚えておく事ね」

するとコシミズさんはリスのような仕草で小さく首を傾げた。
「虜になる？　それはありえない」
「愚かね、ヨナ。世の中に絶対にありえないことなんて何もないのよ。見ていなさい、いずれあなたもタイセーに魅かれるようになるわ。きっとね」

カリンは余裕すら感じられる表情ではっきりとそう断言した。

どうしてそこまで自信満々に言えるのか、全く分からない。
そしてどうしてそこまでカリンは僕のことを好きなのかも、全く分からなかった。

迷うな　感じろ

ようやくクラス全員が揃った頃、僕らのクラス担任であるイブキ・モリ先生が眼鏡のレンズを拭きながらやってきた。あーあ、せめて担任くらい男の人だったらよかったのになぁ。……あ、イブキ先生、また髪切ったんだ。

「では体育の授業を始めますっ！」

ショートカットのイブキ先生はピカピカになった眼鏡をかけると、１７５センチの長身を生かし僕らをグルリと見渡して元気な声で授業を開始する。

「今日は一人ずつ順番にガケの上から飛び降りて、あのマットに着地する前までにテレキネシスでうまく身体を浮かせられるように頑張ってもらいます！　目指すはマットギリギリでの寸止めっ！　成功するポイントは、“あぁ～んっダメダメェ～！　落ちちゃう落ちちゃうぅぅ～！”ってあまり考えないで、精神集中することよ♪」

イブキ先生、張り切ってるなぁ……。

“　寸止め　”　って言ったり、“　あぁ～んっ　”　の部分をヘンに臨場感たっぷりな感情をこめてあえぐように言うから妙にエロチックだったよ。イブキ先生ってＨの時に思わずああいう風に叫んじゃうタイプなのかと一人妄想モードに入りそうになってしまう。……こんなことを考えるからテンマさんに　“　エロタイセー！　”　なんて言われちゃうのかなぁ。

それに気合の入ったイブキ先生には悪いけど、今のアドバイスは

シンプルすぎて僕には全然役に立ちそうに無い。何せ僕はＰＳＩが使えないんだから。

「じゃあ早速一人目行ってみましょう！　ではタイセーくん、張り切ってどーぞっ！！」

えええええっ！　いきなり僕から！？　僕、何も力が使えないんですけど！？　そのまま一直線にマットに激突しちゃいますよ！？

イブキ先生の監督責任とか職権乱用とかそういう教育的問題に発展しないだろうかと勝手に心配してしまう。でもそれもこれも僕みたいな落ちこぼれな生徒が先生のクラスにいるからなんだよな……。イブキ先生には申し訳ない気持ちで一杯だ。

「どうしたのタイセーくん？　早く上に行ってね！」

イブキ先生の聖母のような笑顔がやさぐれたちっぽけな心に染みる。

もうこうなったらヤケだ！！　もしこれで僕が大ケガをしたとしても、先生には絶対に迷惑をかけない！！　僕が先生の制止もきかずに勝手に飛び降りたことにしてやる！！

ガケに向かう途中、チラッとだけ後ろを振り返ってみた。しかし女の子達の中にカリンの姿が見当たらない。まだ怒ってるのかなぁ……。でもさっきのは全部カリンの誤解なのに……。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ガケの上に着いた、けど……。……たっ、高いよこれ！？
下から見ていた時よりも全然デンジャー感が違います！　完璧に足が竦んでしまっているのは僕がチキンなのではなく、あまりにも高すぎるせいだと信じたい。

「いいわよタイセーくーん！　どーんと飛び降りてごらんなさぁーい！！」

きっ、気軽に言いすぎですっ、イブキ先生！！
でも僕がやらないといつまで経っても授業が進まないのも確かだ。後がつかえちゃうからクラスの皆に迷惑をかけてしまう。
それにこんな僕でもプライドの切れっ端ぐらいは一応ある。だからギャラリーはすべて女の子、というこの大舞台で、怖くて飛び降りられないなんて超カッコ悪いところを見せたくなかった。どうせ同じ恥をかくのなら、空中をぶざまにもがき落ちてマットに顔面をぶつけてもんどりうつ方が数段マシだよ。

「タッ、タイセー・イセジマッ、行きまぁーすっっ！！」

飛び降りる勇気を体内に呼び込むために大声で自分の名を宣誓すると、女の子達の半数以上がクスクスと笑っている。
「プッ、何あれ、ウケル～！」
「ダサッ」
「いかにもヘタレって感じだよね～っ！」
……うぅ、飛び降りる前から恥をかいてどうすんだ。下から風に乗って聞こえてくる嘲笑に、奮い立たせた勇気が萎えていく。
「大丈夫よタイセーくん！！　マットにぶつかりそうになったら私

が止めてあげるからーっ！！」

イブキ先生が笑顔で手を振っている。

そっか、本当に危なくなったら先生がサポートしてくれるのか。一気に安心した。

よしっ気力再充填だ！　浮く事なんて夢のまた夢だけど、せめて落下速度をわずかでも遅くできるよう集中だ！！

ガケの淵につま先を合わせる。い、行くぞ！！

「いい集中力ね」

いきなり背後からかけられた声に慌てて振り向く。

「カリン！？」

いつの間に来たんだろう。気配に全く気付かなかった。ガケから飛び降りようとしていた僕にカリンが冷静に告げる。

「その集中力を保ちなさい」

「応援してくれるのカリン！？」

良かった！　もう怒ってないみたいだ！　……と思ったのも束の間、カリンは氷のような微笑を浮かべて言い放つ。

「それだけ意識がそちらに集まれば心を読みやすくなるわ」

「そ、それどういう意味！？」

「あら、タイセーは読心術の鉄則を知らないのかしら？　テレパスの授業で習ってるはずよ」

カリンが静かに近づいてくる。

「相手の心をノイズ無しで綺麗に読み取るには、その対象者の意識を別の方に集中させることでしょ。だからタイセーが転落から自分

の身を守ることに集中してくれればくれるほど、私が心の奥底を読みやすくなるわ」
「えぇーっ！　僕の心を読んでどうするのさ！？」
「そんなの決まってるじゃない」
復讐の女神はその背後に殺気を従え、また僕に冷たく微笑みかけてくる。
「さっきヨナを押し倒して何をしようとしていたのか、あなたの深層心理を徹底的に暴くためよ」
「えええええええーーーっ！！！！！」

「タイセーくーん！！　大丈夫！　怖くないから早く飛び降りなさーい！！　先生がついてるわよー！！」

ガケに背を向け、なかなか飛び降りない僕にイブキ先生が声援を送ってくれる。
違うんです違うんですイブキ先生っ！！　僕は怖くて飛び降りられないんじゃないんです！
先生からは見えてないのだろうけど、僕の前方にはカリンがいて、今はガケ下にダイブよりも、もっと危険な目に遭いそうになってるんです！

「……さぁ早く飛び降りなさいタイセー。私もすぐに後を追うから」

鷹揚とした仕草で腕を組み、威圧感を携えてカリンが僕のすぐ目の前に立つ。
予知能力はないけど、今なら自分の未来が分かった。神様、あと数秒後にぼくはこの美しきネメシスの業火に焼かれてしまいます、たぶん。

迷うな　突っ込め

「さぁ早く飛びなさいタイセー。次が来てしまっているわ」

カリンがクールな声で僕を急かす。

「え、ホント！？」

ガケ横を見てみると、ついさっき僕が来た登り道を駆け足で上がってきているのは……、Ｏｈ　Ｍｙ　Ｇｏｄ！　テンマさんだ！

マズイな、よりにもよってあの人か……。カリンとテンマさんがここで顔を合わせたらまたどんなＰＳＩバトルが始まるか分からない。そもそも僕はあの娘が苦手だし。

よしっ、ここはこの手で行くしかないっ！！　わざと驚いた顔をしてカリンの背後を指差し大声で叫ぶ。

「あ！！　カリンの大好きなわかめごはんだっ！！」

カリンがバッと後ろを振り向いた瞬間に、ていやっとガケから飛び降りる。

やった、上手くいった！！　小さい頃のカリンが好きだったものを思い返してみて一番最初に出てきたのを言ってみたけど大正解！！

よーし！　間違っても力を使って落下速度を遅くしようなんて考えないぞ！！　慣性の法則に従ってマットまで一気に落ちてやる！！　カリンに心を読まれてたまるもんか！！

「うわっ…！」

考えていた以上に空気の抵抗が凄い。襲いくる空気を強引に身体で切り裂いて突き進む感じだ。

みるみる内に青いマットが近づいてくる。早く早く！！　カリン

に追いつかれる前に！！

「ずいぶんと子供騙しな手を使うのね、タイセー」

ひぃぃっ！？　頭から急降下中の僕の顔の前に涼しい顔をしたカリンがいた。

「あんな見え透いた嘘にこの私が引っかかるとでも？」

「あ、あぅ…」

「まぁいいわ。さぁいらっしゃい、あなたの全てを見せてもらうわよ」

「わぁぁっー！？」

“地面に向かって真っ逆さまに落ちている最中に美人な幼馴染に抱きつかれる図”、ここに完成です。空中なのでほとんど意味は無いけど見苦しくジタバタと暴れてみる。

「カッ、カリン！！　ダメだよっ！！　僕の心（なか）を勝手に見ないでよーっ！！」

しかしカリンからの反応は無い。僕の背中に手を回し、僕の胸に顔を埋め、しっかりと目を閉じている。読んでますか！？　読んでおられるのですか！？

「カリン！　ねぇカリンってば！！」

何度呼びかけてもカリンの身体はピクリとも動かない。……オワッタ。僕の人生、本当にここでオワッタ。

恐らく全部見られてる。〇秘な情報からセキララ情報まで、接触（サイコ）感応（メトリー）で逐一見られている最中と思われます。今は空中だからできないけど、もし地面に立っていたら背中に負のオーラを背負って四つんばいにガックリと突っ伏したい気分だ。

……あーっ！　もういいよ！　そんなに見たけりゃ好きなだけ見ればいいさ！！
僕がどんな目で久々に会った幼馴染の君を見ているのか、そのダークな部分まで知って幻滅してくれよ！！　でもたったわずかの間だったけど、カリンみたいな綺麗な女の子に告白されて嬉しかったよ！！　だから最後にもう一つだけ君との良い思い出をもらうからね！！　これは僕のプライバシーを君が勝手に侵害した迷惑料ですっ！！

「カリンっ！！」

カリンの名を呼んで思い切りその頭と身体を抱きしめる。
うわぁ…肩細いなぁ……！　それにすっごく柔らかい！
あぁ、落ちこぼれな僕の人生でこんなカワイイ娘を抱きしめる事ができるなんて夢にも思わなかったよ。情けないけど目尻に嬉し涙が滲んでくるのを止められない。
お父さん、お母さん、僕を創ってくれてありがとう。あなた達の息子は今最高に輝ける瞬間を満喫しています。……もうあと何秒か後には今抱きしめている女の子にボコボコにされると思うけど。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

……あれ？　落下速度が落ちているように感じるのは気のせいかなぁ……。

いや、気のせいじゃないっ！　カリンをムギュムギュしている喜びで夢中になっていたので今まで気付かなかったけど、速度がどんどん落ちてきている！　もしかしてイブキ先生が危険と感じて僕らをレスキューしてくれたのかな？　でも何てラッキーなんだ！　これであともう少しだけカリンを抱きしめていられるよ！

「……タイセー……」

「は、はひっ！？」
いきなりカリンに名前を呼ばれ、思わず声が裏返る。
マズイ、どうせ後でボコられるからといっても調子に乗りすぎたっ！！　慌ててカリンの身体から手を離すと、カリンがゆっくりと僕の胸から顔を上げる。
「ご……」
ごめんと謝ろうと思ったけど、逆さまの状態で僕を見上げるカリンの表情があまりにも可愛くて絶句してしまった。カリンのことはとっくに好きだけど一目ぼれってこういう感じなんだろうか。

「タイセー……、あなたってやっぱり素敵だわ」

「ど、どういう事……！？」
上気した頬でカリンが瞳を潤ませる。
「ヨナが嘘をついてたのね……。タイセーはずっとヨナを拒んでた。マットに押し倒したのも、ヨナを庇ったアクシデントだったのね」

――　お父さん、お母さん、どうやらあなた達の不肖の息子は水際で一命を取り留めたようです。

「ごめんなさい、さっきはあんな態度を取ってしまって……」
カリンが腕の中でモジモジと恥らっている。くっ…、カリンにこんな風に謝られて許さない男なんかこの地球上にいるのだろうか。
「……私のこと、許してくれる……？」
「ハ、ハハ、ゼンゼン、キにしてナイネ、ダイジョブ、ダイジョブよ」
うぅ、キョドッたせいでヘンなカタコトになってしまった……。凄く恥ずかしい。赤面していると、僕以上に頬を桜色に染めたカリンが僕の首に手を回してくる。

「タイセー……、好き……」

カリンがそっと目を閉じる。
ええええええ！？　ちょ、ちょっと待ってよ！　まさか皆が見ているここで公開キスする気ですかっ！？　僕らは落下中でしかもこれが初めてなのに！？　それに下にはイブキ先生だっているのにマズくない！？　で、でもここで嫌がったらカリンが傷つくかも！？　女の子に恥をかかせるのは良くないしっ！！

思いは千千に乱れる。
いや、こんな冴えない僕を好きだって言ってくれるカリンの気持ちを考えたら恥ずかしがっている場合じゃないよ！　それに僕だってカリンが好きなんだから！！
えいっと気合を入れて、もう一度カリンをギュッと抱きしめる。
よぉぉぉしっ、タッ、タイセー・イセジマッ、もう一度行きまぁ

ーすっ！！

その発言はムチャクチャです

亜麻色の髪の中に指を入れ、おずおずと自分の方へ引き寄せる。
カリンは目を閉じたまま。加えて抵抗は一切無しだ。

……ということは、いいんですか！？　いいんですね！？

でもこの後一体どうすれば！？　女の子とキスするなんて初めてだから、どうやったら自然にできるのかわからないよ！
と、とりあえず押し付ければいいんだよね！？　ホントーにやっちゃっていいんだよね！？　まさかキスした後で怒り出したり、とかしないよね！？
……うぅ、ヘタレＭＡＸだ。カッコ悪いなぁ。両腕に不自然な力が入り、ついついタコのように唇が突き出し気味になってしまう。

「早く…して」

カリンが薄く目を開けて呟く。ややややっぱりキスしていいんだ！！　ブレーキをかけ気味だった気持ちが一気に開放される。
僕も急いで目を閉じた。視界はすぐに真っ暗になったけど、たった今まで見つめていたカリンの唇の位置はすでに把握している。見えなくたって全く問題は無い。落下中だけどノープロブレム、大丈夫だ。
思い切って顔を近づけると僕の心臓が刻むビートがあまりにも激しすぎて、こめかみがドクンドクンと強く脈打っているのが分かった。

――そして僕の唇の先端にカリンの唇が触れる直前。

「わぁぁぁぁぁぁ！？」

「きゃっ」

僕達二人の身体が一気に上昇をし始める。落下速度と同じぐらいのスピードで。

あっという間に飛び降りたスタート地点の高さにまで強引に身体が引き戻される。ガケの上で腕組みをし、仁王立ちしていたのは当然のごとくあの猫目のバイオレンス少女――、

「よっしゃあ！　来たなエロタイセー！！」

――テンマさんだった。

どうやら得意のテレキネシスを使って、僕らを大間のマグロ一本釣りを彷彿させるような豪快さでここまで引き上げたらしい。

「わわっ！」

僕らを釣り上げた後、なぜかテンマさんは急に力を解除してしまったので、僕の身体がまた下に落ちかける。しかしすかさずカリンがテンマさんの代わりにテレキネシスを使い、僕の身体を支えてくれた。

「まだ懲りてないようねマツリ」

カリンは空中でクルリと体勢を変え、テンマさんを鋭い視線で射抜く。

「私とタイセーの時間を邪魔した罪は重いわよ。覚悟はできてるんでしょうね？」

すごく冷静な声。だけど僕には分かる。これはかなり怒ってる状態と見て間違いないです。
「フン、そんな偉そうな口をきけるのも今のうちだぜ！！　さっきは負けたが今度はあたしが勝つ！！」
つい先ほどＰＳＩバトルでカリンに負けてしまったというのにテンマさんは自信満々だ。猫のような目を光らせ、威勢のいい勝ちどきを上げる。
「今のあんたをあたしが全力で吹っ飛ばしたらどうなるか、分かるだろ！？」
カリンがハッとした表情を見せた。
そ、そうか！　今のカリンは自分だけじゃなく僕にも力を使っている！　そこに念動力の得意なテンマさんが全力でカリンを攻撃したら、きっとカリンは自分をガードするＰＳＩの力が足りなくて……！
ダ、ダメだ！　僕のせいでカリンを危険な目になんて遭わせられないよ！
「カリン！　僕に力を使っちゃダメだ！　すぐに解いて！」
僕がそう叫ぶと、カリンが驚いた顔を見せる。
「そんなことしたらタイセーが落ちちゃうじゃない！」
「僕なら大丈夫！　きっとイブキ先生が助けてくれるよ！」
そうさ、最悪の保険として下にはマットも引いてある！　なんとかなるさ！
「嫌よ！　イブキ先生に任せるなんて！」
カリンは強く首を横に振る。
「僕だって嫌だよ！　僕のせいでカリンに何かあったらたまらないよ！」
「タイセー……」

顔を伏せたカリンの肩が小さく震えてる。
……あれ、もしかして感動してる？　ちょっとカッコつけすぎちゃったかな……。そもそも僕が劣等生なのが全ての元凶なのに。

「……イヤよ」
カリンが静かに顔を上げる。
「だって、タイセーを守るのはあなたを好きな私の役目だもん……。他の誰かにその役を渡すなんて絶対にイヤよ……！」

う、カリンが涙目になってる！
というか今にも泣きそうな顔でそんな健気な事を言われたら、思わず胸がキュンとしてしまいます。

「そ、そういう問題じゃないだろ！？　いいから早く僕を落として！！」
そう叫んだ時、視界の端でテンマさんが動くのが見えた。マズい！！
「テンマさんっ止めっ…」
「きゃあああああああっっ！」
僕が最後まで言い切る前に悲鳴が響き、カリンの華奢な身体が森林の方へと吹っ飛ばされていく。テンマさんの直撃を喰らったんだ！！

「カリーン！！！」

必死に名前を呼んだけど、カリンの姿は見えなくなってしまった。でも僕の身体はまだ同じ位置で浮いている。……ということはカリンは吹っ飛ばされながらもまだ僕に力を使っているということに……。

なんでだよ！？　なんでそこまで！？　止めてよカリン！！　僕のことなんかいいから早く自分をガードしてよ！！

「ははっざまーみろ！！」

ガケの上でテンマさんが嬉しそうにピョンピョンと跳ねている。そして僕の身体は少しずつ降下を始めていた。これはきっと距離が離れたせいでカリンの力が徐徐に僕に届かなくなってる証拠だ。

「おっと待ちな！　お前はこっちだ！」

真下へと降下し始めていた僕は襟首をぐいと掴まれたような状態で再びテンマさんに引き上げられる。そしてテンマさんは僕を自分の前にドサリと降ろすと、「いいかエロタイセー！」と鼻高々な様子でとんでもない事を言い出し始めた。

「あたしはお前がキライだ！！　だがあの取り澄ました転校生はもっとキライだ！！　だからあの女に勝つためにあたしと付き合え！！　いいな！？」

唖然として言葉が出ない。

生まれてこの方１５年、嫌いだと言われた直後に付き合おうなんて告白されたのは初めてだったから。

暴れ馬とランデブー

「いいかっ分かったなっ、エロタイセー！」

自らの巨乳をゆさゆさと元気に揺らし、テンマさんが僕に迫る。自信満々のその様子からして「Ｎｏ」という返事など微塵も考えていないっぽい。

「テンマさん」
「何だ？」
「ごめん」

僕は先に謝ると、テンマさんの右頬を打った。決して全力で叩いたわけじゃないけど、パシンといい音が鳴る。頬を引っぱたかれたテンマさんは何が起ったのか分からず、ポカンと口を開けていた。

「今すぐ一緒にカリンを探しに行こう。そしてカリンに謝るんだ」
「な…なにしやがんだお前！？」
「ひどい事をしたのはテンマさんだろ。しかも相手が反撃できないのを見計らって攻撃するなんて最低だ」
怒っている事を伝えるために左手でテンマさんの手首をギュッと掴む。
「さ、行くよ」
「はっ離せよ！」
テンマさんは暴れたが、それでも僕は掴んだ手首を離さなかった。一応テンマさんより握力はあるみたいで内心ホッとする。男の面目躍如ってとこかな。

「わぁっ！？」
しかしそれも一瞬のことで、あっという間に投げ飛ばされた。落ちた先はガケの端ギリギリ。あと一メートル遠くに飛ばされていたら危なかった。この真下なら保護用マットはたぶん無いはずだ。

「おっ、お前なんて、ちっ、力もろくに使えないくせに！　ヘタレで落ちこぼれのくせに！」

念力で僕を華麗に吹っ飛ばせたのに、テンマさんはひどく動揺していた。バカにしていたヘタレに頬を打たれたのがよっぽど堪えたみたいだ。うっかりガケ下に落ちないように慎重に立ち上がると、身体についた泥を払う。
「テンマさん、僕のことはいくら悪く言ってもいいよ。全部事実だしね。でも今カリンにしたことは謝るんだ」
「や、やなこった！　生意気なあいつに天罰を喰らわせてやって何が悪い！」
「それならテンマさんだって相当生意気だと思うよ？」
「くっ」

自覚があったのか、僕の突っ込みにテンマさんが黙る。

「行こうテンマさん。カリンが心配だ」
「もっ、元はと言えば、お前のせいなんだぞ！！」
打たれた頬に手を当て、テンマさんが吼える。
「……そうだね。確かにカリンとテンマさんの仲が悪くなったきっかけは僕のせいだ」
「分かってんならあいつを探しに行けなんて言うな！」
「それは出来ない。テンマさんには一緒にカリンを探しに行っても

らうよ。何があっても」
「何があってもだと！？　お前、今だってあたしに吹っ飛ばされたじゃん！！　どうやってあたしを引きずっていくつもりだよ！？」
「何度吹っ飛ばされたってテンマさんに喰らいつくよ。君がギブアップするまで諦めない」
「……お前っ……！」
テンマさんが悔しそうに表情を歪める。

「あたしはお前のそういう所が大っキライなんだ！　弱いくせになぜあたしに従わない！？　弱いヤツは強いヤツに迎合する、それが当たり前だろ！？」

「うん。世の中、大抵はそうだろうね。でも僕もその流れに乗る人間だとは限らないだろ？」
もう一度テンマさんに近づき、逃げられないように右手首をしっかりと掴む。今度こそ容赦のない力で弾き飛ばされるかもしれないけど、それでも構わない。
「ＰＳＩをろくに使えないのにフルリアナスにいる僕がテンマさんは気に食わなかったんだよね。だったら僕は退学するよ。それなら君とカリンがケンカする事もないだろうし。それならいいだろ？」
「退学するって！？　ここを辞めるのかお前！？」
「うん。カリンにもテンマさんにも楽しい学校生活を送ってほしいんだ。まだ入学したばかりでこんなトラブルになるのは皆が不幸になるよ」
「ちょ、ちょっと待てよ！」

テンマさんが真剣な表情で僕の顔を覗きこむ。そしてお返しとばかりに掴まれていない方の手で僕の右手首を掴んだので、僕らは正

面から向き合う形になった。

「この高校にいれば色んな特待もあるんだぞ！？　お前、それがフイになってもいいのかよ！？」

「うん、あまりそういう事には固執しないよ。僕がここにいることの方が間違っているんだと思うしね。だから行こう、カリンを探しに」

「……」

「さっきは叩いてごめん」

掴んでいた手首を離し、代わりにひんやりとした手のひらを握る。

そっと引っ張ると、テンマさんはもう抵抗しなかった。手を繋いだまま歩き出すと黙って後ろをついてくる。

良かった。これでカリンとテンマさんがケンカすることももう無いだろう。

成り行きでフルリアナスを退学することになっちゃったけど、ここでの先行きに不安も感じていたからこれがベストの選択なのかもしれない。

「タイセー……」

ガケを降りて森の中に入る頃、テンマさんに呼ばれて後ろを振り向く。

「な、なに？」

頭にいつもの“　エロ　”がついてなかったので、一瞬反応が遅れてしまったけど、僕のことを呼んだみたいだ。

テンマさんは自分の足元を見ながら小さな声で言う。

「辞めるなタイセー。辞めないでくれ……」

「え？」

「……お前が辞めたらあたしも辞めるぅーっ！！」
「わぁぁ！？」

テンマさんがいきなり抱きついてきたので後ろに盛大にひっくり返ってしまった。

「テンマさん！？」
「分かった！　やっと分かった！　なんであたしがあんたにいっつもイラついてたのか！」
テンマさんはべそをかきながらなぜか僕の上に馬乗りになってくる。もし男女の位置が逆ならばこのまま襲われてもおかしくないシーンに、ちょっとだけ恐怖心が湧き起こった。
「あたし、あんたが好きなんだ！　好きだから苛めたくなってたんだ！　だからここを辞めるなんて言わないでくれよ！　タイセーにもう会えなくなるなんて嫌だぁーっっ！！」

ついにテンマさんがうわーんと大声で泣き出した。……相変わらずの馬乗り体勢で。

「タイセーが言うなら謝る！　カリンに謝るから！　だから辞めないでくれーっ！！」
「テ、テンマさん、落ち着いてよ！」
必死に上半身を起こすと、暴れ馬のなだめ方を参考に、テンマさんの背中をトントンと叩いて落ち着かせる。つい「どうどう」と言いかけて慌てて口を閉じた。
ぐすぐすとまだ泣いているテンマさんを必死に誘導し、何とか身体の上から降りてもらう。

「タイセー、お願いだから辞めないでくれ……」

ちょこんと正座したテンマさんが僕に必死に哀願する。いつもの彼女からは想像できない姿だ。涙でうるうるとした瞳で見上げられ、心臓がドキリとする。

“　僕に暴力的な女の子　”　というレッテルを剥がした素のテンマさんを見てみると、この娘もかなりカワイイことに今さらながら気付いた。

「なぁタイセー……」

「う、うん、分かった！　とりあえず辞めない！　辞めないから！　だから泣き止んでよ！！」

「分かった、泣き止む……。だから約束だぞタイセー……！　絶対に約束だからな……！」

テンマさんが僕にぶつかるようにドシンともたれかかってきた。と同時にテンマさんの二つの巨乳も僕の上半身に元気にもたれかかってくる。重い。だけど柔らかい。この感触は気持ち良すぎです。

……あのー、で、この後僕はこの事態をどう収拾すればいいのでしょうか？

少なくともテンマさんとこんな感じでカリンを探しに行ったら、僕は幼馴染であるあの美しきメデューサ様の手によって、そのままこの森で亡き者にされる可能性が非常に高いと思われます。

眠れる森のメデューサ　【前編】

やたらとしおらしくなったテンマさんを連れ、カリンが飛ばされてしまった森林へと向かう。その途中で突然イブキ先生から精神感応（テレパシー）が届いた。

≪タイセーくん、聞こえてる？≫

さすがはイブキ先生。僕のすぐ耳元で話しているかのように音質が透明（クリア）だ。

（はい先生、聞こえてます！）と心の中で一応返事をしてみたが、イブキ先生から応答がこない。やっぱりＰＳＩが使えない僕がやってもただ内心で思っているだけで相手に伝達されるわけがないか……。

≪タイセーくん、返事ができなくても気にしなくていいのよ。そのまま聞いてね≫

落ちこぼれの僕を傷つけないための配慮なのか、イブキ先生の声はとても優しかった。だからせめて先生の交信内容（コンタクト）を一言一句まったく間違えずに受け取ろうと、呼吸を最大限にまで抑えて集中してみる。

≪あなたが飛び降りた時、タカツキさんが後を追ったでしょ？　そして降下していたあなた達は途中で急上昇して、タイセーくんはガケの上に消え、タカツキさんはどこかに飛ばされた。何かトラブルがあったのね？≫

そうです先生。現在、立派なトラブル発生中です。一応今は収束の方向に向かってはいますが。

≪先生はタイセーくんがとっても心配なの。だから動けるのならすぐにこちらに戻ってきて。もし戻ってこなければあなたもどこかに飛ばされたと判断して捜索を開始します≫

ぼ、僕も捜索対象に！？

というか、ここで話が大きくなっちゃマズイんだよ！　カリンやテンマさんが怒られちゃうかもしれないじゃないか！！　慌てて後ろを振り返る。

「テンマさん！　今のイブキ先生の連絡、聞こえてた！？」

僕の手をしっかりと握っていたテンマさんがキョトンとした顔をする。

「いいや。イブキから何か言われたのか？」

「カリンが飛ばされて、僕も見当たらないから捜索を開始するって言ってるんだ！　もし先生が先にカリンを見つけちゃったらマズイよ！　テンマさんもカリンも怒られちゃうかもしれない！」

「そっかぁ……」

テンマさんの表情が曇る。

「あたしは自業自得だけど、カリンには悪いよな……」

これはかなりピンチだぞ！　どうしよう、何か、何かいいアイディアはないか！？　……あっそうだっ！！

「テンマさん！　お願いがある！　イブキ先生のところに戻って、カリンが吹っ飛んだのはアクシデントだったって説明してきて！」

「アクシデント？」
「うん！　僕が怖がって飛び降りられなかったから見かねたカリンがサポートした、でも結局降下中に僕がパニックを起こしちゃって助けようとしたカリンを思い切り突き飛ばした、って話してきてよ！」

僕の案を聞いたテンマさんは驚きで猫のような目をパチクリとさせる。

「でもそれじゃお前一人が悪者になっちゃうぞ？」
「僕の事はいいから！　じゃあ頼んだよテンマさん！　僕はカリンを探してくる！！」
繋いでいた手を離し、脱兎の如く走り出そうとした時、
「待てよタイセー！」
と肩を掴まれる。
「な、なに？　時間が無いから急がないと！」

「テンマさん、は止めてくれ」

テンマさんが立ち止まった僕の手のひらをぎゅうっと強く握る。
「あたしのこと、名前で呼んでほしいんだ。カリンみたいにさ」
斜め下に視線を落とし、軽く口を尖らせるテンマさん。見かけだけじゃなくこういう拗ねたような態度もなんとなく猫っぽさを感じさせるんだよなぁ。
「なぁいいだろ、タイセー？」
「い、今はそんなことを言ってる場合じゃないと…」
「カリンには後でちゃんと謝るからっ！　あたしだってあんたが好きなんだぞ！　カリンばっかりズルいじゃんかー！！」

テンマさんが僕にガバッと抱きついてくる。

ちょ…、ま、また君の胸が思いっきり当たってきてるんですが！？
そして女の子の胸ってスゴイや、とあらためて思う。
だってこんなにやわやわしていて瑞々しいのに、普段は地球の引力に逆らってあんなにプルンとした丸い形を保っているんだもん。クーパー靭帯が必死にサポートしてるのは分かるけど、女体の神秘ってヤツですね。
……つーか、こんなエロいことばかり考えてる場合じゃなかった！　ここはおとなしくテンマさんの要求をきいてイブキ先生に早く説明に行ってもらわなくっちゃ！

「わ、分かったよ。じゃあイブキ先生への説明は頼むね。マ、マツリ…？」

言い慣れないので語尾が不自然にあがったけど、この娘はそれでも嬉しかったみたいだ。「うん！　任せておけ！」とニッコリ笑い、テレキネシスで自分の身体を浮かすとそのままイブキ先生の下へとすっ飛んでいってくれた。

……なんて単純な娘なんだろう……。でもそういう子、僕はキライじゃないけれど。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「カリーン！！　どこだーっ！？」

多分こっちの方に飛ばされたんだと思うけど……。僕に感知能力があったならすぐに見つけ出すことができるのに。自分のカスっぷりに反吐が出そうだ。

「カリーン！！　返事をしてよ！！」

やはり返事は戻ってこない。気絶しちゃってるのか？　もしそうならきっと意識が無くなる最後まで僕に力を使ったせいだ……。いたたまれなくて下唇を噛む。

――　カリンはどうしてこんな僕がいいんだろう……？

頼りがいも無いし、強くもない。特に容姿がイケてるわけでもないし、トドメはＰＳＩも使えないときている。

考えれば考えるほど、僕がカリンにあれだけ好かれるだなんてやっぱりおかしい。世の常識としてあってはならないことだと思う。

“　美女と野獣　”ならまだカッコもつくけど、“　美女とダメ男　”だなんて世間は誰も納得しないよ。

不甲斐ない自分が情けなくて涙が勝手に浮かんでくる。

目尻からこぼれないようにぐいと顔を上げると、その数メートル先に僕が必死に探していた、とてもとても大切なヒトが――、いた。

眠れる森のメデューサ　【後編】

「カリン！！」

カリンが樹の枝に引っかかってる！！

真下にまで走りより、上を見上げてもう一度名前を呼んだが反応は無かった。

このままじゃ危ないよ！　早くカリンを地面に降ろしてあげなくっちゃ！

必死に木登りを開始する。でも左手の握力には自信があるけど、反対側は極端に弱いので右手で身体を引き上げる時がどうしてももたついてしまう。気ばかり焦ってしょうがない。

「よ…っと」

普通の男なら一～二分もあれば充分なところを、倍以上の時間をかけて何とか登ることができた。

「…カリン？」

ガクガクと身体を揺さぶって下に落ちてしまったら大変なのでそっと声をかける。

ダメだ、やっぱり気を失ってる……。

たぶんこの樹にぶつかった時の衝撃なのだろう、カリンの髪や額や頬にたくさんの葉っぱが無残に散らばっていた。指の先でそれらをそっと払い落とす。

ごめん、ごめんねカリン。君がこんな目に遭ったのは全部僕のせいだ。僕が落ちこぼれでダメな人間だからなんだ。

やがてカリンはゆっくりと目を開けた。そして僕の顔に優しく白

い手を当ててくる。

「タイセー……、良かった、無事だったのね……」

「カリン！　気がついたんだね！」

目を覚ましてくれたのが本当に嬉しくて、ついカリンをギュッと全力で抱きしめてしまった。そんな自分の大胆さに気付いたのはその五秒後だ。

「あ…、ご、ごめん！」

真っ赤になって身を離した僕に、

「積極的ねタイセー」

とカリンが目を細めて笑う。

「私に対して自分が何を成すべきか、鈍いあなたもようやく分かってきたようね……。じゃあ特別にさっきあげそこなったご褒美をあげるわ。心して受け取りなさい」

「へ？　んんんーっ！？」

――　カ、カリンにキスされたあああーっ！？

いま僕の身に何が起こってるのデスカ！？

目を見開いた僕の視界のすぐ先に、カリンの長い睫が見える。そして明らかに自分以外の唇の感触がする。ぼ、僕、カリンとキスしてるの！？

「どうだった…？」

名残惜しげに唇を離したカリンが今のキスの感想を聞いてくる。

ど、どうだった、なんて聞かれても、どうもこうもないよ！　ただひたすらに嬉しすぎです！

女の子の唇ってこんなにもプルプルしていて柔らかいものなんだってことを初めて知ったし、薄く開いた唇からカリンの温かい吐息も感じたし、もうカラダもココロもいっぱいいっぱいで一気に爆発しそうだよ！

「ごっ、ご褒美が特大すぎて心臓がパンクするところでした……」

とストレートに伝えると、その感想を気に入ってくれたカリンがとても嬉しそうに笑う。そしてその満開に咲いた花のような笑顔にまた見惚れる僕。

「か、身体は大丈夫？　どこか痛くない？」

カリンが心配でそう尋ねると、彼女の表情が静かに変わる。

「えぇ、マツリとの続きはまだまだやれるわよ。だから安心なさいタイセー。何があってもあなたは私が守るから」

カリンの背後に再び戦闘オーラが漂いだしたのを察知した僕は慌てる。マズいよ！　この森が戦場化する前に早くこのアマゾネスを止めないと！！

「待って！　マツリは反省してるよ！　カリンに謝るって言ってた！」

「マツリが私に謝る？　信じられない」

「ホントだって！　後できっとカリンに謝ってくるよ。そうしたらマツリを許してあげて。ね？」

「……二つ聞いてもいいかしらタイセー？」

カリンの髪が風で大きく波打つ。……うわぁ、なんだろう、たった今キスしてもらったばかりなのになぜか悪い予感がビシバシしますよ？

「は、はい？　なんでしょうか……？」
「なぜマツリを庇うのかしら？　そして急にマツリを名前で呼び出した理由は何かしら？」
うわわ、やっぱりそこを突っ込みますか！？
でもそこは来ると思ってました。はっきり言って想定内ですよ我がメデューサ様。
「そ、それは…」
しかし口を開こうとした僕の唇をカリンが人差し指を当てて押さえ込む。

「でも下手な言い訳は不要よタイセー。正直に事実だけを話しなさい」

僕はゴクリと生唾を飲んだ。
とても綺麗な女の子が全力で凄むと、強面の男が威嚇で凄むのとはまた別のド迫力になることを、僕はカリンとの接触ですでに学習している。だからここは何とかして一番誤解の生まれにくい状況に持って行くべきだと判断した。
「事実だけを話せばいいの？」
「そう、事実だけを端的に話しなさい」
「で、でも僕は口下手だから君に上手く伝えられる自信がないよ」
「でも言わなきゃ何一つ伝わらないわ」
「うん、だから僕の心を読んでいいよ。さっきみたいに」
「そうね、きっとそれが一番早いわね。タイセーなら読心防御用の擬似感情（シャム）を作ることもできないだろうし」

……カリンに他意はないんだろうけど、何気なく言ったその言葉

が胸に刺さる。さっきのコシミズさんの発言よりも深くえぐられた感じだ。好きな女の子にまで落ちこぼれと宣告されたようなものだから、正直、今かなり辛い。

「僕ができるわけないだろ、そんな高等レベルの技」
カリンからわざと目線を外して答える。
そんな態度で言えば超卑屈な男に見えるのは分かっていたけど、どうしても正面きって堂々とは言えなかった。
「ごめんね……、そういう意味で言ったつもりじゃないのよタイセー……」
あぁ、こんな態度を取ったからカリンが申し訳無さそうに身をすくめてる。
バカだなぁ僕は。好きな娘を困らせてどうするんだよ。こんな米粒にも満たないほどの消しカスなプライドなんていい加減捨てきってしまうべきなのに。

……でも。
でも頭では分かっていてもなかなかそうできないのは、きっとまだ僕の中で諦めきれていない部分があるからなんだろう。
“　もしかしたらいつかまた自分にＰＳＩ能力が戻る日が来るんじゃないか　”っていう淡い期待が、心の奥底の濁った部分に今でもどっぷりと沈んでいるからなんだ。

眼鏡っ娘は魅力的です

「……ほらどうしたの？　早くやりなよ」

木の上から地面に降りた後もカリンがなかなか僕の心を読もうとしないので、両手を大きく広げて急かしてみる。

実は急かした理由の大半は、カリンにまた思いっきり抱きついてもらえるからなんだけど、それは間違っても口にはしない。ズルい男でごめん。

しかし“　さぁいつでもウェルカム！　”　状態の僕の前で、カリンはしおれたタンポポのように地面に座り込んでしまっている。

……あーあ、さっきの舌禍事件なんてもう済んだことなんだから軽く流してくれればいいのになぁ。

逆にそこまで身を縮めて申し訳なさそうにされると、自分のダメっぷりを強制的に再認識させられてるみたいで余計に凹んじゃうよ。

「本当にごめんなさいタイセー……、あなたを傷つけるつもりは無かったのよ」

「僕なら全然気にしてないから大丈夫だよ。それより大変なことになってるんだよカリン」

カリンに今僕の心（なか）を読む気は全く無さそうなので、ここは次の行動に移った方が良さそうだ。熱烈ハグは残念だけど諦めよう。

「大変…って、一体どうしたの？」

「早く皆のところに戻らないとマズいんだ。カリンが吹っ飛んだところをイブキ先生が見ちゃって、もうすぐカリンの捜索が始まっちゃうんだよ」

カリンの前にしゃがみこみ、今の現状をかいつまんで報告する。

すると気落ちしていた幼馴染もやっといつもの調子に戻ってくれた。
「あら、それはあまりよろしくないわね」
「そうだよ。だから早く戻ろう」
「えぇ！」

カリンはすくっと立ち上がった。うーん、マツリに吹っ飛ばされたダメージはほとんど無さそうだ。さすがだなぁ。

「タイセーにこれ以上迷惑はかけられないわ！　私、先に戻ってうまくごまかしておくからタイセーも急いで戻ってきてね！」
カリンの身体がフワリと浮き、一瞬で消える。
へぇ、瞬間移動（テレポート）も使いこなせるんだ……。僕のクラスでＴＯＫＹＯを一気に横断できるくらいの力を持った子がいるって噂を聞いたことがあるけど、カリンはどれぐらいの距離を移動できるんだろう。
まぁそんなことを考えるより、僕も急いで皆のところに戻ろう。
そう思い立ち上がった時、

「きゃんっ！！」

「わっ！？」
ビックリした。長い黒髪が扇みたいにふわりと大きく広がり、クラスメイトのナナセ・ヤマダが僕の前で豪快にスッ転ぶ。
「ヤマダさん！？　なんでここに！？」
「あ…、イセジマくん？」
ヤマダさんは大きくずれた青のカチューシャを直しながら上体を起こした。
「あれ？　イセジマくんがよく見えない……」
「眼鏡思いっきりずれてるよヤマダさん」
「やだっ私ったら」

僕の指摘でカチューシャと同じ色の眼鏡もずれていることに今頃気付き、慌ててかけ直しているヤマダさん。そしてようやくピントが合ったのか、地面に座り込んだままの体勢で僕の顔をしっかりと見つめて話し出した。

「予知をしてみたらカリンさんとイセジマくんがこの辺りにいるって分かったから、イブキ先生が皆に待機指示を出している時にこっそり抜けてきたの」

「えぇっそんなことしちゃマズいんじゃない？」

でも、とヤマダさんが口ごもる。

「私クラス委員長だし……」

あぁそうだ。ヤマダさんはウチのクラス委員長なんだよな。

真面目で責任感が強い性格でしかも眼鏡っ娘。委員長になるために生まれてきたようなキャラだ。

「……私、クラス委員長になったけどまだ全然委員長らしい事をしていなかったから、せめてカリンさんを私が見つけたかったの。それとイセジマくん、あなたにもずっと謝りたかった」

「僕に謝りたい？　どうして？」

ヤマダさんは一気に表情を曇らすと、シュンとして俯く。

「あなたがマツリさんにイジめられる度、私、何もできなかった。委員長ならあんな身勝手な乱暴を止めるべきなのに、マツリさんが怖くて、ずっと見てみぬフリをしてきたから……」

「……ヤマダさん……」

「本当にごめんなさい、イセジマくん！　私、勇気を出してこれからはカリンさんのように絶対あなたを助けるからっ！！」

とっても猛省中のヤマダさんだが、僕は嵐のような感動に包まれていた。だってまさか僕のことを心配してくれていたクラスメイトがいただなんて！　ヤマダさんっていい娘なんだなぁ……。
ヤマダさんは急にバッと顔を上げ、直立不動の僕の手をしっかりとつかむ。

「だからこれからは私も頼って！」

つかまれている手の力強さと必死の口調で、ヤマダさんが本気で言ってくれていることは充分に伝わってきた。
すごいなぁ、心があったかい気持ちになると、人って自然と穏やかな表情になれるものなんだ……。ヤマダさんの優しさがそれを僕に教えてくれている。

「ううん、そんなことしなくていいんだ。その気持ちだけですごく嬉しいよ、ありがとうヤマダさん」
微笑みながらお礼を言うと、ヤマダさんはイヤイヤをするように強く首を振った。
「でもそれじゃ私の気がっ」
「それにもうマツリは僕のことあまりイジめなくなると思うし」
「え！？　どうして！？」
ヤマダさんが目を瞬かせる。
「……え、えーと……、それは……」
「それは？」
「な、なんか彼女の心境に多少の変化が起ったみたいで……。とっ、とにかくもう大丈夫だと思うから！」
しどろもどろで強引に話を切り上げる。
“　マツリが僕が好きだと分かったから　”、なんて事実、恥ず

かしくて自分の口からはとてもじゃないが言えないよ。

「そう……。それならいいんだけど……」

半信半疑の表情でヤマダさんが呟く。

「うん、だから心配しないで」

「あっ、そういえばカリンさんはどこにいるの？」

「大騒ぎになる前に瞬間移動で先にイブキ先生のところに戻ったよ」

「そう……。じゃあ私が来た意味無かったのね……」

手助けにきたつもりが活躍するシーンがないと知ってガックリと落ち込むヤマダさん。ちょっぴりドジなこの委員長さんがなんだか可哀想なのでここはフォローしておこうかな。

「そんなことないよ。後でカリンにヤマダさんが来てくれた事を僕からこっそり話しておくね。イブキ先生の指示に背いてまで探しに来てくれてありがとう」

こんなつたない僕のフォローでも一応ヤマダさんを慰めることはできたみたいだ。気を持ち直したヤマダさんは両手を胸の前で合わせ、ニッコリと微笑む。

「イセジマくんって優しいのね」

うん、やっぱりカワイイよこの子。

実はフルリアナスに入学して、一番最初にカワイイと思ったのはこのヤマダさんなんだよなぁ……。

黒髪ストレートで、眼鏡をかけてて、おっとりしていて、笑顔がとても優しそうで。

もしこの先彼女が出来る事があったとしたなら、平凡な僕にはこういうタイプの女の子がお似合いなんじゃないかって密かに思ってた。

「あのねイセジマくん、せっかく縁あってクラスメイトになったんだし、あらためてお友達になってくれる？　私、異性のお友達って一人もいなくって……」
頬を染め、モジモジとしながらヤマダさんが僕を見上げる。連鎖反応で僕もカァッと顔が熱くなってしまった。
「も、もちろんだよ。喜んで」

あぁ、フルリアナスに入学した直後にこんな事言われてたら僕は間違いなくこの娘を好きになっていただろうなぁ……。そして入学当初にヤマダさんに対して抱いていた好感情をもしカリンに知られたら、たぶん僕は永遠に眠らされるのではないだろうか、とふと思う。

「ありがとう！　よろしくね、イセジマくん」
ヤマダさんが小さな手を差し出してくる。
「う、うん、これからよろしく」
鬱蒼とした森林の中で僕らはしっかりと握手をした。
「じゃ僕らも急いで戻ろう」
「はいっ！」
座り込んでいるヤマダさんを握手を利用して引き起こし、皆の待機する場所へと急いで戻る。
カリンはもう向こうに着いたかな……。いや、それよりもさっき僕の心を読むことをカリンに許可した件、なんとかうまくごまかして発言を撤回しなくっちゃ。

今のヤマダさんとの五分間の流れと、僕が入学当初にこの娘に抱いていた感情をカリンに読まれてしまったら、かなり大変なことになりそうだから。

君は僕には分不相応すぎるんです

1．マツリの迅速な報告　⇒　2．カリンの詳細な釈明　⇒　3．ヤマダさんの熱心な陳情。

渦中の三名が即席チームとして手を組み、それぞれに言葉を駆使してイブキ先生へ連携フォローを行った結果、今回の行方不明騒動は何とか大事にならずに済んだ。

一方、トラブルの原因となった小心者（チキン）は職員室に呼び出され、ありがたい単独説教を受けている真っ最中だ。

「タイセーくんは男の子なんだからもうちょっとしっかりしなさいね。女の子に助けてもらうなんて情けないぞ」

説教終了間際、デスクチェアーから僕を見上げるイブキ先生に、空気拳骨（エアフィスト）で頭頂部を小突かれる。これは先生が得意なお仕置き技の一つだ。

「分かった？　タイセーくん」

「はい、ご迷惑をかけてすみませんでした。次から気をつけます」

……イタタ、今回のイブキ先生の空気拳骨、結構効いた……。

前にも一度だけ喰らったことあるけどあの時は軽くコツン、程度だったのになぁ。それだけ今回の騒動が許せなかった、ということなのかもしれない。

「タカツキさんにケガがなかったのが不幸中の幸いね。タカツキさんには謝った？」

「いえ、まだです」
と首を振る。
まだカリンには心の中でしか謝ってない。カリンがあんな目に遭ったのも、元々は僕の不甲斐さが原因なのに。
「じゃあちゃんと謝っておきなさいね。そして罰として今日の放課後、ＣＡＬＬ ｒｏｏｍ の清掃を任せます。必ず一人ですること。時々透視でチェックするからくれぐれもサボらないようにね」
「はい、分かりました」
今回の体育が丸々中止になったペナルティーが僕に課せられけど、この程度で終わったのは本当に幸いだ。ペコリと頭を下げ、職員室を後にする。

「タイセー」

職員室を出て歩き始めた僕にすぐ声がかかる。
「……カリン？」
廊下の隅に身を潜めていたカリンが僕の側にまで走り寄ってきた。
「もしかしてずっとそこで待っててくれたの？」
「えぇ」
カリンがコクリと頷く。うーん、その神妙な顔つきからして、ＰＳＩで職員室内の様子を伺っていたっぽいなぁ。
「ごめんなさい……。タイセーには何も非が無いのに、結局あなた一人が悪役になってしまったわ」
あ、やっぱり聞いてたよ。
「僕のことならいいんだ。カリンが怒られなくて良かったよ」
「でも代わりにタイセーだけがイブキ先生に怒られて、しかも一人

で掃除をしなくちゃいけないなんて……。私もＣＡＬＬ ｒｏｏｍ の掃除を一緒に手伝うわ」

なんだそこまで知ってるのか。イブキ先生とのやり取りを全部聞いてたんだね。

でもいいよなぁ……、ＰＳＩ能力さえあればこういう諜報活動だって簡単に出来るんだ。溜息と共に羨ましい気持ちが湧き上がってくるのを抑えられない。

「ダメだよ。イブキ先生からは必ず僕一人でするようにって言われてるから」

「こっそり手伝うわ。教室の外からモップで床を掃いたり、ディスプレイをクロスで拭いたり、私にも出来ることは色々あるもの」

それって当然“念力で”、だよね……。

「いいでしょ？」

「ダメだって言ってるだろ。時々イブキ先生が透視でチェックするって言ってるからすぐにバレるよ。だって僕はモップどころかティッシュ一枚すらもろくに動かせない落ちこぼれなんだからさ」

あ！ マズいっ、ついまた自虐的な言葉を口にしてしまったよ！

急いで口元を押さえたけど、そんな動作はもう何の意味もない。

「タイセー……」

そんな僕を見つめ、悲しそうな表情をしているカリン。

あぁもう！ 自分で自分が嫌になる。どうして僕はカリンの前だとこういう情けない態度を取ってしまうんだろう？

“好きな女の子が自分よりも遥かに優れた能力を持っている

”、その圧倒的な負い目が、僕を卑屈なマゾヒストにさせてしまうのかもしれない。あまりの情けなさに頭を抱えて叫びたい気持ちでいっぱいだ。

せめてこれ以上カリンに嫌な思いをさせたくない。

今の発言は無かったような素知らぬ顔でカリンの手をつかみ、「さ、次の授業が始まっちゃうからそろそろ行こう」と半歩先を歩き出す。するとカリンはいきなり立ち止まり、僕の手を振りほどいた。

「カ、カリン？」

き、嫌われた！？　男としてあまりにも器が小さすぎる僕についに愛想をつかしちゃった！？

いやでもその気持ちは分かる。君と僕じゃあまりにも不釣合いすぎるんだ。

才媛な君にはこんな生けるカスみたいな僕よりももっと有能でカッコイイ男が似合…

「私はこっちの方がいいわ」

右腕に柔らかい感触。

カリンはニコッと笑うと僕の右腕に自分の腕を大胆に絡めてくる。学校内という神聖なる区域で腕を組んで歩く僕らはたちまち注目の的となり、すれ違う人みんなが僕達を興味津々の横目で眺めていくのが分かった。

カリンに嫌われていなかったことはすごく安心したけどこれはかなり恥ずかしい。“　幸せな羞恥プレイ　”　を強制体験させられているようだ。

そんな僕とは正反対にカリンは注目されていることがとてもお気に召したようで、ギャラリーとすれ違う度にわざと必要以上に身体をピッタリと密着させて周囲に僕らの関係を強くアピールをしようとする。おかげで右腕にカリンの胸の膨らみがフニフニと時折当た

ってくるのでどうしていいのか分からない。

「あ、あのさカリン、皆が見ていて恥ずかしいんだけど……」

色んな意味で平常心を保つことがかなり厳しくなってきたので、小声でＳＯＳを送ってみた。すると我が美しき総統は、顔色一つ変えずに冷静な声で次の指令を出す。

「男なら細かい事を気にしちゃダメよタイセー。いいからあなたは真っ直ぐ前を見て胸を張って堂々としていなさい」

え、えーと…、あのカリンさん？　僕の要望に取り合うつもりは一切なしでしょうか？

数年ぶりの対面以降、カリンの現在の性格はなんとなく把握できてきたけど、本当に我が道を突き進む人なんですね、君は。

しかし堂々としていろと言われても僕はこの現状に身体も心も慣れることができない。できるわけがない。

だってこんな冴えない落ちこぼれの僕に、カリンみたいなキレイな女の子が似合うはずがないことを誰よりもよく分かっていたから。

君に忠誠を誓います

「ねぇタイセー。お昼休みの間、あなたが行きたい所はある？」

教室内で昼食を取った後、カリンが僕に尋ねる。

カリンが一緒だから僕も初めて自分の教室で食事を取ってみたけど、クラスの女の子達が醸しだすこの独特の空気にはやっぱり馴染めそうにない。

「行きたいところ？　別にないけど……」

「言っておくけどこのまま教室にいるのはダメよ」

「どうして？」

「だってここは女の子がいっぱいだもの。タイセーが目移りしたらイヤだから」

「めっ、目移りなんてしないよ！」

「あら、本当にそうかしら……？」

カリンは僕に鋭い視線送ると椅子からゆらりと立ち上がる。彼女の威圧オーラが蜃気楼さながらに立ち昇ったような錯覚を起こし、思わずビクリとしてしまう小心者の僕。

「ほ、本当だよ！　一体何の根拠があってそんなことを言い出すのさ？」

「じゃあ教えてあげるわタイセー」

左手は腰、そして右手は僕を指さして、厳しい顔つきでカリンが宣告する。

「ランチの最中あなたの視線の動きをチェックしていたけど、合計で四回、他の女の子を見ていたわ！」

「えぇーっ！？　見てない！！　見てない！！　見てないよ！！」
ここは相当重要な所なので三回言った。
言葉だけではなく、必死に首をぶんぶんと振って態度でも示してみたけれど、カリンの機嫌を直すまでには至らなかったようだ。
「そ。じゃああれは全部無意識なのね」
カリンは非難がましい目で僕にチラリと視線を走らせると、これみよがしに俯き、ハァ、と溜息をついてみせる。
「タイセー、よくお聞きなさい。はっきり言って無意識が一番タチが悪いわ。だってそれはその悪癖を自分で気付けない、つまり自覚できていないってことですもの」
「う……」

カリン独特のこういう上段からの物言いにはだいぶ慣れてきたのだが、まだ言い返せるレベルにはきていないので一応は神妙な顔で俯く。それに他の女の子を興味のある視線で見たつもりはないけれど、カリンがあそこまで断言するのならクラスの誰かを無意識に見てしまったのかもしれないし。

「ごめん、これからは気をつけるよ」
僕の困った様子を見たカリンは急にストンと椅子に腰を落とすと、やたらと身体をもじもじと動かし始める。
「？　カリン、トイレに行きたいなら我慢しない方がいいよ？」
「ちっ、違うわよっ」
カリンがカァッと頬を赤らめる。
「わ、私、別にタイセーに謝ってほしかったわけじゃないのよ。ただタイセーが他の女の子をあまり見ないでくれたら嬉しいな、って思っただけで……ごめんね」

――　あぁ神様、素直に謝る幼馴染が無条件で可愛いすぎるのですが、ここで僕はカリンに何と言ってあげたらいいのでしょうか？

「えっえーと…」
しかし残念ながら神様の啓示は降りてこなかったので、とりあえず話を元に戻してみた。
「今日はどこに行く？　早くしないとお昼休み無くなっちゃうよ？」
するとカリンの顔がパァッと一気に明るくなる。
「今日の行き先、実はもう決めてるの！　行きましょ！」
「わっ！？」
不自然な力で身体が勝手に椅子から浮いた。
「カ、カリン！　自分で歩けるってば！」
しかしカリンは華のような笑顔で嬉しそうに答える。
「遠慮しなくていいわよ、タイセー！　私も念動力の鍛錬になるし！」
「だからって僕の身体を使って鍛えないでよ！」
宙で両足をジタバタしてみたけれど、無駄な抵抗に終る。こうして僕はご機嫌なカリンに浮かされたまま、強引に教室の外に連れ出されてしまった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「……あのさ、カリン」
連れ出された先は人気のあまりない、校庭の片隅だった。
大樹の木陰で並んで座っていると、グラウンドを吹き抜けてゆく微風がカリンの髪をなびかせ、切り揃えられたサラサラの毛先が僕

の腕に時折触れる。
「なぁに？」
カリンが僕の横顔を覗き込む。一度だけ伏目がちにカリンを横目で見た後、今朝からずっと気になっていたことを思い切って尋ねてみる。
「そ、その、いきなりであれなんだけど」
「なに？」
「カッ、カリンはさ、ぼぼぼぼっ、ぼくのどこがいいの…？」
カリンは小さな微笑を浮かべ、ゆったりとした口調で返してくる。
「どうして、急にそんなことを聞くの？」
「だ、だって僕はろくにＰＳＩも使えない落ちこぼれだよ？　なんでこのフルリアナスに入れたのかも分からないくらいなんだ。だからそんな僕がいいって言われても、なんだか信じられなくってさ」
体育座りの足先に視線を固定し、そう早口で答えた。するとカリンは笑顔を消さないままで僕に向かって優しく言う。
「タイセー。あなたは間違っている」
「間違ってる…？」
「えぇ」
カリンは勇気付けるように僕の手を握る。重なる柔らかい感触が僕の掌を包む。
「あなたは落ちこぼれじゃない。それにこのスクールに入れたのも立派な理由があるから。だってあなたをこのスクールに推薦したのは私だもの」
「カリンが僕をスイセンッ！？」

驚いて思わず大声を出してしまった。
「えぇそうよ。だって私は知ってるもの。あなたが本当はすごい力を秘めている男の子だってこと。だからフルリアナスに自分の入学願書を提出した時に、ＰＳＩ能力に優れた人材を知っているから内密に能力値を調べてほしいって直訴したの」
カリンはその事実を僕ができるだけ自然に理解できるよう、ゆっくりと言葉を紡ぐ。
「今年の初め頃に潜在値（リテント）を計られたことがなかったかしら？」
「そ、そういえば、あったような気がする……」
「でしょ？　きっとそれが入学試験の代わりだったようなものなのよ。だからタイセーが今ここにいるということは、あなたの中に並外れた素質が眠っていることをこのスクールが認めたということ。あなたも私たちと一緒でここに選ばれた生徒なのよ。いつかきっとその蕾は芽吹くわ。だから自信を持って。あなたは落ちこぼれなんかじゃない。誰よりもこの私にふさわしい男性なのよ」

カリンは僕の手を離すと、代わりにまたさっきのように腕を絡ませてくる。しかもわざと挑発しているのか、片方の胸の膨らみを僕の二の腕にグイグイと強く押し付けてくるので心臓の鼓動が０．５秒置きにギュンギュンとスピードを上げてきている。も、持つのか、僕の心臓？
「あなたの本当の良さを分かっているのは今はたぶん私だけ。でもいつかきっと周りもあなたの良さに気付く時がくるわ。だから私はあなたを絶対に離さないし、タイセーも他の女の子が言い寄ってきても私だけを見ていてほしいの。いいわね？」
どこまでも真剣なカリンの声と表情に、知らず知らずの内に背筋が伸びる。僕に並外れた素質があるなんて到底信じられないけど、少なくとも僕に対する気持ちは本気で言ってるんだということがカ

リンの気合と共にビシビシと伝わってくる。

「……どうしたのかしら？　返事がないようだけど」

「ハ、ハイッ！！」

危ない！　カリンの迫力につい、「イエッサー！」と敬礼をするところだったよ！

「いい返事ね。ご褒美を上げるわ」

上げるわ、の声が僕の顔のすぐ側で聞こえた。

その次の瞬間、うぁ…っ、ま、またカリンがキスしてくれた……っ！！

一時間目の体育の時間にキスを初体験したばかりだけど、二回目もスゴイ衝撃です！　っていうか、初回よりも興奮度が上がってます！　どうして女の子の唇ってこんなに柔らかいの！？

おずおずと背中に手を回すと、カリンもそっと僕の背中に手を回してきてくれたのが分かった。あぁどうしよう、幸せすぎるんですが……！？

決めた、決めたよカリン！　いつになるか分からないけど、優等生の君に少しでも近づけるよう、そして君の彼氏だと周囲に堂々と胸を張って言えるよう、僕、これから精一杯頑張るよ！

そんな強い決意を胸にカリンをひたすら夢中で抱きしめる。

どうしようもないヘタレが大好きな幼馴染に心からの忠誠を誓った瞬間だった。

その服じゃ、たぶん戦えないと思います

「あっそういえば」

唇を離してすぐ、カリンが何かを思い出したようだ。目の前のカリンの顔を見つめただけで、またキスしたくなってきていることに驚きだ。

……うーん、自分は草食系だと思ってたけど、こうしてカリンの側にいる時間が増えれば増えるほど、段々と肉食じみてくるというか、発情期の盛ったケモノみたいになってきているような気がするなぁ。何とか理性を保つようにしないとカリンに嫌われちゃうかもしれない。気をつけよう。

「タイセー」

そんな僕の性の葛藤を知らないカリンは爽やかに告げる。

「まだ時間があるからあの続きをしましょう。今、あなたの心を読んでもいいわよね？」

――うえぇっ！？　キキキキター！！　二回目のキスに没頭していてすっかり忘れていたけど、恐れていたリクエストがキターッ！！

「さぁタイセー。できるだけ集中してあなたは何か別のことを考えていて」

カリンが僕に抱きついてこようとする。慌ててその細い両肩をつかみ、中ぐらいの力でグイッと押し返した。

「あああああああのっ、あのさ、カリン！！　やっ、やっぱりちゃんと言葉で伝えることにするよっっ！！」
「……あら、急にどうしたの？」
動揺を抑えようとするあまり、尋常じゃないほどの超オーバーアクションを見せてしまった僕に対し、メデューサ様が疑問を抱かれたようだ。な、何とかうまくごまかさないと！！
「だ、だってこれから何か誤解を招くような事がある度にカリンに僕の心（なか）を一々見せるのもどうかと思うしっ、僕もこのままじゃいけないと思うんだっ！　せめて、この口下手ぐらいは直せるように努力したいっ！！」
この咄嗟の言い訳にカリンが微笑む。
「いい心がけねタイセー。向上心のある男性は嫌いじゃないわ」
――　い、いけるか！？
「で、でしょ！？　だから今回は言葉で説明させてよ！　できるだけありのままに話すから！」
「分かったわ。じゃあ聞いてあげる。その代わりちゃんと最初から話してね。私がマツリに弾き飛ばされた以降からよ」
「う、うん！」
やったぁ！　やりましたぁーっ！！　生き延びた！　生き延びたよ！！　そう空に向かって吼えたい気分だ！　これでひとまずヤマダさんとのあの五分間と、僕が以前にヤマダさんに抱いていた好感情をカリンに知られずにすむ！
「あ、そうだわ。その前にもう一つ聞きたいことがあるの」

まだあるのーっ！？　……えーと、えーと、もうカリンに隠しておかなければいけないことってないよな！？　いや、大丈夫！　他にやましいことは何一つないはずだっ！！　己を信じろ！！

「ど、どんなこと？」

「あなたに抱きついてヨナとの事を調べさせてもらった時、他の記憶映像（リップ）がいくつか見えたんだけど、その中に私も映像もあったのよ」

「う、うん」

……僕の心の中にカリンがいた？　いや、それって別に全然不思議なことじゃないけれど、でもなんだろう、ものすごくイヤな予感がするんだけど。

「それがどうかした？」

「その時の私、エナメルみたいなピカピカの黒い生地でできた水着みたいなコスチュームを着ていて、手には長くて太い鞭みたいものを持ってたの」

うわわわわわわ――――――！！！！！　そっ、その秘密映像を見ちゃったんですかーっ！？

「ねぇ、あれってなに？　私、ああいう洋服初めて見たんだけど、あれはどういう時に着る服なのかしら？」

「そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそれは……」

どもりがついに最高潮に達する。

だってまさか“　久々に会ったカリンがすごく綺麗になってて、しかもグッと大人っぽいスタイルになっていたから、きっと脚線美が際立つボンデージスタイルとか似合うだろうなぁって、ついそれを着せて頭の中でイロイロとイケナイことを妄想してしまってました”　だなんて言えないっ！　とてもじゃないけど言えないよぉーっ！！

「？　どうしたのタイセー？」

つぶらな瞳で僕を覗き込む幼馴染。

ま、まさかこんな思ってもみない方向から窮地に陥るとは……！

でもこの事実をカリンに言えないのなら代わりのニセ解答を提示しなくてはならない。

……。

……。

……。

あーっ！　何も思いつかないぃぃぃ――っっ！！

焦るあまり、まるで酸欠金魚のようにパクパクと口だけが空しく動いてしまう。どうする！？　どうする！？　諦めたらそこで試合は終了しちゃうのにーっ！！　と、そこへカリンが急に大声を出した。

「あっ分かったわっ！」

「ひぃっっ！？」

ダメだもう終わりだーっ！！　お父さんっ、お母さんっ、そして安西先生っ！　精一杯頑張りましたがやっぱり僕はここまでの男のようですっ！！　体育の時は水際でかろうじて助かりましたが、今度こそカリンにボコボコにされてしまいますっ！！

「あれって戦闘用のコスチュームなんでしょっ！」

「ハイー！？」

驚きで声が思わず裏返る。

「ふふっ、タイセーって戦隊ヒーローのＴＶが大好きだったものね。いつもはおとなしいのに、ヒーローごっこが始まると目をキラキラさせてたわ」

幼稚園時代の頃を思い出したカリンがクスクスと笑う。

「でもヒロイン用の戦闘スーツを私に着せてみるなんて、タイセーったらいつまでたっても子供みたいなんだから。でもそういうところ、あなたらしくて好きよ」

……な、なんという斜め上の勘違いをしているのでしょうか君は……。

カリンが僕に向かって可愛らしくウィンクを飛ばしてきたが、一方の僕は開いた口がふさがらない。

でもカリンがお金持ちのお嬢様で本当に良かった。お情様な君はボンデージファッションなんていう衣装があることを全然知らないんだね。しかし何はともあれ、た、助かった……。ホッと胸を撫で下ろす。

「でもタイセー、あのコスチューム、戦闘用にしては肌の露出が多すぎない？」

うわぁぁぁぁーー！！　まだお嬢様の疑問は解消しきっておられなかったぁーーっ！！　ヤバい、ヤバいぞこれは！

「そ、そんなことないよ！　今はあれぐらいの露出は全然フツーだよ！？」

「でも小さな子が見る番組の戦闘服にしてはちょっとエッチっぽいデザインのような気もするけど……」

「そ、そうかな！？」

「えぇ……。胸の谷間の部分にまぁーるく大きな穴が開いてたし、服のあちこちにギラギラした銀色の鋲みたいなものもいっぱいついてて、スカートも中が見えちゃいそうなぐらいすごくミニだったわ」

「そっ、それはｃｙｂｅｒ（サイバー）仕様だからだよ！！　あの未来戦士の戦闘服（バトルスーツ）はコンピューターで自動管理されてるんだ！！　確かにちょっとエッチぽいデザインかもしれないけどっ、あれは無駄な機能を極限にまで徹底的に除去したゆえの結果なんだよ！！」

「じゃあ、あの服にいっぱいついていた銀色の鋲みたいなモノも何か意味があるということなのかしら？」

「ミッ、ミサイルッ！！　あれは【金属誘導弾（メタル・ミサイル）】ですっ！！」

「あら、あれってミサイルなの？　でもミサイルにしては少し小さすぎるような気がするんだけど？」

「残念っ！　あれは超小型タイプなんだ！　スモールなのにハイテク！　敵を決して逃さない自動追尾機能（オートホーミング）というアビリティもついてるんだから！　あれを一発ぶっ放すだけで敵側のボスも一撃必殺のシロモノなんだから侮っちゃいけないよっ！」

……スイマセン、もう自分でも何を言っているのかよくわかりません……。

死に物狂いの説明のせいでハーハーと全力で息をする僕を見てカリンが笑う。

「ミサイルの他にハイパーな鞭もあるみたいだし、スゴい戦闘服なのね。でもタイセーってばそんなに必死になって説明して本当に子供みたい。カワイイわ」

「は、はは……」

無理やり引きつった笑顔を浮かべる。うぅ、同い年の女の子に「カワイイ」と言われちゃったよ……。

男のプライドが傷つきまくりだけど、とりあえず納得はしてくれたみたいだな。カリンには気付かれないように冷や汗を拭き、そっと安堵の吐息をつく。

……ごめんね、カリン。今回のピンチも何とか脱出できたみたいだけど、僕は君に対してちょっぴり良心が痛むよ。

だって、僕の脳内で君が華麗に着こなしていたあの少々露出気味で過激なエロ戦闘服、たぶん世の子供たちは今後もＴＶで見る機会はまったくないと思われるからです。本当にごめん。

君のベストアンサーを知りたいです

おそらく、世の中の誰しもが一度は経験したことがあると思うけど、

“　食事の後に音も無く忍び寄ってくる睡魔（スイマ）さんの威力　”

ってヤツは、侮れないものがある。

かくいうこの僕も、昼食後一発目の授業ではかなりの確率でこのスイマさんに全身を襲われ、彼女のけだるい魅力に取り込まれないように大苦戦をする時がある。

シャーペンの芯を手の甲にチクリと刺して身体に刺激を与えてみたり、頭の中で興奮するようなHな出来事を次々に夢想してみたり。

……と、いつもならそんな分の悪い抵抗を必死に試みるんだけど、今日だけは違った。

本体（ぼく）の意志に逆らって瞼が勝手に降りてくることなど本日は一切無し。両目はランラン、というよりはギンギンだ。

その理由は潔いほどに単純で。

“　カリンと顔をくっつけるようにして仲良く教科書を見ているから　”　だったりする。

その結果、眠くなるどころか理性が暴走しそうになるのを抑えるので精一杯。

しかもここでうっかり気を抜くと大変だ。

油断した僕の精神から　“妄想エロ電波”　が発信され、カリンを主役に抜擢したあの架空番組、『未来戦隊　ボンデージ！』の第二話が脳内ストリーミングで配信開始になってしまう。

この１８禁番組のＰＰＶ（ペィパービュー）を中止させるべく、できるだけカリンから離れようとさっきから努力はしている。
だけどやっぱり教科書は見なくちゃいけないし、かといって少しでも距離を置こうとするとその分カリンがどんどんと身体を寄せてきちゃうから全然意味がない。僕らはＳ＆Ｎの磁石のように常にピッタリとくっついている状態だ。
おかげで今日一日、イブキ先生の授業内容がまったく頭に入ってこない。これでは居眠りしているのと何も変わらないよ。参ったなぁ……。

……いやダメだダメだこんなんじゃっ！！
ＰＳＩが使えない分、せめて筆記テストくらいはいい点を取っておかないと！！
ここは集中集中！！　女の子の色香に惑わされずに集中だーっ！！

グッと身を乗り出して教科書をガン見する。僕がＰＳＩを使えるなら発火（パイロキネシス）しそうな勢いだ。
真横のカリンがそんな僕を見て小さく微笑んだ。きっと僕が急にやる気を出したように見えたんだろう。
カリンは持っていたペンのノック部分でツン、と一度僕の腕をつつくと、そのまま教科書の端に小さく何かを書き始めた。ん？　授業のアドバイスかな。えーと、なになに……、

『　好き。　』

ぶはっっ！！
危うく声を出すとこだった。な、なにを書いてるんだよカリン…

…。
文字の告白で僕が動揺しているのを見たカリンは小悪魔的な笑みを浮かべるとまたペンを握る。

『　タイセーは私のこと　どれぐらい好き？　』

ちょ、ちょっとカリン……。今は授業中だよ！？　しかもどれぐらい好きって聞かれても……。
これって付き合っている女の子から聞かれるかなりスタンダードな質問なんだと思うけど、こうして実際に聞かれてみると返答にかなり困る部類の質問だよなぁ。……だってこれって正解が無いよね？
女の子サイドからすると、どういう答えが一番嬉しいベストアンサーなんだろうな。気の利いたことなどまったく思いつかない自分の恋愛スキルの低さが恨めしいよ。
そこへまたツンツンと腕をつつかれる。

『　あと私のどういう所が好き？　』

ま、待ってよ！　僕はまだ一つ目の答えも用意できていないのにもう次の質問を投下ですか！？
あぁ、今ここに好きな人の心をつかむテクニックが書かれた恋愛マニュアル本があればいいのに！　今日の放課後さっそく本屋に寄って、そういう類のハウツー本が売られてないかのチェックはすることにして、とりあえず今はカリンが喜びそうな言葉を大急ぎで返信しなくっちゃ！
ツンツンツンツンツンとペンでつつく回数がここで三倍に増

える。
はい、答えの催促ですよね？　分かっています。でも本当に何て書けばいいんだろう！？

「こぉーらっ！！　ダメでしょ！　授業中に遊んでちゃ！」

――　マズい！　いつの間にか僕らの机のすぐ前にまで来ていたイブキ先生に見つかった！！

「精神雑談（テレチャット）なら感知しやすいけど、そうやってこそこそ筆談されると見つけにくいのよね」

「スミマセン……」

カリンと二人で小さく身を縮める。

イブキ先生はくっついている僕らを両手でグイッと離す。

「二人とも廊下に立ってなさい！　……と言いたいけど、あなた達を二人っきりで廊下に出したら余計お喋りしたりイチャイチャしたりしそうだしね……」

ハイヒールの踵が何度も床に当たり、その度にカツカツと神経質そうな音が鳴る。なんか今日のイブキ先生、機嫌が悪そうだなぁ……。

「僕だけ立ちます。僕が悪いので」

ガタリと椅子を鳴らして素早く立ちあがる。

優等生のカリンを廊下に立たせるなんてとんでもないよ。カリンはお嬢様だからプライドだってきっと傷つくに違いない。

「タイセーは全然悪くありません！　だから私が立ちます！」

うわっ！？　立ち上がったカリンが僕にぴったりと寄り添ってきた！！
ベタベタくっついたらダメだってばカリン！！　今日のイブキ先生は何かにイライラしているみたいだから波風立てないようにしていてよ！

「違います先生！　僕が悪いんです！」
「いいえ私です先生！」
「いいからカリンは黙っててってば！」
「イヤよ！　タイセーを守るのは私の役目なんだからっ！」

あ、またその台詞が出た……。胸の中央がチクリと痛む。
ねぇカリン、君みたいにカワいい女の子がこんな落ちこぼれな僕を一生懸命に守ってくれようとするのは嬉しい。確かに嬉しいよ。身に余る光栄だよ。
でもね、同時にそんな自分がすごく惨めに感じてしまうんだ。そして君がすごく遠い存在のように感じてしまうんだよ。だけどたぶんこの気持ちを包み隠さず伝えても、きっとＰＳＩ能力に優れている君には分かってもらえないんだろうな……。

「あーっもういいわっ！！　じゃあタイセーくんだけ廊下に立ちなさぁーい！！」

いつも優しいイブキ先生が切れた！？
今まで一度もこんな風に声を荒げたことなんて無かったのに、一体どうしたんだろう？　そういえばさっきも職員室で僕にちょっと冷たかったし、何かプライベートでイヤなことでもあったのかな？

「タイセー……」

飼い主に裏切られた子犬みたいな目で僕を見るカリン。

小声で「いいからおとなしくしてて」とだけ伝えると僕は廊下へと出た。この数十分後にすごい体験をすることをまったく知らずに。

レトロな人間ですみません

廊下に出された僕を一番に出迎えてくれたのは静けさだった。
各教室内は防音壁で区切られているので、授業中の廊下はまるで無音地帯みたいだ。
ハァ、でもまさか高校生にもなって廊下に立たされるとは思わなかったよ。イブキ先生の機嫌が悪かったのが敗因だな。
でも本当にあんなイブキ先生、初めて見たよ。この目で直に見たのにまだ信じられない。
いつも生徒にはとても優しいし、とりわけ僕が落ちこぼれのせいか、フルリアナスに入学後のこの二ヶ月間はとくに目をかけてもらっていたような気がしていたからちょっとショックだ。可愛がってもらっていたように感じたのは僕の単なる勘違い、思い込みだったんだな、きっと。

――廊下に立たされて１０分経過した。ヒマだ……。

――２０分経過。超ヒマだ……。

――３０分経……、ん？　誰か来た？

コツコツコツ、と廊下の先から靴音が聞こえてくる。
靴音が鳴るリズムが比較的短い。ということは歩幅が狭いということだからたぶん女の子だ。

やがて廊下の角から現れた女の子は、立たされている僕を見ると少しビックリした顔をする。

「そんなところで何してるの？」

「あっコダチさん！」

来た来た来た来た！

本来は僕の隣に座るはずの女の子、ランコ・コダチの登校だ！

やっぱり今日も遅刻してきたんですね。……というかあともう少しで今日一日の授業が終ってしまいますよ？

「まさか立たされているわけじゃないわよね～？」

コダチさんは腰を振るようにしながら僕の前に歩いてくる。その度に学校の規定より１５センチも勝手に短くしている制服のプリーツスカートが大きく揺れ、付け根のかなりキワドイ部分までが見えそうになったので急いで目を逸らした。

「おっはよ♪　タァーイセッ！」

僕の前に来ると腰に片手を当て、モデル立ちをビシリと決めるコダチさん。

……うーん、どうしてこの女の子は何気ない仕草の一つ一つがこんなにもカッコいいんだろう。

スタイルが良すぎるのが問題なんだよな。おかげでこの娘と話す時、ヘタレな僕はいつでも挙動不審になってしまう。

「お、おはようコダチさん」

……今はとっくにおはようという時間帯じゃないんだけどね。

「ここで何してるの？」

コダチさんがまた違うヴァージョンのモデル立ちを決めたので、緩やかなウェーブがかかったモカ色の長い髪がフワリと揺れた。
「……立たされてます」
「なんで？」
「お喋りしていてイブキ先生に見つかったんだ」
「バッカねー！　精神雑談（テレチャット）がバレちゃうなんてドンくさすぎ～！！」

コダチさんが大ウケしている。でも事実は少し違うので生真面目に訂正をしておくことにした。

「ううん、精神雑談じゃないよ。筆談してたんだ」
「ひっ、ひつだんー！？　アハハハっ、ちょっと止めてよー！　タイセーってば面白すぎーっ！！」

身体をくの字に曲げ、お腹を抱えて笑っているコダチさんに、笑われている側として何て切り返せばいいのかが分からない。
でもコダチさんがここまで大笑いするのはある意味当然なんだよな。
本当はやっちゃいけないことなんだけど、授業中のお喋り、内緒話の類は精神雑談で行うのが当たり前だ。
筆談なんて超懐古（レトロ）な方法、相手がＰＳＩの使えない僕だからカリンも行っただけで、この学校でこんなやり方で内緒話をする生徒なんか恐らくいないだろう。きっとＰＳＩを普通に使える側からすれば、内緒話に筆談を使うなんて、３Ｇ（モバイル）携帯を使わずに手作りの糸電話で話しているくらいのダサさに見えるんだろうなぁ。
「あーあ面白かった！　やっぱりタイセーはサイコーね！」
爆笑しすぎて目に涙が浮かんでしまったコダチさんは、自分の目尻を人差し指で拭う。

「じゃ頑張ってね～！」
コダチさんが僕を置いて教室に入ろうとしたので慌てて「待ってよ！」と呼び止める。コダチさんは「何？」と言うとその場で足を止めてくれた。
「あのさ、コダチさんの席、別の女の子が座ってるんだ」
「ランコの席に？」
「うん、カリン・タカツキっていう子」
「誰それ？　転校生？」
「ううん。元々このクラスの生徒で、用事で二ヶ月だけ休学していたみたいなんだ」
「ふぅ～ん……、でもなんでランコの席なのっ？　後ろの方に一つ空いてるところあるのにっ」

あ、コダチさんやっぱりムッとした……。
そりゃそうだよな、いきなり席を取られて余ってる席に座れって言われても普通は納得しないよね。

「実は僕とカリンは幼馴染なんだ。それ…」
「それでタイセーの隣がいいってその子が言ったというわけね」
コダチさんが僕の説明を途中から華麗に奪い取る。
「う、うん。そんな感じかな」

「……気に入らないわ……」

顔を伏せ、押し殺したような低い声でボソリと呟くコダチさん。
いつも底抜けに明るい娘なのでその豹変振りにちょっぴりビビる僕。
「ご、ごめん！　カリンには明日からちゃんと自分の席に座るように話すから、気を悪くしないでくれる？」

「やーね、タイセーってば！」
すぐに顔を上げ、そう答えたコダチさんはいつも通りのコダチさんだった。
「ランコ、別に気を悪くなんかしてないわよっ？」
「そ、そう？　なら良かったよ」

あれ？　今のは僕の気のせいだったのかな……。

「それでタイセーもそのカリンって子が隣にきてほしいと思ってるの？」
「エ！？」
「タイセーはその子とランコ、どっちと座りたぁーい？」
「ど、どっちと、って……」
コダチさんは僕にすり寄ると、僕の首に両腕を巻きつけてくる。
「タイセーはランコと一緒がいいわよねー？　ねっ、そうでしょ！？」
「わぁ！？　コ、コダチさんっ！？　なにしてるのッ！？」

ちょちょちょちょちょっと！！　何してるんだこの娘！？　顔を近づけてきているだけじゃなくて、さりげなく僕の股間に自分の片脚を差し込んできてるんですけど！？
しっしかも身体が動かないッ！？
両の手首と足首だけが、教室の壁側にグイグイと吸引されているような感覚がする……あっ！　もっもしかしてコダチさんが僕の両手足を念力で押さえつけてるのかっ！？

「ねぇ～、タイセーのハダカの本音を、ランコに聞・か・せ・て♪」

コダチさんのＰＳＩ能力で教室の壁付近に磔（はりつけ）にされた僕は大パニックに陥りだしていた。こ、ここはフルリアナス・ハイスクールの廊下で、ゴルゴダの丘じゃないはずだぁーっ！！

「早く言わないと、ランコはどうなっても知らないんだからぁっ♪」

ねっとりと絡みつくような視線を送り、コダチさんの美脚が僕の足の間で前後にスリスリと忙しそうに動く。下半身から背筋に向かってぞわわっとした快感が駆け上ってくるのが分かった。

待って待って待って待って！！！！

そそそそんな悩ましいことをされたらもう一人の僕（ジュニア）が勝手に目覚めちゃうんですけどーっ！？

さらっちゃうぞ

落ち着け！　静まれ！　頼むっ、目覚めるなっＭｙリトル分身っっ！

……。

……。

……うん、やっぱ無理です。あっさり降参。片手で力なく白旗を降らせていただきます。

あぁ、もしこのシーンを、後でカリンに接触感応（サイコメトリー）で見られちゃったら、我がメデューサ様は絶対に許してくれないだろうなぁ……。

だ、だけどさ、逆ギレするわけじゃないけど、そもそも学校の廊下でいきなりこんな刺激的なことをされて一切反応するなって方が間違ってる！　自然の摂理に反してるよ！　おそらく念力で押さえつけられているんだと思うけど、身体もほとんど動かせないし！

つまりこの反応は、僕がコダチさんが好きだとかそういうことではなく、あくまでも男の悲しき性が引き起こしているアクシデントみたいなもんです！　だから決してカリン、君を裏切っているわけではないからね！！

……と、万一カリンにバレた時の身を守る保険として、今の僕の心情（きもち）を強く刻み付けておく。我ながらスケールの小さい策士なことは重々承知だ。

「ねぇタイセ～、絶対にランコの方がいいでしょぉ～？」

一人煩悶する僕の首元にしっかりと手を回し、コダチさんの肉体（スキン）接触（シップ）はますます濃厚さを増してきていた。

だっだから顔を近寄せすぎですってばコダチさんっ！

僕らは背の高さがほぼ同じだからこんな体勢でそんなに迫られるとそのまま唇が触れちゃいそうだよ！

「んもうっ、ランコがここまでしてるのにまだ足りないの？　タイセーって意外と欲張りなのね～」

ここまでのアピールでもなかなかＹＥＳを口にしない僕に、コダチさんは自分のスカートの端に手をかけた。

「ほらほら早くランコって言わないと～……」

制服のプリーツスカートがぺろっと腰の辺りまで大きく大胆にたくし上げられる。

「このままタイセーをさらっちゃうぞ♪」

「ぶはっ！！」

ひっ、紐っっ！？

コダチさんが身に着けていた下着が過激すぎて、鼻腔から鮮血がほとばしりそうになった。慌てて片手で鼻付近を覆う。今はなぜか両手が多少動かせるようになってるけど、そんなことどうでもいいよ！！

とととにかくココココダチさんっ、その両脇ヒモタイプはエロ過ぎですっっ！　君の下着のトライアングルの面積、洒落にならな

いくらい小さすぎだよっ！？

「やだぁ、ランコってば今日は大サービス♪」

やだぁ、と言いつつ、まったく恥らっている様子が無いんですが！？

コダチさんはメッチャ爽やかな顔でたくし上げていたスカートから手を話すと、また僕の首元にかじりついてきた。

「ね、ランコが一番よね、タイセー？」

「ち、違うよっ！！」

ダメだもう限界だ！！

肩をグイッと押し返し、コダチさんを引き剥がす。するとコダチさんは一瞬呆気に取られた顔をし、その場に固まった。

「……今なんて言ったのタイセー？」

「え？」

「タイセーはランコの事が好きなんじゃなかったの？」

「えええーっ！？」

ぼぼっ、僕、コダチさんにそんな態度取ったことあったっけ！？

思い当たるフシはまったくないけど、席がずっと隣だったから何かの拍子に誤解されるような態度とか言動をしたことがあったのかな……！？

フルリアナスに入学してからの二ヶ月間、コダチさんと会話したシーンを走馬灯のようにハイスピードで思い返してみる。だけど怪しい場面は探し出せない。

でもこの問題はきっちりカタをつけておかないとマズそうだ。後々、この疑惑も何かのきっかけで我がメデューサ様の逆鱗に触れる事態になりかねない。そこで恐る恐るコダチさん本人に直接確認し

てみることにする。

「コ、コダチさん、僕、君を好きだって言ったことあったっけ！？」
「ないけど～？」
「ハ！？」
「でも男はみーんなランコが好きなはずよ？」

……危うく廊下でコケるところだった。
な、なんてジコチューな理由なんだ！　しかしコダチさんは全く悪びれてない様子でしげしげと僕を見る。

「タイセーだってそう思うでしょ？」
「そ、それはそうかもしれないけど……」
モゴモゴと口ごもる。
思わず飛び上がるぐらいビックリしたけど、きっとこれはコダチさんなら許される思い込みだろう。
だって顔もカワイイし、マツリに匹敵するぐらいのフワフワで大きな胸、そして強く抱きしめたら折れちゃうんじゃないかってなくらい引き締まった細い腰、そしてプリプリに張ってキュッと盛り上がった見事なヒップ。僕は今まで生きてきて、こんなにリアルな砂時計体型の女の子を見たことが無い。もはや芸術的レベルだ。
カリンはボンデージファッションが似合いそうだけど、チャイナドレスの着こなしではコダチさんの右に出る女の子はきっといないはずだと僕は密かに思っている。

「ねぇタイセー」
「な、なに？」
「タイセーはランコのこと好きじゃないの？　もしかしてホモ～？」
うわっ、コダチさんの僕を見る目、完全に異常者（アブノーマル）扱いの目だよっ

！

「ホ、ホモじゃないよ！！」
「じゃあロリ？」
「ロリコンでもないってば！！」
「じゃあ熟…」
「それでもないよーっっ！！」
あぁもういい加減にしてくれ！　言わせない、そのジャンルだけは最後まで言わせるもんか！！
「ふぅーん……」
僕の性癖チェックを終えたコダチさんは、僕の首に巻きつけていた両手を外し、バルーンのような胸の前で腕組みをする。
「タイセーのことは前からおかしいとは思ってたのよ。だって席が隣なのに、タイセーはあまりランコの方を見ようとしてなかったもんね」

……あのー、コダチさん？　両手を外してくれたついでに、出来ましたら僕の股間からその美しきおみ足も抜いていただけないでしょうか！？　もうマジで限界が近いんですけど！？

「ランコはね、世の中の男み～んながランコの方を向いてくれていないとイヤなの！　タイセーはランコ以外でクラスに好きな女の子がいるの？　だからランコに興味が無いの？」
Ｗａｏ！！　腕組みをしたフラミンゴからいきなり核心をつく質問が来ました！！
「どうなのよタイセー？」
「そ、それは……」
喉をゴクリと鳴らして答える。

「す、好きな子はいるよ？」

「それ、誰！？」
「だ、誰って……」

き、気のせいか、コダチさんの目つきがキツくなってきたような……？　まっまさかカリンがＰＳＩで“乗っ取り（ライド）”を使ってるとかじゃないよね！？

「それは今日から登校してきたカリ…ふわぁぁっ！？　ちょ、ちょっとコダチさんっ！？」
僕の足の間に挟まってきているコダチさんの太ももがグイ、と上がる。しかもグリグリとこねくり回すような動きをし始めたのでもう一人の僕が完全に目覚めてしまった。
「うあああああ！？」
これ以上の刺激はダメだってばコダチさん！！　僕の体内で超巨大なビッグバンが起っちゃうよ！
「待ってコダチさん！　ストップストップ！　ぐりぐり脚を動かさないでよーっ！！」
「どうしてよっ！？　タイセーは二ヶ月もずっとランコの隣だったのに、どうしてランコじゃなくて別の子が好きなの！？　おかしいじゃない！！　そんなのありえないじゃない！！」

ダメだ！　全然聞いてくれてなーいっ！！　それにおかしいじゃないって言われても僕が好きなのは幼馴染のカリンなんだ！　コダチさんがどんなにエッチで魅力的でもそれは変わらないよーっ！
だだだからその脚を早く外してくださいってばーっっ！！　ぼっ僕、もう限界ですっ！！　前立腺が一気に崩壊しちゃいますっ！！

「もうランコ頭にきたーっ！」

完全に切れたコダチさんが僕に身体を完全に密着させる。と同時に身体の細胞が溶けるような不思議な感覚が僕を襲い、視界が白くなった。

「タイセーのこと、本気でさらっちゃうからぁーっ！」

「うわぁぁ！？」

な、何が起ってるんだっ！？

あ！？　こ、これってもしかして中距離移動（テレポート）ッ！？　でも自分以外の人間を連れて移動できるなんてかなりのＰＳＩ能力がなきゃ出来ないよっ！

あぁっ！？　分かったぞ！！

ＴＯＫＹＯを一気に横断できるほどの力を持ったクラスメイトって、このちょっとエッチな女の子、ランコ・コダチのことだったんだっ！！

魔境に迷い込んでしまったようですが脱出方法が分かりません

――　身体が熱い。呼吸が苦しい。目の前真っ白。ついでに頭がぼんやりと……。

「ここ…は……？」

普通に呼吸できるようになったと同時に、それまで無色だった視界が急にリセットされる。

目の前にはケロッとした顔のコダチさん。そして頬に当たってくる爽やかな涼風。遠くに見える山々の緑が目に優しい。たぶん時間に直せばほんの数秒の出来事だったとは思うけど、初めての体験のせいか１０分以上経ったようにすら感じた。

ここは一体どこだろう？　何となく見慣れた光景のような気もするんだけど……。目を何度も瞬かせ、本来の役割を果たすよう、視神経に喝を入れる。

「ここ？　フルリアナスの屋上よ」

視神経が捉えた映像を、僕の脳がせっせと分析し終わる前にあっさりと正解をくれるコダチさん。

屋上？　……ということは廊下から数メートル上に移動しただけなのか。

そしてこの時ようやく気付く。自分が屋上の手摺に両脇を引っ掛けてもたれかかっている体勢なことに。

これじゃまるで物干し竿にダラリと干されっぱなしのくたびれたTシャツみたいだ。あまりにカッコ悪いので手摺から腕を外し、両足を踏ん張って何とか立ち上がる。そんな僕を見て、コダチさんが

一応心配してくれた。
「だいじょーぶタイセー？」
「う、うん。なんとか……」
　するとなぜかコダチさんはここで急にありえないくらいにまで瞳をキラキラと輝かせ出し、僕に詰め寄ってくる。
「ねぇねぇ！　もしかしてタイセーは中距離移動童貞なの！？」
「…ハ？」

　コダチさんの言っている言葉の意味が分からないので首を傾げる。テレポート・チェリーなんて授業で習ったっけ？

「コダチさん、それ、どういう意味？」
「テレポートしたのって初めてだったのかってことよ」
　あぁなるほどね！　そういう意味か！　コダチさんがストレートに言い直してくれおかげでようやく言っている意味が理解できる。っていうか初めからこっちの言い方にしてほしかったよ。
「うん」と頷くと、
「そうなんだー♪　じゃあランコがタイセーの初体験の相手ってことなのねっ♪」

　人に聞かれたら誤解を与えそうなセリフと共に嬉しそうにその場でくるりと一回転をするコダチさん。あ、また禁断のトライアングル地帯が見えたよ……。
　現在、僕の頭の中にある記憶映像（ブリップ）のほとんどは、【ランコ・コダチのバミューダトライアングル　～魅惑の魔境編～】がほぼ独占している状態だ。今、誰かにＰＳＩで中を覗かれたらきっと恥ずかしさで悶死できるだろうな……。
　なのでコダチさん！　頼みますからもうこれ以上の露出は止めて下さい！
　女の子耐性が無いチェリーな僕には、その三角地帯は刺激が強す

ぎます！　君のトライアングルを食べ物のレベルで例えるなら、満漢全席クラスッ！　はっきりいっておかずとしてのレベルをヨユーで超えちゃってるんですっ！

「それでどうだったタイセー？　初体験した感想は！？」

この娘、更に目の輝きが増してきてるよ！？

一刻も早く下の廊下に戻りたいけど、このままじゃ絶対戻らせてくれないだろうなぁ……。とりあえず股間から無事に脚も外れたことだし、ここはひとまず素直に感想を答えておくことにしておいた方が無難っぽいと判断した。

「な、なんかよく分からないけど身体が熱くなって目の前が真っ白になって息とかも結構苦しかったよ」

「あははっ、そんなの最初だけよ！」

僕の感想を聞いたコダチさんはとてもおかしそうに笑う。

「ランコみたいに慣れてくるともう快感しか感じられなくなるんだからー♪」

そっ、そんなもんなの！？

でも落ちこぼれの僕がコダチさんの協力無しにもう一度テレポート体験ができることなんて果たしてあるんだろうか……？　……あ、またブルーな気分になりそうだ。マズいマズい。頭を数度振って気持ちを切り替える。

「あ、あの、コダチさん」

「な～に？」

「僕、もう下に戻ってもいいかな？」

「なんでっ！？」

うわっ、コダチさんの目つきがまた鋭くなった！！　カリンと反

応が似ているだけについ条件反射でビクビクしてしまう。

「な、なんでって、僕はお喋りした罰で立たされている最中だから」

「どうしてわざわざ罰を受けに戻るのよ！　ここはランコと二人きりになれて有頂天にならなきゃおかしい場面でしょっ！？」

「そ、そんなこと言われたって……」

「やっぱりタイセーはおかしいわ！　男としてどこかの機能が欠陥しているとしかランコには思えない！」

はいコダチさん、仰るとおり欠陥はちゃんとあります。“　ＰＳＩ能力ゼロ　”という情けなさＭＡＸの立派な欠陥人間です。

世の中のすべての男を虜にできるというプライドが傷ついたのか、再び憤ってしまったコダチさんは「タイセー！！」と叫ぶと僕をビシリと指さした。

「あなたちゃんと勃つの！？」

「ハイ！？」

「さっきちょっと弄ってみたら結構反応はあったけど、ちゃんと完全に勃つのかって聞いてるのよっ！」

な！？　コダチさん、女の子がそんなはしたない事を口走るのはどうかと思います！！　そして僕の分身のミラクルな成長ぶりは君の太ももにしっかりと伝わっていたんですね……。穴があったら入りたい。恥ずかしさで意気消沈する僕に業を煮やしたコダチさんがずいと近づいてくる。

「もういいわ！　ランコが直に検証するから！！」

「けっ検証ってなに！？　どういうこと！？」

「下、全部脱ぎなさいタイセー！」

「ななななに言ってるのコダチさん！？　頭大丈夫！？」

「だからランコが直接触ったりとか色々してあげるって言ってるの！　ランコの必殺マッサージでタイセーもランコにメロメロになるはずよ！　そうならなきゃ絶対におかしいもん！」

いえっコダチさん！　断じてそれは違います！！　おかしいのは僕じゃなくて君のその思考回路だってば！！

今日僕はここで散ることになるようです

お腹の辺りでカチャカチャとおかしな金属音がし始める。真下に視線を向けようとしたけど、あれっ！？　また身体が動かなくなってる！？

ウエストの周辺をやんちゃなヘビが元気にのたくっているようなくすぐったい感触がした時、

「いただき～♪」

嬉しそうなコダチさんの手には一匹のヘビ……じゃなくて、一本の帯のような黒い革製品が……って！！　それもしかして僕の制服のベルトじゃないですか！？

「なっ、何してるのコダチさん！？　それ僕のだろ！？」

「そーよ！　だって脱ぐのに邪魔でしょ？　だからランコがサービスで取ってあげちゃった♪」

うわわっ少しスラックスがずり下がってきた！？　まだ成長途中なことを考慮して少し大きめの制服を買ったせいだ！！　慌ててウエスト部分をつかんでこれ以上の自然落下を必死に防ぐ。

「コダチさんそれ返してよ！！」

「だーめ！　返してほしかったらランコに身も心も夢中になることねっ」

そっそんなムチャクチャなー！！

体育の時間にマツリから「嫌いだけど付き合え！」って言われた時も驚いたけど、こっちのレベルの方がはるかにぶっ飛んでるよ！！

「えいっ！」

「あぁーっ！？」

コダチさんの掛け声と共に、取り上げられたベルトが頭の上を優雅に飛んでいく。慌てて片手を伸ばしたけど全然届かなかった。

……僕のベルト、落ちていっちゃったよ……。綺麗な放物線を描きながら校舎を後にするベルトをただ呆然と見送る。

「さぁタイセー！　心の準備はできた～？　これからランコの愛情たっぷりな超別格・愛撫（スペシャル・マッサージ）であなたをメロメロにしちゃうからね！ランコのスーパーテクをたっぷりと堪能しなさい♪」

スーパーテクってなに！？　っていうか、白昼堂々、校舎の屋上で一体君は何をおっぱじめる気なんですか！？

「ほらぁ～、早くそれ下ろしちゃいなさいよっ」

コダチさんの手が僕のスラックスにかかり、容赦なくぐいぐいと引き下ろそうとする。

「やややややややめてよコダチさん！！！！！」

まさか学校の屋上で女の子に制服を脱がされそうになるなんて、フルリアナスに入学する当初は思ってもみなかったよ！！　念力をフルで使用中のコダチさんは僕の抵抗など物ともせず、前方に身体を折り曲げて僕の下半身に顔を近づける。

「へ～タイセーってこういう柄が好みなんだ～！　ちょっと意外！」

「わぁぁ！？　み、見ないでよ！！」

コダチさんに下着を見られたぁーっ！！

「タイセー、結構いいセンスしてるじゃない。見直したわ」

しかも見直されたぁー！！　でも褒められてもそれどころじゃないから全然嬉しくないよ！！

と、とにかくこのエッチな女の子を至急どうにかしないと！！
でも後ずさりしたくても背後には手摺がぴったりだし、目の前には目を輝かせたコダチさんが迫ってるし、逃げ場が無いです！！

「ほらほらいつまでも恥ずかしがってないの♪」

脱出策が浮かばない……！
パニックのため手のひらが汗でしっとりと湿りだしていた。精神的な興奮にプラスし、初夏の陽気も手伝って額からも汗が吹き出てきている。コダチさんと一緒にいる限り、体外への水分と塩分の流出は抑えることができなさそうだ。
……ん？
なんだろう、体内はこんなに熱いのに、右側の身体の表面だけが少し涼しいような……。ミョーに不自然な冷気を右頬辺りに特に強く感じるけど気のせいかな？
チラリと横目で右方面を見る。

「カカカカカカカカカカリンッ！？」

人間って本当に心の底からビックリすると死んじゃうことがあるらしい。
今の僕もマジでそんな状態です。いや、もしかしたらすでにひ弱な魂魄は頭のてっぺんから抜けかけているのかもしれない。い、いや、そっそんなことよりなんでっ！？　なんでカリンがここにいるのっ！？

「……タイセー……」

カリンの口から僕の名が静かに告げられ、新緑の風がメデューサ様の綺麗な亜麻色の髪を大きく波立たせる。

「は、はいッ！？」

斬られる斬られる斬られる斬られるマジで斬られるぞこれはっっ！！

どうみたってこの光景ヤバすぎだもん！！　ずり下がるスラックスからトランクスが覗いちゃっている僕に、そこに顔を近づけているコダチさんだよ！？　何言ったって絶対に信じてもらえないよこれは！！

突然屋上に現れたカリンはゆっくりと腕組みをし、幽体離脱しかけている僕を冷たい視線で射抜く。

「……何か言い残す事はあるかしら？」

――　よく晴れた6月の午後。

フルリアナスの屋上はすごく眺めも良くってこんなに気持ちいい風も吹いているのに、どうやら僕は大好きな幼馴染の手にかかってここで壮絶な討ち死にに遭う運命のようです。

どんなにカワイイ娘にだって弱点はあるみたいです

天を衝くくらいの激しい怒りが体内に湧き起こったとき、普通なら燃えるぐらいの熱いオーラが体外に滲み出るものだとばかり思っていた。

だけどカリンは違うようだ。ひんやりとした冷気をその御身から発せられ、僕の右半身を擬似的に凍りつかせる。

「……何か言い残す事はあるかしら？」

こっ怖い！！　無感情に近いその口調が逆に恐ろしさを醸し出しています！！

こっこれはなんとなくの直感だけど、ぎゃーぎゃーとヒステリーを起こして喚く女の子より、こういうタイプの女の子の方が怒らせるとマジでヤバそうな気がする。でもこれは謝って許してもらえるレベルとはとても思えないし、一体どうすればいいの！？　溺れる者はワラすらもつかむんだぜの心境で無理やり言葉をひねり出そうとしてみたけど、アウアウとぶざまなオットセイみたいな擬音しかでてこない。

そんな超最弱な僕の前にコダチさんがスッと割り入ってきた。彼女のフワフワした長い髪に遮られ、一瞬カリンの姿が見えなくなる。

「あなたがタイセーの幼馴染？」

コダチさんが厳しい視線を送ると、それを弾き返すようにカリンも無言でキツい視線を浴びせる。姿形はちょっと違うけど、まるで

お互いを鏡で照らし合わせているみたいな位置関係に、嫌な汗が止まらない。
ここからトンデモナイ修羅場が始まる予感がするのは僕だけだろうか。だって二人の間に漂うこの一触即発感、すでにハンパじゃないレベルですよ……！？

「どうなのよ！？　何とか言いなさいよ！」

戻ってこない返事にコダチさんが苛立ち始める。するとようやくカリンがコダチさんにも口を開いた。
「……幼馴染ならどうだというのかしら？　あなたには何も関係ないことだと思うけど」
「あるわよ！　幼馴染だからって勝手にランコの席に座らないで！　タイセーの隣はランコって決まってるんだから！」
「ならそれは昨日までの話ということね。今日からは私がタイセーの隣よ。異論は認めないわ」
「なんでランコがそれに従わなきゃいけないのよ！　タイセーの隣はランコなの！！　そう決まってるの！！」
「誰が決めたのかしらそんなこと」
「ランコに決まってんじゃない！　それにタイセーの初体験の相手はランコなんだからね！　だからタイセーはランコのものよ！」

ええええええええええええええええええええええええええええーっ！！
いやいやいやいやいやいやコダチさんっそのカミングアウトはおかしいですよ！！
この一触即発なシーンで言うべき事じゃないし、大体その初体験の相手ってさっきのテレポートのことだよね！？　絶対に誤解されちゃうじゃん！！　メデューサ様のあのゴルゴンアイで僕が石化しちゃうじゃん！！

コダチさんの背中からおずおずと顔を出してみると、カリンとバッチリ視線がぶつかる。

「タイセー。ランコ・コダチから離れて速やかにこちらに来なさい。あなたの身体に直接訊けば全てが分かることよ」

カリン様の接触感応宣告（サイコメトリー）がキター！！！！！
マズイな、どうしよう……。コダチさんとの初体験疑惑は完全な濡れ衣だから何も問題はないけど、ヤマダさんとのことを知られるのはちょっと……。

「タイセーは絶対に渡さないわよ！」

僕を背後に擁し、気勢を上げるコダチさんに驚きを隠せない。この娘ってそんなに僕のことが好きだったの！？
「いいえ返してもらうわ。タイセーは私のものよ。これはずっと前から決まっていた事なんだから」
「そんなに欲しいならあとで返してあげるわよ！」
「聞き分けのない人ね……。実力行使じゃないと分からないのかしら？」

ついにカリンの身体から戦闘オーラが立ち昇り始める。危険だ！
このままだと今度はこの屋上でアマゾネスが覚醒してしまいます！！

「あとでってどれくらいを指すの？　１０秒後？　それとも２０秒後かしら？　言っておくけど私が待てるのはせいぜいあと１分くらいよ」

さ、さすがカリン……！
君はお嬢様だから、何かを待つってことに慣れていないんだね、きっと。でもそれはあまりにもこらえ性がなさすぎだと思うよ？
「タイセーがランコにメロメロになったらに決まってるじゃない！そしたら用が無くなるから返してあげるっ！」
エエエー！？　それはつまり、好きにさせたらあっさり捨てるってこと！？　それもそれでかなりひどくないですかコダチさん！？
「ムダなことはおよしなさい。タイセーがあなたに夢中になるはずがないわ」
「どうしてよ！？　ランコが本気になればタイセーだって簡単にランコの虜になるわよ！！」
「浅はかな人ね。それでも無駄よ。何をしたってあなたになびくはずがないわ」
「ランコはこんなにカワイイのよ！？　なんでそこまで言い切れるのよ！」
「そんなこと当然でしょう？　だってこの私がタイセーを好きなのよ？」

どっちも見事なまでの自信満々キャラだーっ！！！　たっ確かにカリンもコダチさんもすごく美人だけど、その揺るぎない自信は君らのカラダのどこから溢れ出てきているんでしょうか！？
「じゃあタイセーに決めてもらいましょ！　あなたとランコ、どっちとエッチしたいか勝負よ！！」

ハハ……これまでの流れでなんとなくうっすらと予想は出来ていたけれど、やっぱりそっち方面に行くんですねコダチさん……。この娘の頭の中、僕ら男子と同レベルのような気がするよ。
「エ、エッチ勝負……！？」

なぜかわずかにひるんだ様子を見せるカリン。それを目ざとく見つけたコダチさんがすかさず突っ込みを入れ始めた。
「あららどーしたの～？　もしかしてランコ相手に勝ち目が無いと気付いて気後れしちゃったとか～？」
「そ、そんなことないわよ！」
「そーお？　だってあなたとランコじゃスタイルに差がありすぎじゃない！　だってあなた……」
コダチさんのセクシーポーズが僕の前で綺麗に決まる。

「おっぱい小さすぎるじゃなぁーい♪」

凄まじい爆弾発言キターッ！！
コダチさんが現在僕らの前で披露しているポーズは、前かがみになって二の腕で胸を挟み込み、わざと谷間を強調させるスタイルだ。いつの間にか制服のシャツのボタンが上から四つ目まで外れてるし、挑発するにもほどがあるよ！
でもカリンの胸ってそんなに言うほど小さいかなぁ……。全裸を見たわけじゃないし、幼馴染だから擁護するわけでもないけど、そこそこあるような気がするんだけど。
そりゃあマツリやコダチさんに比べたら遥かに見劣りはしちゃうと思うけど、平均くらいはちゃんとあるんじゃないのかなぁ。高一女子のバストの平均値が何センチなのかはよく知らないけどさ。
「べっ、別に小さくなんかないわっ！　あなたみたいなお化け巨乳じゃないだけよっ」
下唇をグッと噛み、悔しそうな顔をしているカリン。あれっ、も

しかして「胸が小さい」って、カリンには地雷ワード……？
一方のコダチさんは余裕シャクシャクの表情だ。
「アハハッ、おっぱいが小さい人ってすーぐそういう負け惜しみを言うのよね～！　“　爆乳　”とか“　魔乳　”とか、“　年取ったら垂れるのに　”とか！　でもランコみたいにこんなに大きいほうが何かと便利よ～？　あなたみたいにぜんぜん無い人に比べてできるプレイの幅も大幅に違うしね♪」

そうなのそうなの！？　そんなにバリエーションが豊富になるの！？　バストが特盛の女の子限定でのプレイ内容、すごくすごくすごく興味はあるけど、ここでコダチさんに尋ねたら、僕の身体はネメシス様の復讐の炎によって一瞬で消し炭にされることだろう。

「さぁタイセー選んでちょーだい！！　と～ってもセクシーなランコと、おっぱいが小さいからブラにパットをぎゅうぎゅうに詰めて上げ底をしている幼馴染さん、どっちと今すぐエッチした～い？」

振り返り、両腕を上げて二度目の色っぽいポーズを決めるコダチさん。眼下でコダチさんの大きな胸が誘うようにぽわんぽわんと揺れている。次はいよいよ“　女豹のポーズ　”あたりを披露してきそうなテンションだ。……っていうか、カリンってブラで上げ底してるの！？

「どこ見てるのタイセー！！」

マズい！　つい目がいってしまったところをカリンになじられた！
それにしても胸の事をコダチさんに指摘されてから、カリンの態度が急におかしくなってきているみたいだ。全然冷静じゃなくなってきているよ。そんなに動揺されると、さっきの“　ブラに上げ底疑惑　”が真実のように見えてきちゃうから止めて欲しいんだけど

なぁ。

「んふっしょうがないわよぉ～、だってどうみたってランコのカラダの方があなたよりも魅力的だもん！　ね～タイセー♪♪」
「わっ私だってあなたより優れているところがあるわ！　あなたの方が胸は大きいけど、脚は私の方が綺麗よ！！」

ちょっ何を言い出してるんだよカリン！！　ムキになっているカリンを見て思わず頭を抱えそうになる。君、完全に挑発に乗ってコダチさんと同じ土俵に上がってしまってるじゃん……。

「あら脚だってランコの方がキレイよー？　ね、タイセー？　さっきいーっぱいスカートの中を見せたからタイセーもよーく分かってるわよねーっ！」
「さっきスカートの中を見せた、ですって……！？」
カリンの表情がこれ以上ないくらいにまで強張る。そして怒りを自らの足取りに乗せ、ずんずんと僕らの側に近づいてきた。
あああああああもうダメだぁー！！　ここで本当に詰みだよ僕の命の灯火は！！

巨乳　ｖｓ　貧乳！？

怒りに我を忘れたカリンが、コダチさんを完全にスルーして僕の前に立ち塞がる。

ダメだもうおしまいだ！！　ついにメデューサ様に抹殺されちゃうよ！！

カリンの影が僕の体の前面をゆらりと覆う。キツく目をつぶり、下っ腹に力を入れて刑の執行を待った。

うぅ、君がどのＰＳＩ能力で僕を断罪するつもりなのかは分からないけどっ、このまま裁くのなら、せめてっ、せめて一思いにお願いしますっ！！

「ひどい……私だけを見てくれるってさっき約束したばかりなのに……！」

……ん？

ゆっくりと目を開けると、カリンは怒ってなかった。でも代わりにちょっぴり泣いていた。まさか泣きだすとは思っていなかったのでうろたえてしまう。

「タイセーのウソつきっ！」

「……カリン……」

僕の前で涙ぐむカリンがすごく儚く見えた。さっきの約束を破るようなことは何一つしていないつもりだけど、でもこうしてカリンを傷つけて泣かせていることは事実だ。

「やっ、約束は破ってないよっ」

心の中で何かが弾け、否定の言葉が口をつく。

……でもこの罪悪感に似た気持ちはどうして湧き起こってくるんだろう？　ほんの一時とはいえ、コダチさんの脚線美や特盛バストに目を奪われたことに対する、後悔の気持ちからきているのかもしれない。

もしそうなら、今の僕がなすべきことはただ一つ。

それはカリンに僕の想いを全力で伝えることだ。それしかない。

「カリン、聞いて」

「……」

戸惑いながらも涙に濡れた睫を瞬かせ、素直に僕を見上げるカリン。ずり下がり始めているスラックスを急いで引き上げ、伝えなきゃいけない気持ちを頭の中できちんとまとめる。

よし、い、いくぞ！

まずはすぅと一度深呼吸。落ち着け僕。後は一言一言、ゆっくりと言葉にしていくだけだ。

「ぼっ僕、確かにコダチさんの脚とかさっき見ちゃったよ？　でもそれは見ようとして見たんじゃないし、コダチさんに特別な気持ちを持ってるから見たわけでもないよ。それは絶対に信じてほしいし、あともう一つ、僕が好きな女の子はカリンだけだよ。それも信じて」

……返事が戻ってこない……。

カリンを見ると、……あれ？　呆然としちゃってるの？　勢いに押されて何を言われても頷いてばかりいた僕が、ここで突然こんな告白をしたので驚いちゃったのかな？　メデューサ様ご本人が石化するという珍事が起きてしまっています。

「カリン、今のちゃんと聞いてた？」

細い肩をつかんで前後に揺さぶると、赤面中なメデューサ様は我

に返り、急に顔を横に背けた。
「そそっそうでしょう？　タタタタイセーも、よよっようやくわわ私のみ、みりょくを、ここっ根本から理解できたようねっ！」
……えーとカリン？　お嬢様然とした態度に戻ったのはいいけどさ、台詞めっちゃ噛みまくってるよ？　でもこんな風に冷静さを失ったカリンもいいなぁ。そして改めて分かったよ。僕はこの女の子が本当に好きなんだ。
幼馴染でお嬢様、おしとやかで凛としているけど、怒っちゃうとメデューサかアマゾネスに一瞬で激変。でも僕はそんなカリンが大好きなんだ。
「うん、心の底から理解できた。カリンが一番だよっ」
ニコッと笑顔でスマートに言えたっ！　きっと偽り無い本心から出た言葉だからなんだろうなぁ。
こちらが見ていられないくらいに真っ赤な顔のカリンは、頭の上からほんのりと湯気まで出し始めている。スゴイな、冷気だけじゃなく熱気も出せるんだね。ふと思ったけどヒトの脳の沸点って何度なんだろう。脳味噌が沸騰していないといいけど。
だけどこれぐらいじゃ足りないなぁ。もっともっともっと、カリンに僕の気持ちを伝えたくてたまらなくなっている。今なら臆さないでなんでも伝えられる気がするんだ。
よしっ、じゃあ言葉では伝えたから、今度は行動で示してみようっと！
昂る感情に後押ししてもらって、頭のてっぺんから湯気を出してはわはわしているカリンを思い切り抱きしめてみる。うわっカリンの熱気が伝わってきて身体の前面が熱い！　だけどすっごく幸せだー！！　落ちこぼれの僕がこんなに幸せになっていいのかなぁ？

嬉しすぎるよ！
そんな喜びに打ち震えていると、冷やりとした感覚がなぜか今度は背中に。振り返ると……、

「……何よ何よランコの前でイチャイチャして……っ！」

今度はコダチさんが怒りの冷気を発してたーっ！　なになに！？
美人って怒ると誰しもこうやって冷気を発することができるものなの！？
「なんでそんな貧乳な子がいいのよタイセー！」
プライドを傷つけられたコダチさんが叫ぶ。そしてコダチさんの暴言に、腕の中のカリンの身体がビクッと小刻みに震えた。
「抱きついてるのにまだ気がつかないの！？　今も教えてあげたでしょ！　その子の胸、あるように見せかけてほとんど詰め物（パッド）でごまかしてるだけなのよ！？　ランコは透視でとっくにお見通しなんだから！！　ねぇ！　カリンって言ったわねっ、そうでしょ！？　そのふくらみ、インチキよね！？　まがい物よね！？　“　ワタシの胸は小学生並のマナ板です　”　って、タイセーの前で潔く認めなさいよっ！」

「……わっわたし……」

青ざめた顔で黙り込むカリン。
そっか……。
腕の中で力なく俯いてしまったカリンを見て、僕はすべてを理解した。きっと、コダチさんの言ってる事は全部本当のことなんだね……。
うな垂れてしまっているカリンの頭にそっと手を置き、僕の気持

ちが全部伝わるよう、精一杯優しく撫ぜる。
……うん、大丈夫だよカリン。何も恥ずかしがることなんかないし、ブラに上げ底なんかしなくてもいいし、巨乳なコダチさんに劣等感を感じることだってないんだ。だって胸が大きくたって小さくたって、カリンはカリンだから。僕はそれで充分だよ。

「コダチさん」

また泣き出しそうになっているカリンの頭をぎゅうっと全力で抱きしめ、コダチさんに顔を向ける。
「僕は貧乳な子が好きなわけでもないし、かといって巨乳な子が好きなわけでもないよ。僕はカリンが好きなんだ。それだけだよ」
コダチさんの身体が怒りでふるふると震え出す。
「……タ、タイセーはやっぱりおかしいわ！　ランコよりそんな子の方がいいなんて男として絶対におかしいわよ！」
「そうかな？　言えば傷つけてしまうことが分かっているくせに、その子が隠しておきたいことを平気で暴露しちゃうような子が男に好かれるとは思えないけど。少なくとも僕はそういう無神経な女の子はとっても苦手だよ」
コダチさんが下を向いて黙り込む。シンとする屋上。膠着する場。
ちょっとキツく言い過ぎたかな……。でもあんな心無い言葉でカリンを傷つけたことはやっぱり良くないと僕は思う。

「……どうしてよ……！」

顔を伏せ、コダチさんが両肩を震わす。
「どうしてタイセーはランコに夢中にならないのッ！？　ランコの……ランコの魅力が分からない男なんてっ、この世界からみーんないなくなっちゃえばいいのよぉぉぉぉーっ！！」
突然コダチさんの頭上にいくつかの渦のようなものが現れた。

ええっあの小型ブラックホールみたいのは何！？　大気を捻じ曲げてるように見えるけど……。

「タイセーのばかばかばかばかばかぁぁぁぁぁーっ！！」

たくさんの渦が銃弾のような形状に変わり、僕めがけて一気に襲い掛かってきた。ここで逆ギレですかコダチさん！？

「危ないタイセー！！」

カリンが僕を急に突き飛ばす。標的は変わったのに弾は軌道を代えずにそのまま大切な幼馴染へと突っ込んでいった。

「カリン！？」

コンクリートに尻餅をついた僕は、身代わりとなってくれたカリンの名を叫んだ。

恐らく自分が発動できるどれかの能力を使って結界（シールド）を張ったのだろう、渦から生まれた弾丸は耳障りな高音と共にカリンの目前で次々に粉砕され、あっという間に消滅してゆく。すごいやカリン！

「……あなた、私の男（タイセー）に攻撃をしかけたわね？」

すべての攻撃を完全に無効化し、冷静さを取り戻したカリンが静かに片手を上げる。コダチさんに向けたその眼差しは、たった今まで涙ぐんでいたとは思えないほど鋭く、そして強烈なものに変わっていた。

「その罪、万死に値するわ。覚悟なさい」

うわわわっ待って待って待って！！　急に片手を上げて何をやらかす気！？

「ダメだよカリン！！　落ち着いて！！」

後ろから抱きついて必死に止める。頼むからここでのアマゾネス

化は思いとどまってよ！！
「離れていてタイセー。あなたに代わって私がランコ・コダチに天誅を与えるわ」
「て、天誅！？」
「そうよ。あなたに危害を加えようとしたのよ。許せるはずがないでしょう」
「でっでもだからって暴力はよくないよ！」
「いいえ、これは暴力じゃないわタイセー。これはあなたをかけた聖戦よ。私の全ての力を使ってランコ・コダチを排除するわ」

ダメだぁー！　もう完全にアマゾネスの戦闘魂がそのお身体に憑依しておられます！！　君、凛々しすぎるよカリン！！

「のぞむところよ！　ランコも全力であんたをやっつけるわ！」

ちょ、ちょっと！　まさかコダチさんもこのまま応戦するおつもりですか！？
あぁもうすぐ授業の終る時間なのにこんなところで何をやってるんだろう僕たち！？
とっ、とにかくなんとしてもこの二人を絶対に止めなきゃ！！
でもＰＳＩが使えない無能な僕に、この聖戦とやらを止める手段なんてあるの！？

小心者な僕だってキレることはあるんです

「二人とも落ち着いて！！　冷静に話し合おうよ！！」

ダメ元なのは痛いくらい分かっているけど、それでも声を張り上げて必死に仲裁を試みる。

だってコダチさんのあのテレポートを初体験したからこそよく分かるんだ。カリンだけではなく、コダチさんもかなりのＰＳＩ能力の持ち主だ。だからこの二人が本気で戦ったらどちらも無傷では済みそうにないよ。何とかしなくっちゃ……！

「いいからタイセーは下がっていて！　私とあなたの邪魔をする人間は誰であっても許しはしないわ！」

「許さないのはこっちよ！　ランコに恥をかかせたことを後悔しなさい！　女の子の強さはおっぱいの大きさで決まるってことを直々に教えてあげるっ！」

――　あぁ案の定、勝気なアマゾネスさん達は僕の提案を聞く気ナッシングです……。一人おろおろしているヘタレな僕は完全に蚊帳の外だ。

そしてガックリと落ち込む僕の耳に届いたのは、無情にも授業の終了を告げるチャイム。マズいっ、授業が終っちゃったよ！　早く廊下に戻ってずっと立っていたフリをしないとイブキ先生に叱られちゃう！　でもこの二人を残して戻る事はできないよーっ！

「何なのあなた！？　さっきから“　おっぱいおっぱい　”　って下品な女ね！　胸しか自慢できる事がない証拠じゃないの！」

「フンだ！　ランコの一番の魅力がおっぱいというだけよっ！　だ

ってランコは顔だって足だって手だって、存在ぜ～んぶが魅力的だもん！　ろくに自慢できるものがない高慢ちきな誰かさんとは違うわ！」
「だっ誰が高慢ちきですって！？」
「今ランコの目の前にいる胸がとっても残念な人よ！」
「なっ何よ！　大きければいいってもんじゃないわ！　そんなに大きかったら感度はすごく鈍いんじゃなくって！？」
「あら、ランコのおっぱいは超感度がいいので有名なのよ？　触れるか触れないかぐらいでビクンビクン感じちゃうもーん！　逆にあなたの方が問題ありそうじゃな～い？　そんなにツルペタな平原でさ、先端とかちゃんと存在しているかギモンだわぁ！　どっかに置き忘れてきちゃってるんじゃなぁ～い？」

……な、何てしょうもない口ゲンカをしてんだろうこの娘たち……。屋上で飛び交う彼女達の罵詈雑言の応酬に言葉も出ない。この場についていけずポカンと呆ける僕の視界に、悔しさのあまり歯軋りをしているカリンが映った。

「……ここまで侮辱されたのは人生で初めてよ……」

険しい表情で顔を伏せ、沈んだ声でカリンが何かを構えるような素振りを見せる。でも左の腰辺りに伸ばされた手には何も握られていなかった。
もしかしてカリン、完全に切れたの！？　君の周囲からただならぬ殺気を感じちゃうんですけど！？
幼馴染の手元に目を凝らすと、何かを握った右手の空間の先が少しだけ歪んで見えた。歪んでいる部分はカリンの腰から屋上の床に向け、斜めに伸びていてる。その長さといい、形といい、まるで刀身みたいだ。

刀身……？　カタナ……？　なんだろう、そのワードで昔の記憶に引っかかるものがあるような……。

あぁっ！　思い出したーっ！

刀といえばあの人だ！　レドウォールドさんだ！！

レドウォールドさんはカリンの従者さんで、幼稚園の頃、登園するカリンの側に影のように付き従っていた人だ。輝くような金色の髪に、女の人みたいに綺麗な顔なのにニコリともしない仏頂面な男の人だったのをぼんやりと覚えている。たぶんカリンを護るためなんだろうけど、あの人の黒服の腰にはいつも黒光りした鞘に納められた重々しいサーベルが差さっていた。

きっとカリンはあのレドウォールドさんに剣術を教わったんだ。あんな構えを見せ、右手で握った先にあるのはたぶんカリンがＰＳＩで創った刀剣だろう。……ということはコダチさんが危ないっ！！　だってレドウォールドさんは居合い斬りの達人だったんだから！！

「プッ、それって何の真似～？」

コダチさんが剣を構える素振りを見たカリンを鼻で笑う。しかし笑われたカリンは表情を一切変えず、すり足で距離を縮める。

「ランコ・コダチッ！」

納刀の状態で構えたカリンはコダチさんの名を叫ぶと、左下から右上に向かって抜き打ち動作を放とうとする。

「タイセーを傷つけようとした罪、その身で償いなさいっ！！」

「コダチさん伏せてーっ！！」

咄嗟に二人の間に飛び出し、コダチさんに覆いかぶさる。

「タイセー！？」

ビックリしているコダチさんを何とか組み敷き、カリンの介錯攻撃から庇う事に成功した。背中に冷えた重力を感じて振り返ると、かろうじて僕の背中ギリギリのところで刀身は止まっていた。遠心力を利用して斬りつけようとしていたカリンが強張った顔で荒い息を吐いている。僕を斬らないように寸止めしてくれたみたいだ。

「もうっ、タイセーってば身を挺してランコを庇ったりして！　やっぱりランコの方が好きなんじゃな～い♪　さっきわざとランコに冷たくしたのもランコの気を引きたかったからなのね！」

ハイ！？

コダチさんが僕の首っ玉に嬉しそうにかじりついてくる。いや、その、コダチさん、そういう気持ちで庇ったんじゃなくて、あのまだとカリンに斬られちゃうから咄嗟に飛び出しただけなんですけど……。

「タ、タイセーから離れなさいっっ！！」

創った刀剣を再び振りかぶり、軽い錯乱状態に陥ったカリンが叫んだ時、屋上の扉がぎぃぃ、と開いた。そしてそこから人影が出てくる。

あぁっまさかイブキ先生が来ちゃったの！？　しかし焦る僕の目に映ったのは本日なぜか少々不機嫌な我がクラス担任ではなかった。

「カッ、カシムラさんっ！？」

ツインテールをぴょこぴょこと揺らし、屋上扉からひょこっと出てきたのはとってもちっちゃな僕らのクラスメイト、クルミ・カシムラだった。

「あ、タイセーくんみーっけ！」

かくれんぼの鬼のような口調でカシムラさんがニッコリと僕を指さす。そして次に僕の下にいるコダチさんを見つけ、さらに嬉しそうな顔になった。

「あ！　ランコちゃんもみーっけ！」

「カシムラさん！　どうしてここに！？」

「ランコちゃんが学校に来ている気配を感じたから、クルミ一生懸命探してたの！　ねぇねぇ三人で何をして遊んでるのー？」

……倒れているコダチさんの上に覆いかぶさっている僕に、上段の構えで刀を振りかぶっているカリン、この緊迫した状況を間近で見て、「遊んでいる」と判断したカシムラさんはスゴイと心から思う僕。

「ランコ・コダチ！　早くタイセーから離れなさい！　離れないのなら無理やり引き剥がすわ！！」

突如屋上に突風が巻き起こる。たちまち僕の身体はコダチさんの上から吹き飛ぶ。

「わぁぁ！？」

カリン、念力を使ったな！？

吹き飛ばされている最中、コダチさんが視界に入る。少しよろけていたけどこの突風の中でしっかりと立ち上がっていた。向こうはうまくガード出来てるみたいだ。僕が心配しなくても大丈夫そうだな。

「イテッ！」

屋上の鉄柵に身体がぶつかる。ちょっと痛かったけど、おかげで僕もようやく止まる事ができた。

……あれ、そういえばカシムラさんは？

荒れ狂う風が支配する屋上でキョロキョロと周囲を見渡す。そして僕は必死に鉄柵につかまり、今にも屋上の外に吹き飛ばされそうなカシムラさんを見つけた。

「あぁっ！？　カシムラさん！？」
「いやあああ～！　飛ばされちゃうぅ～！！」
「いっ今行くから待ってて！！」

カシムラさんが危ない！！
再びこの強風に持っていかれないよう、四つんばいで必死に進む。コンクリートの上を這いつくばってサカサカと進んでいると、まるでゴキブリに転生した心境だ。制服のスラックスも脱げちゃいそうだけど、今はみっともないなんて言ってられないよ！

「きゃあ～！！」
ついに握力が尽きたカシムラさんの小柄な身体が宙に大きく浮く。
「カシムラさん！！」
飛びつくように手を伸ばし、その小さな手を何とかつかむことが出来た。全力で引き寄せて胸の中に抱き込む。
「大丈夫！？」
「ふぇぇ～ん！　どうしてランコちゃんとカリンさんがケンカしているんですかぁ！？」
「そ、それは……」
屋上ではさらに大きな突風の渦が出来始めていた。
しかもいつのまにか二つに増えてぶつかり合ってない！？　もしかしてコダチさんもあれを出す事ができるの！？　どんだけスゴいんだよ君たち！！

「カリン！　コダチさん！　もう止めてよ！　カシムラさんまで巻き込んじゃうだろ！！」

二つの小型台風はカリンとコダチさんの間で何度も激突し、その度に弾き出された大気が風の刃となって僕とカシムラさんを襲う。おかげで僕もカシムラさんも髪の毛が逆立ってスゴイことになっている。オールスタンディング状態だ。

「いい加減に身の程を知りなさい！！　タイセーは私のものよ！！」
「何言ってんのよ！！　タイセーはランコの男よ！！」
「ふざけないで！！　あなたみたいな下品な女には絶対に渡さないわ！！」
「貧乳のくせに上品ぶって！！　ふざけてるのはそっちでしょ！！　タイセーはランコを選んだのよ！？」
「あれはただ庇っただけじゃない！！」
「庇ったのが何よりの愛の証じゃないのよ！！　素直に負けを認めなさいよ！！」

二人とも人の話を聞けよ……！
内にこもる押さえ切れない怒りが次第に蓄積されていくのが分かる。鳩尾の辺りがかなりの熱を持ち始めてきていた。

「怖いよう怖いよう……！」

僕のシャツをぎゅっと握り、恐怖でえぐえぐと泣いているカシムラさん。両頬が涙でべっちゃりと濡れて、そこに強風で煽られた髪が無残に張り付いている。抱きかかえている反対の手で頬に張り付いている髪の毛を取ってあげたけど、嵐が止んでいないせいでまたすぐに同じ事が起ってしまう。これじゃ意味がない。
そしてこんなに脅えているカシムラさんを見ている内に、あの二名のアマゾネス達に本気でむかっ腹が立ってきた。こんなに小さな子をここまで怖がらせてしかも泣かすなんて……！　もう完全に頭

にきたぞ！！

「お前らぁ！！　いい加減にしろおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ――――――っ！！！！！」

カシムラさんを抱いたまま、大声で二人を怒鳴りつける。人生でここまでの大声を出した事は正直初めてだ。そのせいか、大声を張り上げていた時に身体の中心にチクリとおかしな痛みが走る。今は喉もヒリヒリと痛いし。

そして僕が叫び終わった直後、突然、屋上に異変が起きた。

嵐が一気に収まり、なぜかカリンも、コダチさんも、ビクンと身体を震わせた後、糸が切れたマリオネットみたいにその場にくたりと倒れてしまったのだ。ど、どうしたの！？

カシムラさんが僕からしがみついて離れないので、そのまま抱きかかえて二人の側に駆け寄る。

「カリン！？　コダチさん！？」

――　二人とも気を失ってる！？　ま、まさか死んでないよね！？

並んで横たわる二人の首筋におそるおそる手を当てて脈を確認する。……だ、大丈夫だ！　脈はある！　でもなんで急に気絶したんだろう？　攻撃を仕掛けた際に相打ちになったのかな？　でもここはとりあえずケンカが収まってよかったと言うべきなのか。

「はは……、よく分かんないけどもう大丈夫みたいだよ、カシムラさん」

安心させようと抱きかかえているカシムラさんに話しかけると、

……えぇっ！？　カシムラさんも気を失ってるの！？　なんで！？　もしかして恐怖のあまり！？

クラスメイトの女子三名が僕の前で気絶してしまった。これ、一体どう収拾をつければ……。

でもそんなことはチンケな僕が心配するようなことではないんだ、という事を知ったのは、そのわずか三十秒後。屋上扉が再び開き、廊下からエスケープしていた僕を探しにきたイブキ先生が姿を見せる。

「……タ、タイセーくん、あなたここで何をしようとしていたの……！？」

屋上の状況を目にしたイブキ先生が僕を見て、低い声で呟く。

こ、怖い……！　いつも優しいイブキ先生が、今はまるで夜叉のようです！　その背後からゴゴゴという擬音まで飛び出してきそうな迫力だ。

それに何をしてたんだって言われても、僕はカリンとコダチさんのケンカを止めようとしていただけなんですけど……。

「こんなところに女の子を三人も連れ込んで！　しかも全員気絶させて！　そんな格好でこれから何をしようとしていたのか言いなさぁーい！」

エ！？　エ！？　エェーッ！？

慌てて目の前の状況を再度確認すると、僕の足元には気絶して倒れこんでいるカリンとコダチさん。さっきは二人とも死んじゃってるんじゃないかと思って焦っていたから全然気がつかなかったけど、二人の制服のスカート、思いっきりまくれちゃってます……！　例のコダチさんのバミューダトライアングル下着に、カリンは高級そうなレースがいっぱいついた白いやつがバッチリ見えてしまってい

る。
　そして真下に視線を移せば、気絶したカシムラさんを思いっきり抱きかかえちゃってるし、カシムラさんの身体が邪魔してよく見えないけど、恐らく僕のスラックスはもう半分以上ずり下がっている。風が下半身を通り抜けていくこの感触からして、たぶんトランクスはイブキ先生に丸見えだ。ヤバい、冷や汗が止まらない。

「さぁタイセーくん、馬鹿な真似は止めてその娘たちから離れなさい！　おかしな真似をしたら容赦なくいくわよ！？」

　夜叉と化したイブキ先生が僕にも分かるように右手を強く握りしめる。
　わわわわっ、空気拳骨（エアフィスト）がきちゃうよ！！　こ、ここはおとなしく投降するしかない！！

「わっ分かりました！！」

　びくびくしながらそっとカシムラさんを下に降ろし、赤面しながら一度スラックスを引き上げた後、両手を上に上げてホールドアップの姿勢を取る。でもこんな分かりやすい降伏の意思表示をしたのに、イブキ先生は硬く右手を握りしめたままだ。
「まずはこの娘たちを救護室へ運ぶ方が先のようね……。その後でタイセーくん！　あなたに事情聴取をします！　ＣＡＬＬｒｏｏｍで待機していなさいっ！　いいわね！？」
「は、はい」
「早く行きなさいっ！」
「りょ、了解ですっ！！」

　イブキ先生に促され、逃げるように屋上を後にする。
　あーあ、どうしよう完全に誤解されちゃってるよ……。きっとイ

ブキ先生は、僕がカリンやコダチさんやカシムラさんを屋上に拉致して気絶させて、これからエロイことをしようとしていたと思っているに違いないぞ。

参ったなぁ、あの三人がすぐに目を覚まさなかったら僕の身の潔白を証明する手段はなさそうだ。この突然の濡れ衣、落ちこぼれの僕に晴らすことは出来るんだろうか？

僕はねじれた秘密を抱えているのかもしれません　【前編】

憂鬱な気分で一人ＣＡＬＬｒｏｏｍへと向かう。
はぁ……、イブキ先生からどんな尋問を受けるんだろう？　この先のことを考えると、自然と視線が下へ下へと落ちてゆく。しかもよりにもよってあんなに機嫌の悪そうな時にこんなトラブルが起るなんてついてないなぁ……。

俯き、一人トボトボと廊下を歩いていると、視界の先に小さめの靴がポツンと見えた。不思議なことにこの靴の持ち主、僕が歩いている直線上からまったく動く気配がない。あと少しでぶつかりそうになったので仕方なく足を止めて顔を上げると、そこにはクラスメイトのヨナ・コシミズが立っていた。

「あっ、コシミズさん……」

コシミズさんはその場から動かず、黙って僕を見ている。
体育の時間にこの娘に「マットに押し倒された」なんていうおかしな嘘をつかれたせいで窮地（ピンチ）に陥ったことを思い出し、まず何よりも気まずさが先に立つ。

「はい、コレ」

コシミズさんは手にしていた何かを僕に差し出した。
何だろう？　……あっ！　もしかしてそれは僕のベルト！？
「授業中に窓の外からこれが落ちていくのが見えたからさっき校庭に出て拾ってきたの。これ、あなたのでしょ？」
「うん、そうだけど……。でもなんでそれが僕のだって分かったの

？」
するとコシミズさんは事も無げに言う。
「物質想起（マテリマ）で」
「えぇっ！？　コシミズさんってマテリマできるの！？」
「結構得意」
別段嬉しそうな表情も浮かべず、淡々と答えるコシミズさん。だけどこれってかなりスゴイことだよ！　血の通った生命体ならまだしも、物質（マテリアル）に滲み込んだ既往情報（メモリー）を引っ張ることができるなんて！
うぅ、やっぱりフルリアナスの生徒って只者じゃない高校生ばかりなんだなぁ……。
それに引きかえこの僕はっ……！　もう後ろ向きになるのは止めようと誓ったばかりなのに体中を絶望感が襲う。

「どうかした？」

コシミズさんの声で我に返る。
「タイセー、なんとなく顔色悪い」
「あっ、い、いや大丈夫だよ！　じっ、実はさ、これからイブキ先生に怒られる予定だからちょっとブルーになってるだけなんだよね、ははっ」
照れ笑いでなんとかこの場をごまかす。そうでもしないと落ちこぼれな自分が惨めで惨めでしょうがない。
でも、こうして自分をただ卑下しているだけじゃ駄目だってこともよく分かってる。
だから努力して少しでも前へ進むんだ。大好きな人にずっと守られ続けるなんてみっともないことにならないためにも。
返してもらったベルトを手に、これから死に物狂いでＰＳＩ特訓をする決意を奮い立たせていると、コシミズさんは切れ長の澄んだ瞳で僕をじいいっと正面から見つめる。
「それって立たされていたのに廊下から脱走した罪でしょ」

「うん。それがどうかした？」
「……」
コシミズさんは引き続き僕をガン見している。
そうやってあまり僕を凝視しないでほしいんだけどなぁ……。コシミズさんって感応能力がかなり高いらしいから、こうしてじっと見つめられているだけで色んなことを見透かされそうで怖いよ。
「逃げ出して何してたの？」
「エッ？　え、えっと……、ひ、一人で立っていたらあんまり退屈でさっ、学校内をブラブラしてたんだっ」

「嘘」

体育の時間に僕を陥れた時と全く同じ口調で、コシミズさんが僕のフェイクをあっさりと見破る。そして軽蔑するようにフイと軽く頭を振ったので、肩口までのコシミズさんの黒髪が大きく横に流れる。
「あなたって嘘ばかりついて生きてる人なのね」
「嘘ばかり……？　それ、どういうこと？」
「あなた、隠し事があるでしょ」
コシミズさんの濡れたような黒い瞳が、僕の身体を頭のてっぺんからつま先まで探るような動きを見せる。
「……今までそんなに辛い思いをしてきているのにどうして言わないの？　あなたの右手がそんな風になった原因とその後のこと」

「！？」

動揺で息が止まりそうになり、思わず胸の中心を強く押さえる。
ゴクリと生唾を飲むと、身体がわずかに震えているのが分かった。
体内でドクリドクリと嫌な音もする。心臓付近の血管から大量の血液が一斉に外へと漏れ出して、止めたくても止められないような

感覚だ。
「恨めしく思う時はないの？　あなたがそんな不遇な身体になったのはあの人の…」
「止めろぉぉぉーっっ！！」

――　無意識だった。
怒りで頭の中が真っ白になり、気付けばコシミズさんを抱え込み、その口を左手で乱暴に塞いでいた。言葉を封じられたコシミズさんの両瞳が手の甲の上で大きく見開かれている。きっと僕が今コシミズさんに与えているのは恐怖の感情だろう。こんなに華奢な女の子に僕は今力づくでヒドイことをしてしまっている。でも、でもこれは言葉にしてはダメなんだっ！
「僕に抱きついた時だな！？　どこまで視(み)たんだ！？　あの時僕に抱きついてどこまで視たんだよッ！？」

必死の形相で声を荒げる僕の歪んだ姿が、コシミズさんの二つの瞳にそれぞれ小さく浮かんでいた。そんな醜い僕を映しているコシミズさんの脅えの色が濃くなる。
「答えろよっ！！」
しかしこうしてがっしりと口を塞いでしまっていたら、彼女が答えたくてもできないことに気付いた。
不穏な空気の中、押さえていた手を離し、小さな口元を開放する。だがコシミズさんは視線を伏せ、黙ったままだ。僕の問いに答えてくれる気配はない。
「言ったら君を絶対に許さない……っ！」

この場で答えが戻ってくるのを悠長に待つほど、僕も冷静ではなかった。そう一言だけ告げてコシミズさんを突き放し、その脇をす

り抜ける。
歩き出してすぐ、背後でコシミズさんが廊下にペタリと力なく座り込んだ気配がした。気がかりで一瞬足が止まりかけたけど、頭を強く振ってこの場を足早に離れる。

目的地である四階のＣＡＬＬｒｏｏｍに飛び込み、全力でドアを閉めた。
一人になれた気の緩みで、強く握っていたベルトが右手から落ちかける。慌てて握りしめようとしたけど今回はうまく力が入らなかったみたいだ。結局ベルトは下へと落ち、バックルが床に当たった音がカシャリと一度だけ空しく鳴る。その音があまりにも無機質だったせいか、すぐに拾う気は起こらなかった。
大きく息を吐き、固く閉めきった扉に背を預けた後、そっと自分の右腕を触る。

……僕の右手は今もあまり力が入らない。
それは幼い時のケガが原因だ。
いくら必死にリハビリしても、どんな高名な医者（ドクター）に診てもらっても、この右手の機能は完全には戻らなかった。
ケガをしたばかりの頃はかなり不自由だったけど、全く使えないわけじゃないし、右をフォローするために自然と左手の筋力が上がっていったから、成長するにつれ、特に不便は感じなくなっていった。
だから、僕はちっとも恨んでなんかいやしない。
……このハンデが、幼いカリンを事故から庇ったために負ったものだとしても。

僕はねじれた秘密を抱えているのかもしれません　【後編】

カリン、もう目が覚めたかな……。
心配だから様子を見に行きたいけど、今はここで待機を命じられている身だから動けないのがもどかしい。
イブキ先生はまだ来ないし、手持ち無沙汰なせいもあって、ＣＡＬＬｒｏｏｍでぼんやりと幼少時代を回想し始めることにする。
つっ立っていると疲れるので行儀は良くないけど床に座り込んだ。
はぁぁ、と盛大な溜息をついてもたれかかったせいか、少し勢いをつけすぎて扉にゴツンと頭を打ってしまう。

「イテテ…」

ジンジンと沁みるように痛む後頭部を何度かさする。
すると痛みが引いていく代わりに、小さい頃のカリンの姿が柔らかいパステル調の色合いで頭の中に浮かんできた。ニコニコと笑っている幼い表情に、コシミズさんのせいで先ほどまで荒んでいた気持ちがほんの少しだけ和む。

――　僕の初恋の女の子はカリン・タカツキだ。

……そういえば当時通っていた幼稚園でカリンを初めて見た時、即座に思ったんだよなぁ。なんてかわいい女の子なんだろう、って。
艶々と輝く亜麻色の髪を、真後ろできっちりと何重にも編みこんだヘアスタイルがなんだかとっても清楚に見えて、最初はどこかの国から来たお姫様なのかと思ったほどだ。
カリンの家は裕福だった。

お父さんは色んな事業を手がけていて、しかもどの分野の事業もことごとく成功していて、家には唸るほどの財産があるらしいと周囲の大人達は噂していた。

そんな裕福な家のお嬢様であるカリンが、どうして僕が通うような平凡な幼稚園に来たのか今では疑問だけど、当時は小さかったから何も不思議に思っていなかった。

でも思い返してみると、普通の家の子ではまず無いような出来事もカリンの場合は当然のようにあったみたいだ。

親が資産家なためにカリンは危険な目に遭う事が多かったらしい。身代金目的で何度か誘拐されそうになったことがあったと聞いたこともある。

だからカリンはお母さんではなく従者であるレドウォールドさんと毎日一緒に登園していた。昔の事なので記憶がおぼろげになっているけど、朝の登園中にカリンと出会った時、レドウォールドさんの身体の一部にケガの跡を見つけたこともあった。

あの時は幼稚園児だったから仕方ないかもしれないけど、

「痛くないの？」

と空気が読めていないにもほどがある質問をしてしまった。そんな間抜けな僕に向かってレドウォールドさんは、「あぁ全然痛くない」とカリンの傍らで小さく笑いかけてくれたのを覚えている。

たぶんあの頃幼いカリンの身に危険が及びそうになる度に、レドウォールドさんが僕の大切な幼馴染を全力で護っていたんだろう。完全無欠の騎士（ナイト）として。

「小学校は一緒に行けるの？」とカリンに聞いてみたことがある。

いつもニコニコしていたカリンはその時だけちょっぴり困ったような顔になったあと、すぐにまたニッコリと笑って「うん」と頷いてくれた。幼かった僕は自分に向けられた笑顔に胸を勝手にときめ

かせ、愚かにもカリンの言葉をそのまま信じて素直に喜んだ。
あの時のカリンが一瞬見せた悲しそうな表情の意味をよくよく考えれば、一緒に通えないことをカリン自身はもう分かってたんだ。だけど「うん、一緒に行けるよ」という返事を期待している僕を落胆させないよう、あの時頷いてくれたんだと思う。だから僕らが共有している思い出は、幼稚園に通っていたあの頃だけだ。

でも、たとえ小学校は一緒に行けなくても、本当ならあともう一年、幼稚園を卒園するまでのあともう一年、僕らは一緒にいられるはずだった。
だからもっともっと楽しくて素敵な思い出をカリンにあげる事ができたはずだし、僕もカリンからもらえることができたはずだった。だけど。

あの事故が残り一年の楽しい思い出の予定と、僕の右腕と人生までもグチャグチャにしてしまった。
カリンはあの事故の後日談を知らない。これ以上カリンを危険な目に遭わせないよう、そして他の園児に迷惑がかからないよう、すぐに幼稚園を退園させられたから。
だからこそ、僕はこの事実をカリンに隠し通さないといけない。もし事実を知れば、きっとカリンは一生僕に対して負い目を感じることになってしまう。僕はそれが何よりも怖い。
カリンがこの事実を知って僕に対して罪悪感を感じ、その償いのために自分の人生の全てを捧げようなんていう馬鹿げたことを考えたらと思うと、足元が震えてくる。

だってそんなの、僕があまりにも惨めだ。

この先、もしカリンが僕以外に好きな男ができたとして、その時この落ちこぼれなダメ人間の存在が彼女の足枷になってしまうなん

てことになったら僕は絶対に耐えられない。
カリンは僕にもＰＳＩ能力が眠っていていつかその芽はきっと芽吹く、と励ましてくれた。だけどそんな育つかどうかも分からない絶賛発育不良中の芽のことなんかより、彼女の幸せの芽を僕が根っこから無残に摘み取ってしまう事が何よりも怖い。
だからカリンには隠し通さなければならないんだ。この右手のことも、その後の僕自身についても――。

「……貴殿に問う。カリンお嬢様がいずこにおられるかご存知か？」

ひぃぃぃぃっ！？
ヒンヤリとした感触。突然、本当に突然に、冷たく研ぎ澄まされた刃が僕の喉元にピタリと当てられる。
なに！？　なに！？　落ちこぼれには到底似合わないシリアスモードにどっぷりと浸っていたのが悪かったの！？
突如起こったこの落命のピンチに頭も身体もついていけてない。今はごくりと唾を飲むことすら危険そうだ。だってその嚥下動作で首元の薄皮が綺麗に一枚削がれそうなくらい、刃は僕の喉元にしっかりと押し当てられている。
そ、それより確かこの人、今「カリンお嬢様」って言ったような……！？

僕だって嫉妬ぐらいできるんです

「……なぜ押し黙るのか」

耳横から流れてくる低い声が更に質問を重ねてくる。うっかり唾を飲み込みそうになって慌てて止めた。

「早急に答えよ。返答次第によっては貴様がお嬢様に害をなした不貞の輩とみなし斬り捨てるっ……！」

だだっ、だからこんなに刃をぐいぐい押し付けられてたら答えようがありませんって！！

とりあえず眼球は動かしても大丈夫そうなので、ソロリと横目で刺客を確認してみた。そしていきなり襲ってきたこの黒ずくめの男性を見て、内心で声をあげる。

――　やっぱりレドウォールドさんだっ！

金色の髪で片目は隠れちゃっているけど、身に覚えのある大きなサーベルを握ってるし、やっぱりこの人レドウォールドさんだよ！！　あぁこんな時に精神感応（テレパシー）がちゃんと使えたら、声を出さなくても名乗れるのに！

「……ム？　お主、どこかで見たような顔をしているな……」

チャンスだっ！

成長した僕の顔にかすかに昔の面影を見つけたレドウォールドさんの手元が少しだけ緩む。刃と喉元に若干のスペースが出来たのでこの隙に急いで名乗った。

「ぼっぼぼぼく、タイセーです！　タイセー・イセジマです！！」

「おお……！」
僕の名前を聞いたレドウォールドさんの目が驚きで少し大きくなる。そしてすぐに刃を喉元から外してくれた。ふううと大きく息を吐いた後、急いでごくりと唾を飲みこむ。たっ、助かったぁ……。
「久しいな、タイセー・イセジマ」
下ろしたサーベルをスマートに鞘に仕舞い、レドウォールドさんにしては珍しくほんの少しだけ眦を下げる。その柔和な笑顔を見た瞬間、甘酸っぱい懐かしさで胸がいっぱいになった。
「僕のこと、覚えていてくれたんですね……」
「当たり前だろう。お嬢様のお命を救った男の名をこの私が忘れるはずもない」
「いっ、いえ、僕、そんなに大したことをしたわけじゃないし……」
僕の返答を聞いたレドウォールドさんの眼差しに優しさがさらに増す。
「フッ、あの時あんなに勇敢だった幼子がずいぶんと謙虚な男に育ったものだな。すべてはご両親の教育の賜物か」
「は、はは……それはどうでしょうか……」
視線を逸らし、照れ隠しで頭をかく。
情けないけど褒められるという経験が人生の中でほとんどなかったため、こうしてぐいぐい持ち上げられるとどうしていいのか分からなくなってしまうよ。
「時にタイセー。お嬢様がどこにおられるか知っているか？　フルリアナス外でお帰りをお待ちしていたのだが、先ほど急にお嬢様の気配を感知できなくなったのだ」
あっそれはカリンが屋上で気絶したからだっ！
だけどすごいなぁ……。学園の外にいるのにカリンの波長が途切れたことを感知できるんだ。

レドウォールドさんを見上げると、普段は感情をあまり露にしない人だったはずなのに今は少し心配げな顔をしている。その表情を見て胸の中心にチクリと嫌な痛みが走った。
……きっとこの人はあの頃からずっとこうして毎日毎日ひたすらカリンを護ってきたんだろう。もし僕もＰＳＩを自在に使いこなすことができたらカリンを護ってあげられるのに……！

「お嬢様には学園内に侵入しないよう言いつけられているのだが、どうにも胸騒ぎがしてな……。もしお嬢様のいそうな場所に心当たりがあれば教えてほしいのだが」
レドウォールドさんに対するこの気持ちはもしかすると嫉妬心なのかもしれない。それを隠して僕は答える。
「カリンはたぶん救護室（メディカルルーム）にいると思…」
「何！？　メディカルルームだと！？」
カッと形相を変え、レドウォールドさんはせっかく鞘に納めてくれた剣をスラリと抜く。
「ではやはりお嬢様の身に何かあったのだな！？　まさかお怪我をなさったのか！？」
すっ、すごい気迫だっ！！　再び現れた白銀の刃に息を呑む。
「いえっ、べつにケガをしたわけではないです！　気絶したので念のために運ばれただけですからっ！」
そう答えると、レドウォールドさんは急に邪気の抜けた表情で、
「なぜお嬢様が気絶など……」
と呟く。
それよりレドウォールドさん刀を納めて下さい！！　敵意の無い人間に刃先を向けてはいけないって習いませんでした！？
「それは間違いのない事実なのだな？」
重ねての確認に、安心させてあげるためきちんと頷く。
「……タイセー、貴殿は久方ぶりにお嬢様と再会したからまだよく知らぬのだろうが、あのお方はそうそうのことでは驚きもひるみも

しない、強靭な精神力をお持ちの方なのだぞ？」
　レドウォールドさんはそう言いながらサーベルの柄を強く握りしめたり離したりを延々と繰り返し始めた。せわしなく動き続けるその左手を見ているうち、きっとこの意味不明な動作はレドウォールドさんなりの困惑している証なのだろうと理解する。
　でもレドウォールドさんの言いたい事、今なら僕もすっごくよく分かるよ。今朝からさっきまでのほんの半日の間ではあるけれど、カリンと一緒にいて幼馴染のアマゾネスぶりはもう痛いほどに体感してきているから。

「タイセー、何か他に知っていることは無いか？」

　少し落ち着きを取り戻したレドウォールドさんはようやく刀を再び鞘に納めてくれた。
「えっと、気絶の原因はクラスの女の子と口げんかをしちゃった結果です」
「口げんか……？　そんな程度で気絶をするとは思えないのだが？」
「実はその口げんか、最終的にはＰＳＩもセットで盛大に行われたので……」
　と正直に答えると、レドウォールドさんは両肩を落とし、ハァァァァーっと、とっても大きくて長い溜息を深々とつく。
「……まったくあのお方はまさか登校初日でトラブルを起こすとはな……。いや待て、お嬢様のあの性格を分かっていながらこの事態を予見できなかった私がまだまだ未熟ということなのか……」
　額に手を当て、ぶつぶつと一人反省会を始めたレドウォールドさんにちょっぴり同情する。十年ぶりに会ったのに全然見かけが変わっていないことに実は驚いていたけど、今のレドウォールドさんの後ろ姿には“　人生の疲れ、やつれ　”　ってやつをひしひしと感じます。
　やがて猛省タイムが終了したレドウォールドさんは、少しだけさ

っぱりとした顔で僕に向き直った。
「ではお嬢様は気絶をしただけでお怪我などはなされていないのだな？」
「はい、大丈夫だと思います。気絶したカリンの身体を見てみたけど、ケガをしている感じはありませんでしたから」
「……む？　ということはタイセー、もしや貴殿はその場にいたのか？」
レドウォールドさんの声が硬くなったのが分かった。それに合わせて僕も身を固くし、「はい、いました」と答える。
「ではなぜ今回はお嬢様をお助けしなかったのだ？　あの時貴殿は幼子ながら己の身を挺してお嬢様を必死に庇っただろう」
ぐっと言葉に詰まる。
できればレドウォールドさんの前で口にはしたくはないけど、でもこれは事実だから言わなければならない。
「……僕、落ちこぼれなんです。ＰＳＩがほとんど使えないから、カリン達のケンカを止める事が出来ませんでした。すみません」
「ＰＳＩが使えない……？」
レドウォードさんが怪訝な表情を見せる。
「このフルリアナスに入学しているのにか？」
「そ、それはカリンが僕をフルリアナスに推薦したからなんです。それで、成り行き上ここに通うことに……」
溜息と共にレドウォールドさんが呟く。
「お嬢様……、まさか袖の下でも使ったわけではあるまいな……」
レドウォールドさんのその深い溜息は、そのまま黒い重りとなって僕の胸をぎゅっと押し潰してきた。
……ま、まさかカリン、お金を積んで僕をこの学園に入れたの……？
身体の中心が勝手にぐらぐらしてきているみたいな感覚をおぼえた。
そうだよ、こんなダメ人間に優れたＰＳＩ能力が眠っているわけ

がない。きっと、カリンが惨めな僕を哀れんでここに入れてくれたんだ……。今日は厄日なのかな。自分が最下層に位置する人間なんだってこと、今朝からこうして何度思い知らされているんだろう。辛い。

「して、メディカルルームはどこにあるのだ？」

うつろな気持ちを心の奥深くに押し込め、問われるままに救護室の場所を教える。

学園内に部外者は入っちゃいけないけど、もうこうしてレドウォールドさんは侵入しちゃってるし、きっとこの騎士さんなら見つからないで最後までうまくやれるに決まってる。でも余計なお世話だろうけど一応、「カリンの様子を見に行くなら先生達に見つからないように気をつけて下さいね」と言ってはみた。

「大丈夫だ、そんなヘマはしないさ。ではまた会おうタイセー」

レドウォールドさんは片方の口角を上げて斜に笑うと、遠距離移動（テレポート）で僕の前から一瞬で消えた。

チクショウ、カッコイイなぁ……！

それに引きかえ、床に落ちていたベルトを拾ってモソモソとつけ直している自分の情けなさ。あまりの小物っぷりに泣きたくなりそうだ。

でもあんなにカッコイイ従者さんがいつも側にいるのに、どうしてカリンは僕なんかがいいんだろう？　自分で言っていて落ち込みそうになるけど男の趣味が悪すぎるよ……。

ふう、と肩で息をつく。

その時ＣＡＬＬｒｏｏｍの扉がすごい勢いで開いた。落雷にも似た凄まじい開閉音に思わずビクリとしてしまう。

「いたわねタイセーくんっ……！」

イ、イブキ先生……！？
先生は入学以降、僕が今まで見た中で一番険しい顔で現れた。この怒りっぷりなら事情聴取無しでいきなり空気拳骨（エアフィスト）の制裁が来るかもしれない。
殴られる覚悟を決めた時、先生は急に僕に抱きついてきた。
「もうダメッ！　先生ガマンできないっっ！！」
な、なに！？　なんなの一体！？
焦る僕などお構いなしにイブキ先生はますます強く抱きついてくる。これでもかというくらいに全力でしがみついてきたので、先生の大きな胸がふにふにふにふにと僕の体を何度も刺激してくる。うあああああ！　な、なんだかだんだんといけない気分になってくるんですけど！？
「せっ、先生！？」
慌てて呼びかけるとイブキ先生は一度腕の力を緩め、僕の顔の前に自分の顔を近づけてきた。先生の眼鏡の奥にある熱に冒されたような潤んだ両瞳がすごくエッチっぽくて思わずドキリとしてしまう。
「タイセーくん……。先生はもう限界なの……。いけない先生でごめんなさいね……」
イブキ先生の顔がさらに近づく。そしてすぐに唇にとても柔らかい感触。
……へ！？　……ももも、もしかして僕っ、今イブキ先生にキスされてるのっ！？

聞いてないです　あなたがショタコンだなんて

くっ、口の中にイブキ先生の舌が侵入してきてるッ！？
なんで！？　なんで先生が僕にキスなんかしてくるの！？　だって僕はこれから先生にお説教されて空気拳骨（エアフィスト）をガツンと喰らうはずだよ！？　それがどうしてこんなことにッ！？
パニックでガクガクと震える僕の身体を、イブキ先生はキスをしたまま包み込むように優しく抱きしめてくる。そして先生はその柔らかい舌で僕の口腔内の至るところを愛おしそうに舐め回し出した。

「んんっ！？　んーっ！　んんんむっ！」

うあああどうしよう！？　イブキ先生の舌の動きが止まらない！！
こここっ、この身体の中を駆け巡る感情は何！？　悪寒と快感と驚愕を極度にまで高め、特大シェーカーに全部丸ごと放り込んで三日三晩休まずにフルシェイクされたみたいなこの気持ちは！？
かっ身体が勝手にピクピクと痙攣し始めてきたんですけど！？
体面上の全ての毛穴が全部開ききったみたいな感覚もするしっ、今なら身体のどこを触られたって感じちゃいそうだよ！！

「ハ…ァ……っ」

たっぷりとかなり長い時間をかけて僕に強烈なキスをした後、ようやくイブキ先生は僕から唇を離した。でもまるで離れるのを惜しむかのように、僕とイブキ先生の唇の間にはまだ唾液の透明な細い糸が繋がっている。それを見たイブキ先生は小さく笑うと再び僕に軽くキスをしてその鎖を断ち切った。

「あぁとうとう禁断の線を越えちゃったわ……」

甘い声でそう囁くイブキ先生の両瞳はとろんとした鈍い光を放っている。こ、この人、本当にイブキ先生なの！？　別人みたいにエロすぎるんですけど！？

「でも先生をここまで狂わすタイセーくんが悪いのよ……。ねぇだから最後まで責任取って……」

先生が僕にしなだれかかってくる。ぜっ、絶対におかしいよこんなの！！　こんなのイブキ先生じゃないっ！　きっとイブキ先生の身に何かが起こってるんだ！　だから今日は妙に不機嫌だったし、いつも優しいのにすっごく怖かったりしてるんだ！！

「先生！　気をしっかり持って下さい！！」

イブキ先生の両肩をつかんで強く揺さぶる。

えーとえーとこんな風に人格が豹変してしまうＰＳＩ能力って何があったっけ！？　今まで授業で習ってきたことを必死に思い返してみる。

確か人為的な能力なら、まず【　強制憑依（ライド）　】だろ、【　言語制御（マリオネット）　】だろ、【　記憶粉砕（レカディス）　】だろ、……でもこれってどれもＳ級のＰＳＩ能力が無いと発動できないやつばかりだ。しかもむやみやたらに人に使っちゃヤバい能力だったはず。場合によっては警察に捕まっちゃうレベルのとってもダークな能力だ。

だけどイブキ先生のこのおかしさは尋常じゃない。やっぱり第三者に人為的に操作されているに違いないよ！　でも一体誰に！？

そしてなんのために！？

でも残念なことに身体も子どもで中身も子どもな僕じゃ到底推理

できそうにない。それに犯人や理由が分かったって、イブキ先生を元に戻す方法が無ければ何も意味がないし……。

「タイセーくん……先生の気持ち分かって？」

煩悶する僕などお構いナシでイブキ先生が僕に身体を摺り寄せてくる。あぁ一体どうすればいいんだろう！？

「先生！　しっかりして下さい！　一体どうしちゃったんですか！？　僕に事情聴取するはずだったでしょ！？」

「ウフッ、それはもう済んだからいいのよ。さっきタカツキさんもコダチさんもカシムラさんも目を覚ましたわ。あの娘たちから話を聞いたらタイセーくんは何も悪くないことが分かったの。あなたを疑ってごめんなさいねっ」

右頬に吸い付くような感覚。

いいっ！？　今度はほっぺにチューされましたけど！？

「イブキ先生！　いい加減に正気に戻って下さい！　僕はあなたの生徒ですよ！？」

もう一度イブキ先生の二の腕をつかんで激しく揺さぶった時、先生は急に表情を変え、鋭い眼差しで僕をキッと見据えた。

「そんなこと知ってるわっ！　だからこそ今までこの気持ちを必死に押し殺してずっとずっと耐えてきたんじゃないっ！！」

水に濡れたように妖しく揺らめいていたイブキ先生の瞳が、ここで突然激しく燃え上がるような強い輝きに変わる。

「タイセーくんっ、私はあなたがずっと好きだったのよおおおおーっ！！」

イ、イブキ先生が咆哮した……！
「でもあなたは私の生徒っ！　だからずっと気持ちを隠してあなたと向き合ってきたわ！　だけどタイセーくんを見るとこの身体が疼いてしょうがないのよっ！　あなたに抱かれたいし同時にメチャクチャにされたいっ！　その穢れた願望が私の心からずっとずっと消えないのよぉぉぉーっ！！」
そう叫び終わるとイブキ先生は崩れ落ちるようにＣａｌｌｒｏｏｍの床に座り込んだ。そしてギリギリまで短く切り揃えられた自分の後ろ髪にそっと手を当てる。
「……この気持ちを抑えるために今までずっと苦労してきたわ……。自分の中からどうにかしてこのいやらしい女らしさを消そうと、あなたにトキめく度に髪を短く切ったり、視力はいいのに眼鏡をかけるようにしたり……」

だからイブキ先生はショートカットなのにしょっちゅう後ろ髪をマメに切っていたのか……。いきなりとんでもない秘話を聞かされて言葉を無くす僕。

「今までは毎日タイセーくんの顔を見られるだけで何とか気持ちを抑えることができていたわ。でも今日タカツキさんとあなたが仲良くしているところを見ていたら、妬ましい気持ちが溢れてくるのを止められなくなったの……。さっき屋上でタカツキさん達にエッチなことをしようとしているように見えたタイセーくんを見つけてしまった時もそう。あの時、もうどうなってもいい、たとえここをクビになってもいい、無理やりにでもあなたを自分だけの物にしたい、

そう思ってしまった……。昔から自分よりずっと年下の男の子がタイプだったけど、よりにもよって自分の受け持ちの生徒を好きになってしまうなんて私は教師失格ね……」

……し、知らなかったよ、まさかイブキ先生がショタコンだったなんて……。僕、入学時からずっと先生にそんな目で見られてたんですね？　驚きです……。

「……ふふっ、ビックリした？　タイセーくんはこんな十以上も年の離れた年増の女に魅力なんて感じないでしょ？　笑ってくれていいのよ」

床の上から僕を見上げ、今はベリーショートのイブキ先生は寂しげに笑う。

「い、いえ、そんなことないですっ」

「いいのよタイセーくん。そんな優しいウソをつかなくても」

「いえウソじゃないです。そ、それに僕、眼鏡かけている女の人って、結構好き…ですから……」

「えっホント……！？」

これは事実だ。

イブキ先生は昔から年下の男が好きみたいだけど、僕は昔から眼鏡っ娘に弱い。それにはれっきとした理由があって、おそらく僕の家族に眼鏡をかけている人が誰もいないからだと思う。なにせ僕の家族はちょっとアレな人ばかりだから。

それよりも今のイブキ先生はいつもの優しいイブキ先生に戻っているような気がするよ。

ということは誰かに人為的に何かをされたんじゃなくて、今のイブキ先生の告白通り、僕への想いが募って抑えられなくなったから

一時的におかしくなっちゃったってことなのか……。

ん、待てよ……？

カリンに、マツリに、そしてイブキ先生……、考えてみたら僕は今日一日で三人の女の人に告白されてるぞ！？　こんなこと僕の人生でありえないよ！　一生分の幸福をこの一日で使い果たしているような気がしてならないんだけど！？

「んー、タイセーくんに告白できてスッキリした！」

ビックリするぐらい爽やかな顔でイブキ先生が立ち上がる。

「タイセーくんが私を女として見てくれていることが分かっただけで今は満足よ！　これからはまた元通りに髪を伸ばしてタイセーくんに振り向いてもらえるよう頑張るわ！」

「あの先生……」

「なぁに？」

「ぼ、僕、カリン・タカツキが好きなんですけど……」

「そんなこと知ってるわよ？」

イブキ先生は教室で初めて出会った時と同じように、僕を慈しんでくれるような笑顔を見せる。

「タカツキさんもあなたが好きよね。そしてテンマさんもあなたが好きで、コダチさんがあなたに惹かれ始めていることも全部知ってるわ」

「エエエ！？」

「ふふっ、だって私はあなた達のクラス担任よ？　生徒の行動や思考はすべて把握していないとねっ」

ハ！？　僕たちの行動とか思考って全部イブキ先生にダダ漏れしてるの！？
先生はとびっきりの笑顔で微笑んでくれたけど、僕はこの時イブキ先生のことが怖いと心から思った。いくらなんでも見透かしすぎだろ……！　あなたは現代に甦った魔女ですか！？

「あ、それとカシムラさんもあなた達のその輪に加わる事になると思うわ」

僕がまだ恐怖に慄いている最中だというのにサラッと意味不明のことを言い出すイブキ先生。何それ！？　どういうこと！？
“　カシムラさんが輪に加わる　”　という意味を先生に尋ねようとした時、先生の身体がピクリと何かに反応した。

「……残念だけど今日はここまでね。また別の日に個人授業しましょ」

「こっ、個人授業ってなんですか！？」
「言ったでしょ、タイセーくん。私はあなたの考えていることが分かるのよ？　私との個人授業はあなた自身が強く望んでいることじゃない。違う？」
「そっ、それは……！」
本気で背筋が凍りそうになった。たぶん両腕全体にも鳥肌が立ちまくっている。それぐらい本当に驚いた。
イブキ先生の言っていることは嘘じゃない。この女性（ひと）は対象（あいて）物との接触が無くても心の中を正確に読むことができるんだ……！！
「タイセーくんが望むのなら、個人授業を受けたがる目的がたとえどんな目的でも、私はクラス担任として、そしてあなたを愛する一人の女として全力でサポートするわ。じゃあ気をつけて帰りなさいね。今日はありがとうタイセーくん。あなたとのキス、とろけるく

らい最高だったわ……！」
そう言った次の瞬間、イブキ先生の姿が目の前から消えた。そしてその後すぐに別の女性がＣＡＬＬｒｏｏｍに現れる。

「タイセー！」
「カリン！？」

そうかっ、イブキ先生はカリンがここへテレポートしてくるのを事前に察知したから姿を消したんだ！

「ごめんなさいね。私、またタイセーに迷惑をかけてしまったみたいだわ」
カリンは済まなそうな顔で近寄ってくる。僕は慌ててジャケットの袖口で口元を数回拭った。
「あらどうしたのタイセー？　別にあなたの顔には何もついてないけど」
「い、いや、これはちょっと……」
もごもごと言葉を濁し、目線を逸らした。
「……？」
カリンが不思議そうな顔で僕を見ている。イブキ先生のキスの痕跡でも残っていたらとつい心配になって口をこすっちゃったけど、余計な動きをしないほうが良かったかな……。

だって何でも見通せる魔女（イブキ）先生と違い、僕のメデューサ様は肉体（コン）接触（タクト）無しで相手の心を読むことはできないけれど、第六感の閃きのスゴさは魔導師クラスのレベルに到達していそうだから。

君のこと、キライになるかもしれません

とりあえずもうこれ以上おかしな動きはしないことにしよう。
何かに勘付いたメデューサ様が、
「あなたの身体に訊けばすべてが分かることよ。もう一度接触感応（サイコメトリー）をさせてくれるかしら？」
なんてせがんできたら大変だし。そこで精一杯の自然さを装って、話題をさりげなく変えてみることにする。
「それよりカリン、もう具合は大丈夫なの？」
「えぇ、もう大丈夫よ」
「コダチさんやカシムラさんは？」
「あの人たちも気がついたわ。二人ともう帰ったんじゃないかしら」
手近にあった椅子にカリンがストンと腰を下ろす。
あれ？　まだまだ僕と話す気マンマンみたいだ。でもレドウォールドさんはどうしたのかな。
「レドウォールドさんに会った？」
「レド？　えぇ、今は外で待たせてるわ」
カリンの顔がほころぶ。
僕の勝手な思い込みかもしれないけど、それがレドウォールドさんの名前を出した途端に出てきた笑顔のような気がして、また胸の中が勝手にもやもやし始めてきた。
「そうだわ、聞いてタイセー」
「なに？」
「レドったらね、フルリアナスの中には勝手に入っちゃ絶対にダメよってキツく言ってあったのに、【　体色変化（カモフラージュ）　】で身を隠してメ

ディカルルームの中に入ってきていたのよ。それでね、“　お嬢様、お怪我などなされませんでしたか　”　ってこっそり耳元で尋ねてきたの。室内に私以外の人もいたからとはいえ、姿を隠していきなり話しかけられてビックリしちゃった。主人(わたし)を驚かすだけじゃなく命令にも背くなんて、従者としての自覚が足りないわ。そう思わない？」

「……そ、それはカリンのことが心配だったからだよ、きっと」

「でも私の言いつけを守ることがレドの仕事なのよ？」

「う、うん……」

すぐに否定できなかった。

だけどそれは、確かにカリンの言う通りかもと思ったから反論できなかったんじゃなく、レドウォールドさんが周囲に自分の身体を溶け込ますＰＳＩ能力も使えるんだと知って動揺していたからだ。

カモフラージュも使えるなんてさすがだよ。容姿端麗でＰＳＩ能力値も高い。まさに完全無欠の従者さんだ。それに引きかえこの僕は、レドウォールドさんを擁護する台詞だってすぐに言えやしなかった。一体どこまで人間が小さいんだよ……。

……いや、卑屈になっちゃ駄目だ。まずはきちんと相手を認めることから始めなくっちゃ。

レドウォールドさんはスゴイ人だ。

そして僕は落ちこぼれだ。

でも、カリンはこんな僕を好きだって言ってくれている。だから例えカリンを護る役目があの人だったとしても、それでいいじゃないか。

「違うよカリン」

呼吸を整えた後、顔を上げてカリンを見つめる。

「えっ、違うって何が？」

「レドウォールドさんの仕事は君の言いつけを守ることじゃない。あの人の使命はカリンを護ることだよ」
「よくお聞きなさいタイセー。もう私はあなたの知っている小さかった頃の私じゃないのよ？」
カリンは少しだけ心外そうな顔で机に頬杖をついた。
「自分の身は自分で充分に守れるわ。だから私は自分だけじゃなく、これからはあなたも守るの。タイセー、あなたが誰よりも大切だから」
「カリン……」

初恋の相手で、一番大好きな女の子に誰よりも大切だって言われた……。
でもどうしてだろう、今はなぜか全然嬉しくない。ひたすらに胸が痛いだけだ。今のカリンの言葉を素直に受け取れない自分がいる。
一雨きそうね、とカリンが呟いたのでＣＡＬＬｒｏｏｍの窓から外を見てみる。すると空にはまるで今の僕の心の景色を完全に具現化したみたいな黒い雨雲がどんどんと広がりだしていた。

「タイセー、大好きよ」
カリンが僕の顔を見て微笑む。
「これからは何があってもすべてのトラブルからあなたを全力で守ってみせるわ。だから、ずっとずっと私の側にいてね。約束よ？」
「……っ」

駄目だ、頷けないっ……。
大好きな女の子のお願いなのに頷けないよ……！

「あら、返事がないようだけどどうしたのかしら？」
「……」
「まさか私と一緒にいたくないなんてことはないわよね？」
「……」
「タイセー？」
「……止めてよ」
「えっ？」
「止めてくれって言ってるんだあああっ！！」

いきなり大声で叫んだ僕に、カリンがビックリした顔をしている。
でももうダメだ。無理に押し込めていた心の言葉が止まらない。

「僕は君に守ってなんかほしくないよっ！！」
「どっどうして！？　だってあなたはＰＳＩが使えな」
「止めろおおおお！！　僕を見下すなあああああああ！！！！！！」

絶叫がＣＡＬＬｒｏｏｍ内を貫いた。
さっき屋上で全力で叫んだせいで音量はだいぶ下がっていたけど、ここが完全防音の部屋でなければ守衛さんが飛んできたかもしれない。

「ぼ、僕だって！　僕だって、好きな女の子を護りたいんだ！！
だから僕を憐れむのは止めてよ！！　君がそうやって僕を守るって言う度に、僕は、僕は自分がすごく惨めになるんだ！！」
「そ、そんな……、私はそんなつもりじゃ……」

「だからもう二度と言わないで！　もしまた言ったらきっと僕は君の事を嫌いになる！！」
「タ、タイセー……」
「ごめん！　もう今日は帰る！！」

辛い。辛いよ。もうこの場にはいられない。
カリンを残してＣＡＬＬｒｏｏｍを飛び出した。

……なんて最低なんだ僕は……！
何だよ今のは！？　レドウォールドさんに勝手に嫉妬しただけじゃなく、自分の無能さをカリンに八つ当たりしただけじゃないか！
それを「今度言ったら君を嫌いになる」だって？　いったい何様だってんだよ！？
自分で自分を許せない。たった今カリンの前で見せた卑怯な自分から離れたくて廊下を必死に走る。すると左の角を曲がってきた女の子とぶつかりそうになった。
「きゃうっ！？」
「す、すみません！　……あれっ、カシムラさん！？」
「わぁタイセーくんだぁ！」
あやうく激突しそうになった女の子はクルミ・カシムラだった。
これから帰るところだったらしい。
「タイセーくん、さっきはクルミを助けてくれてありがとうですぅ～！」
ツインテールを揺らし、カシムラさんがピョコンとお辞儀をする。
「あの時タイセーくんがクルミの手を捕まえてくれなかったら、クルミ、屋上から下に落ちちゃって死んじゃってたかも～！　だからタイセーくんはクルミの命の恩人になりましたぁ～！」
「お、大げさだよカシムラさん……」

困り顔の僕に、カシムラさんがニコッと笑いかける。
「タイセーくん、クルミと一緒に帰ろっ？」
「……えっ？」
「ね、一緒に帰ろ？」
カシムラさんのとても無邪気な笑顔が、ささくれだっている僕の心を優しく癒す。
今はカリンと一緒にはいたくなかったけど、でも一人ぼっちにもなりたくなかった。ズルくて身勝手なのは充分承知の上で、カシムラさんの誘いに頷く。
「……うん。一緒に帰ろうか」
「やったぁ～！　ところでタイセーくん、カサ持ってますかぁ～？」
「傘？」
「雨が降ってきそうなんですぅ～っ！」
カシムラさんが廊下の窓から外を指差した。さっきよりも黒雲が厚く垂れ込め始めている。これは本当に一雨くるかもしれない。
「持ってるよ。折り畳み傘だけど」
「やっぱりタイセーくんはしっかりしてますぅ～！　きっとタイセーくんならカサを持ってるんじゃないかってクルミは思いました！」
「……もしかして傘が目当てで一緒に帰ろうって誘ったの？」
「えへへ、当たりですぅ～！　クルミはタイセーくんを利用しようとしてまぁす！」
「ははっ、ヒドいなぁカシムラさん」
ちゃっかりしているカシムラさんに思わず笑いが出た。
でもなんて素直な子なんだろう。普通思っても言わないよ、そういうこと。それに僕も一人になりたくなくてカシムラさんと一緒に帰るんだし、きっとこれでおあいこだ。
「あ、もう降ってきたですぅ～！」

校舎から外に出るともうポツポツと雨粒が落ち始めていた。
「ちょっと待って、今傘を出すから」
折り畳み傘を広げてカシムラさんを中に入れてあげる。
幼稚園に通っている年の離れた妹を迎えに来たお兄ちゃんみたいなシチュエーションにほのぼのしていると、またしてもカシムラさんが無邪気にはしゃぐ。
「わぁ、タイセーくんと相合傘だぁ～！」
カシムラさんと相合傘！？
思わず吹き出しそうになったけど、何とか笑い出すのを我慢して傘をカシムラさんの方に大きく傾ける。こんなに小さいから濡れたらすぐに風邪を引いちゃいそうだ。

「タイセーくんと一緒♪　タイセーくんと一緒♪」

適当なフシをつけ、カシムラさんがオリジナルソングを可愛い声で歌い始める。今はこの娘の無邪気さに救われる思いだ。
「あ、カシムラさん足元気をつけて。そこ、泥水だから靴が汚れちゃうよ」
「はぁ～い！」
カシムラさんがぬかるみ始めている水溜りをピョコンと上手に飛び越す。その仕草も可愛くてまた少しだけ心があったかくなった。
「雨、強くなりそうだ。急ごう」
とにかく今は全てを忘れたい。さっき僕が吐き捨てた言葉で大きなショックを受けていたカリンの顔も、卑怯な自分と共に頭の中から強制的に排除する。

ごめん、カリン。優しい君にあんなヒドいことを言って……。でも、でも僕はっ……！
カシムラさんと相合傘をしながら、足早にフルリアナスを後にす

る。

校門（ゲート）を出る時も、僕は一度もカリンのいる校舎を振り返らなかった。

僕にはドキドキする娘としない娘がいるみたいです

雨の中、クルミ・カシムラと相合傘をしていて気付いたことが一つある。

それは、【 本日この時をもって、僕はこの女の子に骨抜きにされそうな予感がする 】ということだ。

「それでですね、タイセーくん！　ここからがスゴいんですよぉ！　その時クルミが選んだお菓子クジ、なんと２０回連続で当たりが出たんですぅ～！　お店の人もビックリして口をパクパクさせてました！　スゴいと思いませんかぁ～！？」

ぷにぷにしたまぁるいほっぺをサクラ色に染め、そう報告するカシムラさんはとっても誇らしげだ。

先日お菓子の当たりを立て続けに引いたその武勇伝を嬉しそうに話すこの女の子が今はとにかく可愛くてしょうがない。この娘って当たりを見分ける能力に特化しているんだな。

「どうですかタイセーくん！　クルミ、スゴいでしょ！？」

「う、うん、スゴイね。なかなか出来ない事だと思うよ？」

「えへへ、タイセーくんに褒められちゃいましたぁ～！」

カ、カワイイ……！

カシムラさんの笑顔に胸がきゅうんとする。マズい、本気でやられそうだ。

ただ、カシムラさんの場合は恋愛対象としてではなく、なんていうか、小動物的な可愛さに心が持っていかれる感じに近い。僕は末っ子だから、弟や妹がいる生活に元々憧れていた部分もあるんだろ

うけど、兄が妹に抱く保護欲みたいなものがどんどんと身体の中から溢れ出てくるのを感じる。
あーあ、カシムラさんみたいな妹がいたら良かったのになぁ。もしこんな妹がいたら、僕は絶対に猫かわいがりすること間違いない。お父さんとお母さん、今からでも頑張ってくれないかなぁ。

「あのですね、ではそろそろ本題に入ろうと思いまぁす！」
「ん？　本題って？」
「実はクルミ、タイセーくんにお話があったんですぅ！」

それを聞いて思わず足が止まる。カシムラさんは傘が必要だったから僕と一緒に帰ってるんじゃなかったの？

「今朝、カリンさんはタイセーくんのことが好きって言ってたでしょ？　だけどタイセーくんはどうなんですかぁ？」
僕を真下から見上げ、舌ったらずな口調で尋ねてくるカシムラさん。そしてその質問に動揺しまくる僕。
「なっなんでいきなりそんなこと聞くの！？」
「だってもしタイセーくんもカリンさんが好きなら二人は両想いってことになるでしょ？　それならクルミの入るスペースが無いからですよぉ！」

……え！？
えーとカシムラさん？　い、今の君の台詞って、もうほとんど告白…ではないでしょうか……！？
さっきＣＡＬＬｒｏｏｍで聞かされたイブキ先生のおかしな予言、「カシムラさんもその輪に加わることになるわ」を思い出し、挙動不審が止まらない。も、もしかして僕の人生で初のモテ期ってヤツが到来しているのかな……？

「ねーねー、タイセーくんはクルミのこと、どう思いますかぁ？」
「ど、どうって？」
「クルミのこと、すき～？」
「……！」

くぅっ……！
相合傘の共有スペースの中でつぶらな瞳で僕を見上げるカシムラさんに、またしても胸の中心がきゅううんとする。なんて破壊力なんだ！
で、でもカシムラさんには悪いけど、この胸の高鳴りはあくまでも妹みたいなカワイさにやられているだけで、やっぱりこの娘を恋愛対象としては見られそうにない。

「す、好きっていうか、とっても可愛いなぁとは思うよ？」
ちっちゃいとはいえ、カシムラさんも女の子。その気持ちを傷つけちゃいけないと思うので遠まわしにそう答えると、
「カワイイだけじゃダメですよぉ！　それじゃランコちゃんに勝てないもん！！」
急にカシムラさんがぷーっとふくれる。
何それ？　何が言いたいの？
「それってどういう意味、かな……？」
今の言葉の意味が分からなくて傘を傾けたまま中腰で目線を下げると、僕のすぐ目の前でカシムラさんがさらに頬を膨らませた。
「クルミはランコちゃんみたいになりたいんです！！　ランコちゃんみたいにおっぱいもお尻もボーンて出ててっ、ウエストはキュッって細くてっ、脚もスラッとした女の子になりたいのっ！！」
「は、はぁ……」
「でも今すぐは無理だからっ、せめてランコちゃんの好きな男の子をクルミが先にＧＥＴして、ランコちゃんに勝ちたいんですぅ！！」

――えーと……、なんだろうな、この妙なデジャヴ感は。
この展開って、カリンを気に入らないマツリが、カリンを出し抜きたくて僕に付き合えって強要してきたのと傾向（パターン）は一緒のような気がするよ。それに今の話だとやっぱり……

「カシムラさん、そ、その……、じゃあコダチさんってさ、ぼっ僕のことが好きってこと……？」
「はい！　そーですっ！　さっき救護室（メディカルルーム）でタイセーくんを絶対に落とすって言ってましたぁ！　タイセーくんが自分にメロメロにならないのがランコちゃん的にはどーしても許せないんだそーです！」
と元気に教えてくれるカシムラさん。どうやら僕はコダチさんの天より高いプライドを本格的に傷つけてしまったみたいだ。
「それでランコちゃん、カリンさんに宣戦布告してましたよぉ？
“　どっちが先にタイセーと最後までヤれるか勝負よっ！　”　って！　その勝負に勝ったほうがタイセーくんの彼女だって言ってましたぁ！」
「……ハ、ハハ……」

相変わらずのコダチさんに思わず乾いた笑いが浮かぶ。
どうしてあの娘は話を全部そっち系に持っていこうとするんだろうか。だけどこれからはコダチさんと二人っきりにならないように気をつけなくっちゃ。マツリに身体の上に馬乗りされた時も結構焦ったけど、コダチさんならもっとガチですごい迫り方をしてきそうで怖い。
「タイセーくん、手を出してくださぁい！」
ツインテールを揺らしてのそのいきなりのお願いに、
「えっ無理だよ」

と即座に答える。だって僕の右手は傘、左手は鞄でどっちも塞がっているから、そのリクエストには応えてあげられない。
「それじゃあクルミと手を繋げないじゃないですかぁ！　そこを何とかしてくださぁい！　ほら早くぅ～！」
カシムラさんが片手を差し出してくる。そうか、僕と手を繋ぎたいのか……。
断ると傷つけちゃいそうなので、鞄を持っている左手で何とか傘の柄も持ち、空いた右手を差し出すとちっちゃな手が手のひらをきゅっと握りしめてくる。
「どうですかタイセーくん、クルミと手を繋いでドキドキしますか～？」
僕がときめいているかどうかを確認しにくるカシムラさん。

「あっ間違えた！　こうじゃなかったですぅ！」

なぜかカシムラさんは急に慌てると、手の握り方を変えてくる。今度は手のひらを合わせて指と指を思い切り絡める握り方だ。
「こうやって握ると男の人ってドキドキするんですよねっ？」

いや、相手がカシムラさんだから全然ドキドキしません。僕の半分以下の手の小ささに、本当に幼稚園児と手を繋いでいるみたいな気持ちになる。

「ううん、あまりしないけど……」
今回は正直に感想を言ってみると、カシムラさんが不思議そうに小首を傾げる。
「おかしいなぁ……。確かこの握り方だって言ってたはずなのにぃ」
「……それ、もしかしてコダチさんに聞いたとか？」
「はい！　ランコちゃんはクルミの最終目標だから、ランコちゃんみたいになれるようにいつもいっぱい色んなことを教えてもらって

るんです！」

うわっ、嫌な予感がしたので胸に浮かんだ疑問をぶつけてみたらピッタリと当たったよ！　コダチさんはいつもこの娘に何を吹き込んでいるんだ！？

「明日またランコちゃんに違う迫り方を聞いてみようっと！　とりあえず今日はこれでいいでーす！」

僕としっかり指を絡め、カシムラさんがご機嫌で歩き出す。……ま、いっか。今は擬似妹の気分を味合わせてくれてるんだし。

◇　◆　◇

その後僕はかなり不自然な体勢で傘を差し続け、カシムラさんと手を繋ぎながら雨の中を歩いた。無理に身体を斜めに傾げているので腰が痛い。

雨脚はますます強くなってきている。ようやくメトロの入り口に着いたので繋いでいた手を離し、折り畳み傘を閉じた。

「カシムラさん、メトロに乗るんだよね？」

傘を軽く左右に振って水気を飛ばしながら尋ねると、カシムラさんが元気よく頷く。

「はい！　タイセーくんは乗らないんですか～？」

「うん。だからこれ持っていって」

折り畳み傘を渡そうとするとカシムラさんが慌てて首を振る。

「でもそれじゃタイセーくんがこれから濡れちゃいますよぉ！」

「大丈夫だよ。僕の家、ここからすぐだから。走って帰れば大して濡れないよ」

「本当ですかぁ！？　ありがとうですタイセーくん！　傘、明日返しますね～！」
「うん。帰り道足元に気をつけてね」
「はぁ～い！　また明日ですタイセーくん！」
「うん、また明日」
メトロ乗り場に向かうカシムラさんに手を振る。
やがてそのちっちゃな後ろ姿がコンコースの奥に消えてしまうと、少し寂しくなった。さぁ、これから走って帰らなくっちゃ。
でもその前にすぐ近くに本屋があったのでまずはそこへ駆け込み、マンガの新刊チェックなどをしてみながらこの雨脚が弱まるか少し待ってみることにした。ここから家が近いとはいえ、できればあまり濡れたくない。
小走りで本屋の中に入ると僕と同じように天候の様子見で入店してきている人が多いのか、いつもより店の中は混んでいる。
雑誌を手に取り、それに視線を落とす前に店内のガラス窓から外を見てみると、今日は雨の中でも傘を差さないで悠々と歩いている人は今のところ見当たらない。なんとなくホッとする。

なぜそんなことでホッとするのか。それには落ちこぼれなりの理由がある。

『　雨の日に傘を差さないで外を自信満々に歩く人　』
というシーンにぶち当たる事がたまにあるけど、あれは自分の頭上に傘代わりの円蓋（ドーム）をＰＳＩ能力で発動して、雨に濡れないようにしている人達だ。
この能力を使う場合、外を歩いている間中ずっとその力を発動していなければならないから、それが出来るという事は、
“　自分は平均レベル以上のＰＳＩ能力があるんですよ　”

という証でもある。だから雨の中、手ぶらで傘を差さないでゆったりと歩いている人は、どの人もどことなく優越感を持った表情で歩いているのが特徴だ。
究極の落ちこぼれで、しかも卑怯な自分の情けなさにＭＡＸで凹んでいる今の僕では、正直そんな光景を見ることすら辛かったので、今日は視界にそんな優れた方々が入ってこないことに心から安堵する。本当に良かった。
そんな穏やかな気持ちで窓側に設置された雑誌のコーナーで週刊誌をパラ読みしていると、隣にいた人達が不意に声を上げる。

「おい、見てみろよあの子！　モロ透けてんじゃん！」
「うぉっホントだ！　ヤベー！　写メ撮っとくか！？」

……なんだろう？　透けてるって何が？
雑誌から視線を外し、僕もその方向に目をやる。そして向かいの交差点からこっちに向かって必死に走ってくる一人の女の子を見てビックリした。

「ヤ、ヤマダさんっ！？」

あれは僕らのクラスの委員長で、体育の時間に僕とカリンを心配してこっそり探しに来てくれたヤマダさんだ！！
ヤマダさんはなぜか制服のジャケットを着ておらず、スクールバッグを頭の上にかざし、白いＹシャツにプリーツスカートの格好で走っている。そんなヤマダさんにも分け隔てせずに雨は容赦なく降り注いでいるから、濡れたＹシャツが完全に透け、水色のブラジャーが僕らにも思いっきり確認できている状態になっていた。
「水色だぜ水色！　しかも結構乳でかくね？」
「お前、記憶転写（コピペ）できるか！？」
「俺！？　無理無理！　ぼやけて使えたもんじゃねーよ！　お前で

きるなら後で画像（ショット）くれ！」
「俺も出来ねーよ！　じゃあお前も早く携帯出せって！　あのお宝映像撮っとこうぜ！」
「お、おうそうだな！　ヤベッ、俺、携帯どこにしまってたっけ！？」
た、大変だ！！　ヤマダさんのあられもない姿が知らない奴の携帯メモリに永久保存されちゃうよ！！
雑誌を戻して店の外に走り出ると、この本屋に駆け込もうとしていたヤマダさんがビックリした顔で足を止めた。
「イセジマくん！？」
「いいからこれ羽織って！！」
急いで着ていたジャケットを脱ぎ、ヤマダさんに身体にかける。そして彼女の肩を抱いてこの本屋の前から離れた。
「ど、どこに行くのイセジマくん！？」
「ここはダメだよ！　写メ撮られちゃうから！」
「エ？」
「いいからついて来て！」
濡れ鼠のヤマダさんを引っ張るように本屋の前から離れ、近くの歩道橋の下に誘導するとさっきの店内での様子を伝える。今の自分の格好が第三者の写メに撮られそうだったと知ったヤマダさんは真っ赤な顔になった。
「そ、そうだったの……。それでイセジマくんが飛び出てきてくれたのね」
ヤマダさんの唇から、ありがとう、という言葉が漏れる。
「それよりヤマダさん、どうしてあんな格好で外を走ってたの？

傘は？　ジャケットは？」
「そ、それが放課後に図書室の整理をしている時に脱いで、うっかりそのまま忘れてきちゃって……」
もじもじと自分のミスを恥ずかしそうに語るヤマダさん。ちなみに今日は雨が降ると思っていなくて傘は持ってきていなかったらしい。
「それで今メトロに乗ろうとしたら定期やお財布も図書室に忘れてきたことに気付いて、とりあえず本屋さんに避難しようと思ったの」
定期や財布も忘れてきたの！？　ドジっ娘すぎるだろ！
うーん、でもどうしたらいいだろう。ジャケットやメトロに乗るお金はこのまま貸せるけど、こんなにずぶ濡れになっちゃってるし、メトロを降りたらきっとまた濡れちゃうよなぁ……。

「ヤマダさん、僕の家に来る？」

そう誘うと、ヤマダさんはさっきよりも真っ赤な顔になった。
「えぇっ！？　イ、イセジマくんのお家に！？」
「うん、ここからすぐだから。タオルや傘とか貸してあげられるし、その格好で帰すの心配だよ」
するとヤマダさんはまたもじもじしながら僕から視線を逸らす。
「……イ、イセジマくんって本当に優しいのね……」
「そ、そんなことないよ」
やっぱり僕は褒められることに慣れてない。気恥ずかしいので急いでヤマダさんの手から彼女のスクールバッグを取った。
「これ僕が持つよ。僕の家、あと少しだから走るよ？」
「はっはいっ」
「じゃ行こう」
左手にバッグを二つ持ち、右手でヤマダさんの手をつかむと、し

としとと雨が降りしきる中を僕らは一緒に走り出した。

……うわっ、僕の胸、ドキドキしてきてる……！

コダチさん直伝で、さっきカシムラさんが行ったあの必殺指絡みの繋ぎ方じゃないのに、ただ手を繋いでいるだけでこれだけ心臓がときめいてきている。……ということは、僕はこの娘を恋愛対象として見ているってことだよな……。なにせフルリアナスに入学してすぐに気になった女の子だし。走りながらチラリとヤマダさんの横顔を見る。

「どうしたのイセジマくん？」

「い、いやなんでもないよ」

慌ててまた前を向く。ヤマダさんはコシミズさんみたいに感応力が高いって噂は聞いたことがないし、こうして手を繋いでいても僕の今の気持ちを読み取られることはないだろう。その点は安心してよさそうだ。

あとの残された心配といえば、これからヤマダさんを家に連れて行くわけだけど、姉さんたちが帰ってきていないことを祈るばかりだ。

いや、一人は引きこもりみたいなものだからあっちの姉さんはたぶん家にいるとして、もう一人の姉さんはどうか帰ってきていませんように……！　あの人がいると話がややこしくなりそうだ。

途切れることなく頬に当たってくる雨粒が冷たい。

ハァハァと一生懸命走ってくれるヤマダさんに「あともう少しだから頑張って」と声をかける。早く家に連れて行ってあったかいものでも飲ませてあげなくっちゃ。

繋いでいるヤマダさんとの手が外れないよう、あまり力の入らな

い右手の神経に必死に力を入れる。一刻も早くヤマダさんの身体を温めてあげたくて、僕は必死に走り続けた。

言いたくないけど、僕の姉は〇〇です

僕が今住んでいるマンションは、フルリアナス・ハイスクールに徒歩で通えるくらいの近い場所にある。

通学距離の短さが羨ましがられそうな環境ではあるけれど、僕は手放しで喜べない。

それは今年の三月初旬、街の中心地にあるこの学園に入学する事が決まった時に、僕の家庭で大きな揉め事が起こったからだ。

僕の実家は郊外にあり、フルリアナスからはすごく離れている。

そのため、通学手段をどうするかという問題で家族の意見が割れるという最悪の事態になってしまった。

母さんが車で毎日送り迎えをすると言い張ったのがその発端。

それは僕を甘やかすことになると父さんに一喝された母さんは、お嫁さんが放てる伝家の宝刀、「ワタクシ、実家に帰らせていただきますっ！」を繰り出した。

この突然のお里帰り宣言に狼狽しまくった父さんが平謝りすることでなんとかその場は収まり、最終的にはフルリアナスに在学中の三年間に限り、学園近くのマンションに住む二人の姉たちと一緒に暮らすという選択に落ち着いた。だけどそう決まった時の父さんの言葉が僕は未だに忘れられない。

「タイセー、そこまでしてお前がフルリアナスに行く必要が本当にあるのか？」

その父さんの問いに僕は答えられなかった。だって名門フルリア

ナスに入学できることを一番信じきれていなかったのが当事者である僕だったから。

父さんはこの進学に懐疑的だったけど、母さんや姉さんたちはまったく逆で、フルリアナスへの入学を必死に勧めた。

この学園に入学し無事に卒業できれば他の高校を卒業するよりも箔がつくことは間違いないし、ＰＳＩが使えない僕がフルリアナスで訓練を受ける内に能力が目覚めるかもしれないという淡い期待が三人にはあったんだと思う。

……実は僕もその期待はほんのちょっぴりだけど持っていた。今日、カリンとの出逢いによってその期待は微塵に砕け散ったけど。

◇　◆　◇

雨の中を一生懸命走って、一癖ある姉たちと暮らすマンションにやっと辿り着く。エレベーターで最上階に上がり、家の鍵を開けた。

「雨の中走らせてごめんね。大丈夫？」

後ろを振り返ってそう尋ねると、ヤマダさんは息を切らしながら笑顔で頷く。

「ぜっ、ぜんぜん大丈夫よっ」

ヤマダさんの前髪から滴り落ちた雨の雫がＹシャツの胸元にポタポタと吸い込まれていく。ついその動きを目で追ってしまい、慌てて目線を逸らした。

うわっ、本屋の前で会ったよりも水色ブラの透け具合が激しくなってるよ……！　どうやらヤマダさんは僕のジャケットの前ボタンを止めないで走ってきていたみたいです。今はヤマダさんの胸の谷間の深さとか、ブラジャーの細かい模様の一つ一つまで肉眼でバッ

チリ確認できるレベルだ。

「えんろっ…、えんりょしないで入ってヤマダさん」

焦って噛んだ！

ブラに気を取られすぎだ……。さっきから僕にとってあまりにも役得なターンばかりが続いているので、気持ちが舞い上がるのを止められない。

「お、お邪魔します」

おずおずと靴を脱いだヤマダさんが家の中に足を一歩踏み入れたのを見た時、ちょっぴり感動する。

……　僕、女の子を家に入れたの初めてだよ！！

「こ、こっちだよ」

ずぶ濡れのヤマダさんを僕の部屋に入れ、「ちょっと待ってて」というとバスルームにタオルを取りに行く。上の棚から綺麗なバスタオルとハンドタオルを出し、急いで部屋に戻った。

「はい、これで髪とか拭いて。風邪引いちゃうから」

ヤマダさんの艶々した長い黒髪は、今はたっぷりと雨を吸ってとても重そうだ。

「ありがとうイセジマくん。……あ、ちょっとだけ待って？」

ヤマダさんはそう言うと、僕の差し出したタオルを受け取る前に雨の水滴がたくさんついてしまっている眼鏡をパッと外した。その瞬間、心臓がドキリと跳ねる。

う、うわぁ……、いつも眼鏡をかけている娘が眼鏡を外すと、それだけでこんなにインパクトがあるものなんだ……！　眼鏡を外す

といつもの優等生っぽさとはまた一味違った感じが出て、こっちのヤマダさんもすっごく可愛い！

「どうかしたの、イセジマくん？　私、何かヘン？」

つい、眼鏡もかけていないヤマダさんの素顔を穴の開くほど見つめてしまったので、何事かと思ったヤマダさんが僕を見る。

「ななんでもないよっ！　はっ、早く髪拭いたほうがいいよ？」

「えぇ。あ、それとジャケット貸してくれてありがとう」

これ以上自分の水分で濡らさないように、ヤマダさんが急いで僕のジャケットを脱ぐ。

「でも少し濡れちゃったわ。ごめんなさい」

「いいいいい、いいんだよ！　ぜぜ、ぜんぜんっ！」

ヤマダさんっ、脱ぐの早いよ！！

僕の前でそのジャケットを脱いじゃったら、君のその水色がもっともっと良く見えるようになっちゃうんだってば！！　無防備すぎるにもほどがあります！！

どうしても必然的に胸元に視線が行きそうになるので、髪の水分を拭いだしたヤマダさんに背を向け、次の行動へと移る。クローゼットを開けて僕の服の中からヤマダさんも着られるような服を探してみたけど、室内着用のスウェットぐらいしかなさそうだ。でもこんな安物のスウェット姿で家に帰すのもなぁ……。

少しの間考えて、僕は一つの結論を出した。ヤマダさんにもう一度「ここで待っててね」というと二番目の姉の部屋に向かう。

部屋の前に立つと中はすごく静かだった。

あの姉さんがこんな時間に外に出かけているとも思えないし、寝ている方の可能性が高い。そこでそっとドアをノックする。

「……キサラ姉さん、いるんだろ？　起きてる？」

返事は無い。

もう一度ノックをして呼びかけたが結果は同じだった。

「開けるよ姉さん？」

ドアを開けると中は薄暗かった。昨日も夜中遅くまで姉さんの仕事であるアクセサリー作りに没頭していたようだし、やっぱり寝ているみたいだ。

たくさんのレースがついた天蓋付きのベッドに近づいて中を覗き込むと、そこには僕の二番目の姉、キサラ・イセジマがすやすやと眠っていた。よく寝てるなぁ……。

こんな少女趣味的なベッドの中、アプリコット色のふわふわした巻き毛でぐっすりと眠り込む姉さんは、まるで毒リンゴを食べて眠らされたシンデレラみたいに儚くて綺麗だ。

我が姉ながらこんなに美人なのに本当にもったいない。キサラ姉さんならいくらでもカッコイイ男を捕まえられそうなのに、この姉さんが好きな男は……。

「ん……」

人の気配を感じたのか、キサラ姉さんが急にパチリと目を開ける。そして僕が側に立っていることに気付くと、レースの掛け布団を捲り上げて僕に飛びついてきた。

「お帰りタイちゃんっ！！」

「た、ただいま姉さん」
「タイちゃんが学校に行っている間、姉さん、今日も寂しかったわ。一人であんまり寂しいからベッドに入っていたら眠っちゃったのね」
キサラ姉さんは僕の首に抱きついてくると、すべすべした頬を愛しそうにこすりつけてくる。
「ねぇタイちゃん、姉さんとここでもう少し一緒に寝ましょ？」
「寝るわけないだろ。今何時だと思ってるのさ。まだ五時前だよ？」
「朝の？」
「夕方の五時に決まってるだろ」
「だってタイちゃん、姉さんは２４時間いつでもタイちゃんと一緒に寝たいと思ってるのよ？」
「姉さん、お願いだから“　寝たい　”　は止めて。姉さんが言うと冗談に聞こえないから」
「あら冗談のつもりはないわよ？　だってタイちゃんが大好きなんですもの」
「頼むから弟離れしてよキサラ姉さん……」

僕の心からの願いにキサラ姉さんはパチクリと目を見開く。

「それは無理よ！　だって姉さんはタイちゃんがいればいいの。タイちゃんがいれば幸せなのよ」
「それはまやかしの幸せ、幻想です」
「うふふっ、まやかしでもいいの。実際にタイちゃんは目の前にいるんだし、姉さんはタイちゃんしか目に入らないんだからっ」
ハァ……。
いつもの脱力感が身体を襲う。僕はキサラ姉さんの前で大きな溜息をついた。
「姉さん、お願いだ。頼むから現実を見て。実の弟が好きなんておかしいことなんだって事にいい加減気付いてよ」

もう本当になんとかしてほしいよこの姉。

「そうだ、お前はおかしいぞキサラ」

背後から淡々とした声。ギクリとして振り返ると戸口には一番上の姉がいた。

「シ、シヅル姉さん……！」

帰ってきてたのかこっちの姉さんも！

黒髪を高い位置でポニーテールに結び、口中には棒付きキャンディを咥えたいつものスタイルで僕の一番上の姉、シヅル・イセジマが戸口にもたれかかる。

「私のどこがおかしいの？　シヅル姉さん」

「キサラ、お前は大きな過ちを犯している」

上の姉はちゅぱっ、とどことなくいやらしい音を鳴らして、白い柄付きのキャンディを口中から取り出した。

「年功序列という言葉を知っているな？　お前がタイセーを愛でるのは構わんが、それはこの私がタイセーの若い肢体を隅々まで十二分に堪能してからの話だ。何事も順番は守れ。それがこの社会に生きる者の最低限のルールだ」

「えぇ分かってるわシヅル姉さん……。私、姉さんの次でガマンする」

「よしいい子だ」

「だから正気に戻ってくれよ二人とも！！」

二人の姉のやり取りに思わず突っ込んでしまう。

「ガマンするじゃないだろっ！？　何が年功序列だよ！　そんな異常なルールはうちだけだ！　社会のルールじゃないよ！」

「この私の提唱する年功序列制度に文句があるのかタイセー？」

まん丸の赤いキャンディを尖らせた舌先でチロチロと舐めながらシヅル姉さんが僕を見る。

「だからそれ以前の問題だってば！」

「あぁなるほどな。分かったぞ。つまり、年功序列ならこの私が一番ではなく、母さんが一番に来なければおかしいとお前は暗に言いたいわけだな？　……うむ、確かにお前の言う事にも一理ある。しかしなタイセー。やはり母子相姦はマズいと思うんだ私は」

「近親だって充分にマズいだろ！」

「母子よりマシだろ」

「だからマシとか言い出す辺りからすでにおかしいってことに気付けよ！」

頭が痛い……。もう嫌だ、この家庭環境。

僕の二人の姉は、実の姉でいながら二人とも僕が好きだというれっきとしたヘンタイです。

あぁ僕の人生、いったいどうしてこうなったんだろう？

分かっていたことだけど、女の人って本当に強かな生き物ですよね

いや、今は姉さんたちとこんな不毛なバトルをしている場合じゃない！

濡れたままで僕の部屋にほったらかしにしているヤマダさんが気になるよ。僕のせいで風邪でも引かせちゃったら大変だ。

「あのさキサラ姉さん。姉さんの服を貸して欲しいんだ」

「私の服を？」

キサラ姉さんが目をパチクリとさせる。

「ほう、とうとう女装の世界に目覚めたかタイセー。趣味が多いのはいい事だ。それに男の娘になったお前も見てみたいぞ私は」

「そうねっ、タイちゃんなら中性的な顔立ちだしきっと似合うわ！じゃあ姉さんがメイクを手伝ってあげる！」

「するかそんなこと！」

あぁもうなんでいちいち突っ込まなくちゃいけないんだ！　話が全然進まないよ！

「じゃあ姉さんの服をどうするつもりなの、タイちゃん？」

「今、僕の部屋にクラスの女の子を一人連れてきているんだ。傘がなくて服が濡れちゃっているからさ、姉さんの服を着て帰ってもらおうと思って。だから何か適当な服を貸してよ」

「何！？」

「なんですって……！？」

ヤマダさんのことを話した途端、二人の姉の様子が変わった。
「お前がクラスの女子を部屋に連れ込んでるだと……！？」
シヅル姉さんの口中でバキリという音がする。姉さんが棒付きキャンディを丸のまま豪快に噛み砕いた音だ。
「タ、タイちゃんに彼女……！？　ウ、ウソよ！　そんなのウソよ！！」
青ざめた顔でよろけるように天蓋ベッドにもたれかかるキサラ姉さん。
「ど、どうしたんだよ、シヅル姉さんもキサラ姉さんも！？」
「いいかタイセー、私はすでに決めている」
砕けたキャンディの残骸を飲み込んだ後、シヅル姉さんはキャンディがついていた白い柄をすごい勢いで僕に向かって指した。
「お前の童貞を最初にいただくのはこの私だ！　彼女などという存在を私は認めんぞ！」
「そうよ！　それでほんの少しだけ大人になったタイちゃんに、次は私が処女を捧げるのよっ！」
「だから落ち着けよヘンタイどもっ！！」
あああああ！！　もう本当に勘弁してくれよ！！　どこかにこの姉たちの歪んだ思考を矯正してくれる人はいないのだろうか！？
「よしキサラ、タイセーの部屋にいるその敵を確認に行くぞ。ついてこい」
「えぇ行きましょうシヅル姉さん！」
「わわわ！！　待ってよ姉さんたち！　ウチの恥さらしになるような真似は止めてくれ！」
「フッ、安心しろタイセー。その女子の前で私たちがお前を好きなことは言わないさ。私もキサラも、お前に欲情していることは公の

場では秘密にしている。世間的にあまりウケがよくないのは分かっているのでな」
「分かっているなら改心しろよ！！」

あぁもう！　学校から帰ってきたばかりだってのになんでいつもこうなるの！？　でも頭を抱える前に姉さんたちを止めなくっちゃ！　こんな変態コンビを純情なヤマダさんに遭遇させるわけにはいかないよ！

「行っちゃダメだよ姉さんっ！」
先に廊下に出ていたシヅル姉さんの細い腰に抱きつく。しかし、なぜか姉さんは僕がしがみつく前からその歩みをすでに止めていた。
「……あのムスメか？」
「へ！？」
シヅル姉さんの腰の後ろから顔を出すと、僕の部屋を出てきていたヤマダさんが廊下の先に呆然と立っている。

「あぁっヤマダさん！？」

うわあああ！！
もしかして今までの僕ら姉弟（きょうだい）のアブノーマルな会話、全部聞いちゃったの！？
「イ、イセジマくん……、わ、私、あの、別に、そういうつもりで出てきたんじゃなくって……」
おどおどと僕から視線をそらすヤマダさんに、嫌な汗が吹き出てくるのを止められない。あの様子じゃ絶対に聞かれたと思って間違いないぞ。ど、どうしよう！？
「プッ、アハハハハハハ！！」

急にシヅル姉さんが大笑いを始めた。
だ、大丈夫姉さん!?　自分とキサラ姉さんの恥部を他人に知られておかしくなっちゃった!?
「なぁキサラ!　これは爆笑だな!」
「えぇそうね、姉さん。私もとってもおかしいわ」
よく見るとキサラ姉さんもくすくす笑っている。あぁついにどちらの姉も壊れたか……。
「タイセーのクラスメイトだそうだな。どうも初めまして。タイセーの一番上の姉でシヅル・イセジマだ。よろしく」
シヅル姉さんは廊下で立ち尽くしているヤマダさんに近づく。
すると、素っ裸でコートの前を大胆に広げる変質者が近づいてきたかのようにビクッと身を竦ませ、大きく後ずさりするヤマダさん。
ほら見ろ!　思いっきりドン引きしてるじゃないか!!　これ、一体どう収拾をつけるつもりなんだよ姉さんたち!?
しかし慌てる僕とは違い、シヅル姉さんは毛ほどの動揺も見せずにさらにヤマダさんに近づいた。これだけ露骨に引かれてるのにスゴすぎる。我が姉ながらどれだけの鋼鉄(アイアン・ハート)の心臓を持っているのだろうか。

「ハハッ、しかしこんなにうまくいくとは思わなかったな」
シヅル姉さんは満面の笑みで硬直するヤマダさんの肩にポンと手を置く。
「お嬢さんがそこの廊下に出てきていたのはとっくに知っていたよ。キサラほどではないが、私も感知能力にはいささか自信があるのでな」
シヅル姉さんのその言葉の意味がまだよく飲み込めないヤマダさんは、「えっ?」と呟き目を見開く。
「いやね、うちのタイセーは昔から奥手でさ、家に女の子を連れてきたことなんか今まで一度も無かったんだ。だからいつかタイセー

が初めて女の子を連れてきたら、その時は今の小芝居を打ってその女の子をからかってみようってキサラと決めていたんだ。なぁキサラ？」
「えぇ、シヅル姉さんの言う通りよ」
とヤマダさんに向かって微笑む二番目の姉。
「タイちゃんのことはもちろん大好きだけど、それはあくまで弟としてよ。いくら食べちゃいたいくらいカワイイとはいえ、血が繋がっている弟にそんな感情持つわけ無いでしょ？」
「そ、そうだったんですか……」
冗談だと理解したヤマダさんがホッとした表情を見せている。
「でも姉さん、私たちちょっとやり過ぎちゃったみたいね」
「あぁ、少々調子に乗りすぎたようだ。からかって済まなかったな。だが迫真の演技だったろう？」
「は、はい。私、お姉さんたちが本当にイセジマくんのことを好きなのかと思ってビックリしてたんです……」
「フッ、私は高校、大学と演劇部に所属していてな。人を騙す演技をするのはお手の物なのだよ。ところでお名前を伺ってもいいかな？」
「あっ！　ご、ご挨拶が遅れてスミマセン！　私、ナナセ・ヤマダと言います！　イセジマくんと同じクラスです！　お姉さん方、初めましてっ！」
直立不動で挨拶をした後、ヤマダさんがペコリと頭を下げる。
「ふふっ、とても真面目そうな子ね。私はキサラ・イセジマよ。タイちゃんの二番目の姉。よろしくね」
キサラ姉さんがゆったりと微笑む。
「この子、タイちゃんにはピッタリの女の子だわ。そう思わない？　シヅル姉さん」
「あぁ、ヤマダさんにならタイセーを安心して任せられそうだ」

「ちょ、ちょっと待ってよ！　僕とヤマダさんはそういう関係じゃ…」
「照れるなタイセー。お前の気持ちは姉である私たちが誰よりもよく分かっている」
「そうよタイちゃん。ねぇシヅル姉さん、この子ってタイちゃんの一番好きなタイプよね？　眼鏡をかけて優しくておとなしそうで」
「あぁ。この私とは似ても似つかない女がタイセーのどストライクだからな。そうだろう、タイセー？」
「ぐっ」
確かにそれは１００％当たってますシヅル姉さん……！
だ、だけどそれを今ここで、ヤマダさんの前で言わないで下さい！　僕、もうさっきからヤマダさんの顔をまともに見られなくなってきてるんですけど！？
「……それにしてもなかなかに挑発的な格好だなヤマダさん」
シヅル姉さんが目の前のヤマダさんを改めて上から下まで眺め、上半身を指さす。
「さっきからうちの弟の視線が宙を泳いで大変だぞ？」
「エ？　あっ！　や、やだ私ったら！」
手にしていたハンドタオルで自分の胸元を慌てて隠すヤマダさん。
でも正直なところ、今さらって感じなんですが。だってなんだかんだでさっきから君の透けた水色ブラ、結構見ちゃってます、僕。
「ねぇヤマダさん」
ここでキサラ姉さんが最高の笑顔を見せる。
「良かったらうちでお風呂に入っていったら？　お湯も張ってあるし、入れば身体もあったまるわよ？　タオルで身体を拭いただけじゃ風邪を引いちゃうわ」

エエーッ！？　なっ、何言い出してんだよキサラ姉さん！？　慌てて止めようとしたけど、それにシヅル姉さんも同調してしまった。
「そうだな、ヤマダさんが風呂に入っている間にその制服は乾燥機で乾かしてあげよう。そうすればそれを着て帰れるしな。だがせめて下着は新しい物を穿かせて帰してやりたいな……。キサラ、お前新品の下着を持ってるか？」
「えぇあるわ姉さん」
「じゃあそれをヤマダさんに上げなさい。私も新品は持っているが確か全部Ｔバックだったしな……。どうだろうヤマダさん、Ｔバックでも良ければ私の新品を差し上げるが？」

「ゲホッ！！　ゴホゴホッ！！」

「あらいやだ、タイちゃんの方が風邪引いちゃったのかしら」
シヅル姉さんのぶっとび発言に驚いて咳き込んでしまった僕を、キサラ姉さんが心配する。一方のヤマダさんはといえば、真っ赤な顔でぶんぶんと首を横に振りまくり、シヅル姉さんの新品Ｔバックを必死に辞退していた。
「ふむ、やはりＴバックは好みではないか。あの絶妙な食い込みが緩みがちになる気持ちを引き締めてくれるのだがな……。本当にいいのか、ヤマダさん？　無地にチェックに豹柄までバリエーションも豊富だぞ」
「い、い、い、いえっ！！　けけけけっこうですっ！！」
あぁもうダメだ……。
このヘンタイ的な空気に翻弄される純情なヤマダさんを見ていられない。両手で深く顔を覆ってこの異様な現実から目を背けたいくらいだ。ごめんねヤマダさん、こんな長姉で……。

「ねぇタイちゃん見て！　タイちゃんはどっちの方がいーい？」

「何が？」
咳が落ち着いてきたので顔を上げると、キサラ姉さんが新品の二枚の下着（ぱんつ）を右手と左手にそれぞれ持って、僕に向かってフリフリと旗のように振っている。
「ぶはっっ！　ゲホゴホゲホホホホッ！！」
さっきよりも豪快に咳き込む。
そのあまりの咳き込みように、「だ、だいじょうぶ？　イセジマくん」と渦中のヤマダさんまでが心配をしてくれた。
ゴホゴホと咳き込む僕の背中をヤマダさんがそっとさすってくれる。
もう本当にごめんねヤマダさん、こんな姉たちで……。
「早く決めてタイちゃん！　どっちをヤマダさんに上げればいーい？」
「ごほっ……、なっなんで僕に聞くんだよ！　聞くならヤマダさんにだろ！？」
「だって彼女の下着を決められるチャンスなのよ？　滅多にないシチュエーションだと姉さんは思うんだけど？」
「そうだぞタイセー。ヘタレなお前ではヤマダさんに穿いてほしい下着のリクエストなどできんだろう。キサラの弟愛に感謝するんだな」
「できるかそんなの！！」
もういやだ、本当にいやだよ、この姉たち……。
「じゃあ姉さんが決めてあげるわね。タイちゃんならおそらくこっ

ちの方が好みね。はいっ、どうぞヤマダさん！　タイちゃん好みの下着、遠慮なく使ってね」
　勝手に僕の好みを決め付け、キサラ姉さんが純白のレース付き下着をヤマダさんに手渡した。ヤマダさんは「あ、ありがとうございます」と言うと赤い顔でそれを受け取り、チラチラと僕を何度も見る。その視線は、「イセジマくんってこういう下着が大好きなんだ……」って言いたげな視線だった。

　ハハ、もう完全に終わったよ……。二人の姉から様々な冤罪をかぶせられているけど、今の僕に反論する場は一切用意されていない。

「じゃあキサラ、ヤマダさんをバスルームに案内してあげなさい。私は温かいコーヒーを淹れる準備をしておこう」
「分かったわ姉さん。さぁいらっしゃいヤマダさん」
「は、はいっ」
　僕をこの場に残し、女三人が部屋を出て行く。
　しかしその直前、列の最後尾にいたシヅル姉さんが室内を振り返り、僕を見て意味深にニヤリと笑いかけてから出て行った。

　……シヅル姉さん、今の姉さんの目を見れば何が言いたいのか分かったよ。

　言葉にはしなかったけど、恐らくシヅル姉さんは、「どうだタイセー？　うまくごまかせただろう？」と伝えたかったに違いない。
　ヤマダさんはさっきの一幕が姉さんたちのジョークだと思ったみたいだけど、実はシヅル姉さんはキサラ姉さんと違って感知能力はあまり高くないし、高校、大学と演劇部になんか一切所属していない。

……つまり騙す演技をしていたのは最初のアブノーマルな一幕ではなく、ヤマダさんが現れてからの一幕ってことだ。

しかしうまいことやったよな、シヅル姉さんもキサラ姉さんも……。呆れるくらい感心するよ。

今日は姉たちの強かさを再認識したけど、もちろんこの事実をヤマダさんに暴露するつもりはない。この真実はすべて闇の中にしておくべきことだから。

いつまでもキサラ姉さんの部屋にいてもしょうがないし、僕もリビングに行こう。

ヤマダさんがお風呂から上がるまでに色々と心構えもしたいし、たぶん姉さんたちとの打ち合わせも必要だ。ヤマダさんがこの家から無事に帰るまでの間、イセジマ三姉弟で偽りの第二幕を上演しなければならない羽目になってしまったようだから。

ハァ、僕にうまく演技が出来るんだろうか……。

あなた達は、僕の気持ちを今も分かってくれていないんですね

それから約四十分後、【　イセジマ姉弟劇場（きょうだい）　】　の幕が再び上がった。

お風呂から上がったヤマダさんを加え、リビングは女性三人のお喋りでうるさいくらいに大盛り上がり中だ。そして僕はといえば、その一角にまるでシーサーの置物のように座っているだけ。やることがまったく無い。

“　迂闊なことは喋らないようにお互い気をつけよう　”

と、ヤマダさんがお風呂に入っている時に姉さんたちと打ち合わせはした。だけど実際に劇の第二幕が上がると、そこに僕の出る幕などどこにもありはしなかった。準主役どころか、通行人（エキストラ）の役すらやらせてもらえていない。

しかも主役を張る姉さんたちが、探偵も顔負けの色んな質問を絶妙のコンビネーションでヤマダさんにするものだから、僕はこの一時間で彼女の個人情報をかなり知ってしまった。

まずヤマダさんの生い立ちから始まって、家族構成に住んでいる場所、ヤマダさんの携帯番号及び好きな水着の種類、そして挙句の果てにはお父さんの年収まで聞き出した姉さんたちの情報収集能力には空いた口が塞がらない。

きっぱりと言います。

もうここはただのリビングじゃありません。警察の取調室と化しています。本物の取調室と大きく違う点といえば、皆で和気藹々としている部分くらいじゃないだろうか。

しかもヤマダさんの事情聴取があらかた終わると、なぜかシヅル姉さんが僕の幼少時代の画像（ショット）が収められたアルバムボードを持ち出

してきて、幼い頃の僕のエピソードをヤマダさんに色々と教え始める。
何だよこの展開！？　まるで個人情報のギブ&テイクじゃないかー！！

「わぁ……！　赤ちゃんのイセジマくん、カワイイ！」

ヤマダさんは楽しそうな表情でボードのディスプレイに次々と映る僕の写真を見てくれている。
だけど内心は僕の赤ん坊の頃の姿なんて別に見たくないはずだ。今の言葉だって、この場の雰囲気を悪くしない為のお世辞に決まってるよ。

……ハァ、僕はただ、この娘をずぶ濡れのまま帰すのが忍びなかったから家に連れてきただけなのに、さっきからありとあらゆる色んな目に遭わせてしまってなんだかもう本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

「この方がイセジマくんのお母さんですか？」

赤ん坊の僕を抱いている母さんを見たヤマダさんがシヅル姉さんに尋ねる。
「あぁそうだ。美人だろ？　うちの母さん」
「はい。二番目のお姉さんにとってもよく似てらっしゃいますよね」
確かにキサラ姉さんは母さん似だ。
「キサラは母さんに似て良かったよな。私もお前のようにパッチリとした目になりたかったよ。父さんに似てしまった私の不運だな」
ポニーテールを揺らし、シヅル姉さんがフッと笑う。でもシヅル姉さんの切れ長の目は、姉さんのそのクールな性格にすごく合っていると思うんだけど。

「ここから幼稚園の写真ですね」

アルバムボードは赤ん坊時代から幼稚園児時代に移ったみたいだ。オートモードにしているのでページは三秒後には次の写真へ進むようになっている。移り変わる写真を見ていたヤマダさんは「あっ」というと右下の一時停止（ポーズ）キーをタッチして画像の流れを止めた。

「この女の子、どこかで見たような……？」

「エ？」

ヤマダさんの手元のボードを覗き込んだ時、心臓がドキリと不整脈を打つ。

ボードで表示できる範囲をフルに使用してそこに大きく表示されていたのは、幼少時の僕とカリンだった。

まだ残ってたんだ……、僕とカリンの幼い頃の写真が。

幼稚園の裏手にある草原で、僕とカリンが仲良く遊んでいるツーショット。

僕が笑顔のカリンに向かって差し出しているのは一本の四つ葉のクローバーだ。

誰に聞いたのかはもう忘れてしまったけど、これをたくさん集めると何でも願いが叶うんだって昔の僕は信じていた。それをカリンに教えたら、四つ葉のクローバーをまだ見たことが無かったカリンがすごく見たがって、それで草原を二人で一生懸命に探して僕がようやく一本見つけた時の写真だ。

このクローバー、カリンに上げたら、すっごく喜んでくれたっけ……。

当時のカリンとの楽しかった記憶を思い出し、甘酸っぱい気持ちが胸の中に湧き起こる。
そしてその女の子はカリン・タカツキだよ、とヤマダさんに教えようとした時、不意にキサラ姉さんが無言でボードの上に手を伸ばした。そして何をするのかと聞く前に削除（デリート）キーをタッチする。
二番目の姉さんの命令を受けたアルバムボードは、即座に次の指示を要求してきた。

【■　⇒　メモリからこの画像を消去しても本当によろしいですか？　■】

「キサラ姉さんっ！？」
二番目の姉が何をしようとしているのかが分かった僕は慌ててソファから立ち上がり、「ＮＯ」の項目を触ろうとした。でも出したのが右手だったので動きが遅く、一瞬早く姉さんの指が「ＹＥＳ」をタッチしてしまう。すると即座にカリンの笑顔は粉々のモザイクの破片へと姿を変え、ボード上から消滅してしまった。
「姉さん……」
行き場を無くした僕の右手が空中で止まる。
「け、消しちゃって良かったんですか……？」
今ではもう撮る事の出来ない昔の写真をためらうことなく削除してしまったキサラ姉さんに、ヤマダさんがビックリした顔で尋ねる。するとキサラ姉さんはニッコリと笑って「いいのよ」とだけ答えた。そしてシヅル姉さんも「あぁそれは要らないデータだ」と答え、横から手を出して一時停止を解除した。

ヤマダさんの手元のアルバムボードは何事も無かったかのように、画像の続きを淡々と映し出してゆく。しかし僕ら姉弟の間は少し微妙な空気になっていた。

ボードに向かって伸ばしていた手を引っ込め、おとなしくまたソファに座り直す。

キサラ姉さんに、どうしてカリンとの写真を勝手に削除したんだよ、と怒ることもできたけど、姉さんたちの気持ちを考えると言い出せなかった。だって全ては僕のことを思っての行動だろうから。

アルバムボード上で削除してしまった画像は通常、復元することはできない。おそらくバックアップなど取ってはいないだろう。

カリンと一緒に映っていたあの写真、取っておきたかった。

せめて一枚くらい、楽しかった思い出として残しておきたかった。

僕に記憶転写（コピメ）ができたなら、キサラ姉さんに消される前に自分の記憶（なか）に取り込んでおけたのに……。

……そして今回のことではっきりと分かったよ。

シヅル姉さん、そしてキサラ姉さん。

姉さんたちは今もカリンのことを許していないんだね。僕の手が不自由になったことを今も怒っているんだね。

僕が右手に大怪我を負い、カリンが幼稚園から退園した後、僕とカリンが映っていた写真や思い出の物はいつのまにか全部処分されていた。あれは僕が怪我をしたことを思い出さないようにとの気遣いからかと思っていたけど、どうやら事実は違うようだ。

でも姉さん。姉さんたちは誤解しているよ。

あれはカリンが悪いんじゃないんだ。カリンだって被害者で、僕

はカリンを助けたかっただけなんだ。
そんな僕の気持ち、十年経った今でも姉さんたちは分かってくれていないんだね。
こんな身体になってしまったことは今でも辛いけど、でも僕はカリンを恨んでなんかいやしないのに。

君のその行動に、理性を保てる自信がなくなりそうです

僕ら姉弟のせいでリビングの空気が急に重苦しくなったのを敏感に察知したヤマダさんが、わざと明るい口調でアルバムボードを指さす。

「あっ、あのっ！　このイセジマくんもすごくカワイイですっ！！」

……なんだか気を遣わせちゃったみたいだ。でも本当にいい娘だよなぁ、ヤマダさんって……。

フルリアナスに入学して一番最初にこの娘が気になった僕としては、そんな自分の感性がちょっぴり誇らしい。

「そうだろ、カワイイよな、うちのタイセーは」

ヤマダさんのお褒めの言葉を聞いたシヅル姉さんが目を細める。

「良ければどれでも好きな写真をあげるぞ、ヤマダさん」

「ぶっっ！！」

危うく飲んでいたコーヒーを天井に向けて盛大に噴き出しそうになった。

「ババババカなこと言い出すなよシヅル姉さんっ！！　ヤマダさんが僕の写真なんか要るわけないだろ！？」

「なぜお前がそう言い切る？　そんなのはヤマダさんに聞いてみないと分からないだろうが」

シヅル姉さんはソファで組んでいた脚を組み替え、そう切り返してきた。あまりにもクールに返されたせいで、咄嗟に次の言葉が出てこない。

するとヤマダさんはアルバムボードのページ欄をタッチし、続け

ざまに25を入力してその中の一枚を嬉しそうに指さした。
「それなら私、このイセジマくんがいいですっ！」
「ほう、そのタイセーを選んだか……。なかなかいい選択眼だぞヤマダさん」
「はいっ！」

ええええちょっと待って！　ヤマダさん、今のギャグだよね！？　ギャグですよね！？
しかしヤマダさんは「では頂きますっ」と前置きして、ボードの角にある抽出（イジェクト）キーを押し、ロックを解除した。ほ、本気なのっ！？
「記憶（コピメ）転写？　それともプリントしてあげましょうか？」
コピメを発動することが出来なければ、印刷しかない。
画像（ショット）の持ち帰り方法についてキサラ姉さんに尋ねられたヤマダさんは、頬に手を当てて恥ずかしそうに俯くと、「りょ、両方でいいですか……？」と呟いた。
「ハハッ、ヤマダさんは欲張りだな！」
シヅル姉さんに大笑いされたヤマダさんの顔がピンク色に染まる。
「や、やだ私ったら！　図々しい事を言ってスミマセン！」
「いや全然だよ。私も少々笑いすぎてしまったな。それにそんなにうちの弟の写真が欲しいだなんてそれだけ……なぁ、タイセー！？」

なんでそこで僕に振るのーっ！？
思わずヤマダさんの方を見てしまったので彼女と目が合う。
恥ずかしそうに僕を見つめるヤマダさんに対してどんな顔をしていいのかは分からないけど、顔の熱が勝手にどんどんと上がってきているのだけは分かった。
ヤマダさんは動揺している僕を眩しそうに見つめた後、恥じらいの表情のまま軽く目を閉じる。そしてディスプレイに表示されてい

る僕の画像に手のひらをかざした。う、うわぁ……、ウソだろ、本当にコピメ始めてるよ……。
記憶転写をするといつでも見たいときに頭の中に鮮明な画像を出せるから、このＰＳＩ能力が出来る人は、大好きな恋人とか、優しい家族とか、あるいは憧れているアイドルとか、大切な人物を記憶の中に取り込む人が多い。……で、でも、こんな落ちこぼれの僕の写真なんかを君の記憶（なか）に取り込んで、一体どうするつもりですか！？　魔除けにでも使うつもり！？

「はい、プリントもできたわよ」
「ありがとうございますっ」
キサラ姉さんがプリントした画像を受け取ったヤマダさんはそれを大切そうにクリアフォルダの中に入れた後、スクールバッグにしまった。そしてボードにまた視線を落とすと「あらっ？」と呟く。
「イセジマくんの小学生の頃の写真、もう終っちゃった……？」
メモリの中に保有していた情報をすべて吐き出し終わったアルバムボードのディスプレイは、さざなみのような待機表示画面に切り替わっている。
「どうして小学生の頃の写真があまりないんですか？」
その何気ない質問に、ギクリとした僕ら三姉弟の肩がわずかに揺れる。そしてヤマダさんにどう説明しようか考え出した直後にシヅル姉さんのフォローが入った。
「あぁ、もちろんちゃんとあるぞ。このボードじゃなくて別なボードにな。だがそれは実家に置いてきてるんだ」
「あぁそうなんですね。残念だわ、小学生のイセジマくん、もっと見たかったです」

「フッ、熱心だなヤマダさん。だがタイセーを見たいのならまずは今そこにいる現実の弟をもっと見てやってくれよ」
「ぶっ！！」
またしてもコーヒー噴き出しそうになる。
「へ、ヘンなことを言わないでよ姉さん！！　ヤマダさんが困ってるだろ！？」

あぁもうっ、小学校の頃の画像が少ない事をうまくごまかしてくれたのはいいけど、この人はどうしてこう余計な一言を付け加えるんだろう！？　小学生の僕がもっと見たかったって言ったのもただのお世辞なのに！
ヤマダさんは狼狽する僕をみてクスリと笑うと、ソファから立ち上がった。

「私そろそろ失礼します。お姉さん方、そしてタイセーくん、本当に今日はありがとうございました」
「ん？　もう帰るのか？　うちは別に構わないんだぞヤマダさん」
「ありがとうございます。でももう時間も遅いですし家族が心配しますから」
「あぁそうか、それもそうだな。すまなかったね、ここまで引き止めてしまって」
「いいえとんでもないです！　すごく楽しかったですし、制服を乾かしてもらったり、下着をいただいたり、お風呂にまで入らせていただいて……。このご恩は忘れません」

ヤマダさんが深々とお辞儀をする。

「礼なんか要らないさ。タイセーの大切な女の子ならば、私たちにとっても可愛い妹と同じだ。なぁキサラ？」
「えぇそうよ。タイちゃんのことよろしくねヤマダさん」

「しかしタイセーの彼女ならヤマダさんと呼ぶのも少々他人行儀だな。私もキサラもこれからはナナセと呼ばせてもらおうか」
「そうね姉さん」
「えっ？　あ、あの私……」
頬を染めて急に僕を見るヤマダさん。今回はそのＳ・Ｏ・Ｓに気付けたので、もう一度姉さん達の誤解を解きに動く。
「姉さんっ、さっきから言ってるけどヤマダさんと僕は…」
「おいタイセー。お前がヤマダさんと呼んでどうする。お前が一番にナナセと呼ぶべきだろう？」

「えぇぇっ！？」

「そうよタイちゃん。ナナセちゃんを名前で呼んであげなさいな」
「な、名前で呼べって言われたって……」
二人の姉から責められ、言いたい事がまた尻すぼみで終ってしまった。するとシヅル姉さんは顔を横に向け、今度はヤマダさんに尋ねる。
「なぁ、ナナセだってタイセーに名前で呼んでほしいだろ？」
「あ…、え、その……」
ここで「いいえ」とあっさり否定すると思ったヤマダさんはなぜか無言でもじもじとしている。
「ほら見ろタイセー。ナナセの気持ちも分かってやれ。まったく姉が二人もいるのに女心の機微に鈍い奴だ。恥を知れ、恥を」

そ、そんなこと言われたって……！　っていうか、姉さんにだけは「恥を知れ」、なんて言われたくないよっ！！
「よし、じゃあ私が車でナナセの家まで送ってやろう。さっき住所も教えてもらったしな」
シヅル姉さんがテーブルから立ち上がる。

「い、いえ結構です！　こんなにしていただいてこれ以上ご迷惑はかけられません！」
「遠慮するな。ナナセはもう私たちの妹みたいなものだと言ったろう？　おとなしく甘えておけばいいんだよ」
うわーカッコイイなぁシヅル姉さん……。
これで極度のブラコンでなければ最高に素敵な女性なのに。神様を恨みたい。
「ナナセちゃん、また遊びに来てね。待ってるわ」
「ありがとうございます！」
優しいなぁキサラ姉さんも……。こっちも極度のブラコンでなければ……、以下略。
最後にヤマダさんは僕の前に来る。
「イセジマくんも今日は本当にありがとう。あなたがいなかったら私あの後どうなっていたか……」
「ううん、どういたしまして。また明日学校でね」
「何を言ってるんだタイセー？　お前も一緒に来るんだよ」
「ぼ、僕も！？」
「当たり前だろう。お前の彼女だぞ？　お前も一緒に最後まで送ってやらないでどうする」
「だ、だからヤマダさんは…」
「ナナセだ！」
「う……」
ピシャリと叱られ、またしても誤解を解くことが出来なかった。
「じゃあキサラ、すぐに戻ってくるから留守番を頼むぞ」
「えぇ分かったわ。行ってらっしゃい」
キサラ姉さんに見送られ、僕ら三人はマンションの地下にある駐車場に向かう。
車の前にまで来ると、シヅル姉さんは僕に向かって後部座席を指さした。

「タイセー、お前は後ろに乗れ」
「うん」
おとなしく後部座席に座る。
ヤマダさんを助手席に座らせるんだろうなと思ったら、シヅル姉さんはヤマダさんにも同じ事を言った。
「ナナセも後ろだ」
「はい」
反対側のドアからヤマダさんが乗り込んでくる。
僕らが後部座席に腰を下ろすと、シヅル姉さんは運転席から身をひねり、笑いながら後部座席を覗き込んできた。
「お互い少しでも側にいたいだろ？」
「！！」
顔を見合わせた僕らは返す言葉も無くお互いにただ赤面する。
「二人ともシートベルトはちゃんとつけてくれよ？」
最後にそう指示を出すと、姉さんは車を発進させた。
ヤマダさんを乗せているせいか、今日のシヅル姉さんの運転はいつもより慎重だ。運転に集中したいのか、車に乗ってからのシヅル姉さんはほとんど喋らなかった。
静まり返る車内。
だけどヤマダさん、どうして僕の写真をコピメったり、さっきのシヅル姉さんの言葉を否定したりしなかったんだろう……。
そっと左横を見ると、車内を横に流れ続ける外灯の光がヤマダさんの横顔を何度も照らしていた。しかしこっそり視線を送り始めて何度目かに、ヤマダさんに気付かれてしまう。
僕が横顔を眺めていたことに気付いたヤマダさんは、少しだけは

にかんだ表情でまた視線を前に戻した。
よ、よかった……、怪訝な顔をされたらどうしようかと思ったよ。
安堵した瞬間、膝の上に置いていた左手が温かくなる。
ん？　と思い下を見ると、ヤマダさんが僕の手を握っていた。あまりにビックリしたので「わぁっ？」という叫び声が喉元まで出かける。

「何か言ったかタイセー？」

前方を見たままでシヅル姉さんが尋ねてきたので慌てて「な、なにも言ってないけど？」と答えた。
「そうか。私の気のせいか」
そう呟くとまた姉さんは運転に集中する。しかし僕は未だ動揺中だ。だってまだ僕の手はヤマダさんに握られたままだから。

うちのお風呂でよくあったまったせいか、ヤマダさんの手はポカポカしていてとても温かい。でも僕の手はどちらかというと冷たいので、せっかく温まった彼女の体温を奪っちゃいけないと思い、ヤマダさんの手を外そうと左手をずらしかける。するとその途端に予想以上の力でさらに強く握られた。

エ！？　エ！？　な、なんでそんなに強く僕の手を握るの！？

心臓のバクバク度合が尋常じゃないぐらいのレベルにまで急上昇してきている。ドキドキしながら再びヤマダさんの方を見ると、ヤマダさんも僕の顔を見た。
そして。

そっとヤマダさんの唇が動く。

その唇の動きを見た瞬間、理性が一気に砕けていくのを感じた。
横にいる僕にだけ分かるよう、声を発しないで伝えてきたヤマダさんの言葉はたった一言。

「　好き　」

それだけだった。

それでも僕はこの二人が愛しいです　【1】

「今日は本当にありがとうございましたっ」

３０分程で無事にヤマダさんの家に着いた。車を降りたヤマダさんは、車内にいる僕とシヅル姉さんにもう一度頭を下げる。

「また遊びに来なよ」

開け放したウィンドウに片肘を乗せてシヅル姉さんが笑うと、ヤマダさんも

「はいっ！」

と嬉しそうに答えた。そしてその後に遠慮がちな視線で僕をチラリと見る。

……も、もしかしてその視線は僕からのアクション待ちですか！？

「おいタイセー。ここでお前も遊びに来いって頼む所だろう？　我が弟ながらつくづく情けない奴だな」

あぜ道に立つお地蔵さんレベルの硬さでフリーズしている僕に、シヅル姉さんは呆れ顔だ。だけどついさっきこの娘から口パクで「好き」と告白をされたばかりの僕はここでどんな言葉をかけたらいいのかが全然分からない。

「済まないねナナセ。言うべき事も言えないこんなヘタレな弟でさ。でも見捨てないでやってくれよ？　少々頼りないが意外と根性はあるし、根はいい奴なんだ」

頬を染めたヤマダさんは「はい」と一度頷いた後、恥ずかしそうに残りの言葉を呟く。

「タッ、タイセーくんがいい人なのはもう充分に分かってますから……」
「ハハッ、良かったなタイセー。ナナセみたいないい娘と知り合えてさ。せいぜい今夜は神様に感謝しとけよ？」
「あ、あうぅ……」
「タ、タイセーくん、また明日ね……？」
青いフレームの眼鏡ごしに、ちょっぴり潤んだ瞳で僕を見つめるヤマダさん。とっ、とりあえず「うん、また明日」ぐらいは言わなくっちゃ！

「ままっ、またあすたっ！」

たった一言なのに突っかえた！！　しかも訛った！！　どんだけテンパってんだよ僕！？
微笑んでいるヤマダさんを残し、超ヘタレな僕を乗せた車はゆっくりと動き出す。僕らの車が見えなくなるまでヤマダさんはずっと歩道で手を振りながら見送ってくれていた。

◆　◇　◆

「……純粋でいい娘だな。私は気に入ったよ」

しばらく無言で車を走らせていたシヅル姉さんが不意にポツリと

呟く。その後、車を歩道脇に止め、「降りろタイセー」といきなり命令をした。
「ここで降りろって……、あっ何か買ってきて欲しいの？」
何か欲しい物があって僕をコンビニにでも走らせるのかと思いそう尋ねると、姉さんはムスッとした顔で「いや、助手席に乗れ」と新たな指示を出す。
「お前がそうやって一人で後ろにふんぞり返っていると、お前のお抱え運転手になったような気がして不快だ」
「べ、別にふんぞり返ってるつもりはなかったけど……」
「いいから黙って隣に来い」
シヅル姉さんの機嫌を損ねたくないのでおとなしく車を一旦降り、助手席に座る。そして僕がまだシートベルトを締め切らない内から車は再び走り出した。

「タイセー」

しばらく無言で車を走らせていた姉さんが急に僕の名を呼ぶ。
「なに？」
「帰ったらキサラのフォロー頼むな」
「キサラ姉さんのフォロー……？」
「あいつ、今頃きっと落ち込んでいると思うから」
シヅル姉さんはそう言うと僕の前にあるダッシュボードを開けろと命令する。言われた通りにダッシュボードを開けて驚いた。
「わっ！？　どれだけ買い込んでんだよ姉さん！？」
ダッシュボードの中は様々な味の棒つきキャンディで溢れ帰っていた。シヅル姉さんはいつも暇さえあればこのキャンディを口に突

っ込んでいるけどまさかこんなに買い込んでるなんて……。
「こんなに食べて大丈夫なの？」
「毎日食べる本数を決めているから大丈夫だ。いいから取ってくれ」
「味はどれでもいいの？」
「今は少々切ない気分だからラムネで頼む」
切ない気分て……。
とりあえずダッシュボードの中にあるたくさんのフレーバーの中からラムネ味を見つけ出し、ピリピリとフィルムを剥いて隣にいる姉さんに差し出す。
「はい」
「サンキュ」
横目でキャンディの位置を確認し、姉さんはそれをパクリと頬張る。そしてそれを口中でしゃぶり出したのでまた車内は静かになった。でも僕はつい先ほどの話の内容が気になって仕方がない。
「シヅル姉さん」
「んむ？」
「さっきの話の続きなんだけど、どうして帰ったら僕がキサラ姉さんのフォローをしなくちゃいけないの？」
返ってきたのはクールな一言。
「お前に彼女が出来たからに決まってるだろ」
……ハァ、また始まったか、姉さん達のアブノーマルモードが……。
「あのさ姉さん、僕とヤマダさんは付き合っているわけじゃないから」
「ふぅんそうなのか」
てっきり驚くのかと思ったのにそう軽く返され、僕の方が呆気に取られる。
「ビックリしないんだね」

「ヘタレなお前なら充分ありえることだからな。それよりも問題はキサラだ」
　シヅル姉さんはキャンディの位置を右の頬から左の頬へと移動させる。
「あいつのブラコンはハンパじゃないレベルだからな。さっきお前がナナセを家に連れ込んだと知った時のキサラの狼狽ぶりはすごかったろう？　ナナセが現れてからは私に合わせて必死にいい姉を演じていたが、今頃家で一人、大きなショックを受けているはずだ。だから帰ったらお前がキサラをフォローしてやってくれ」
「だっだからそこが間違ってるんだってば！　今まで何度も言ってきてるだろ！？　お願いだからシヅル姉さんもキサラ姉さんも僕をそういうヘンな気持ちで見るのは止めてくれよ！　僕らは血の繋がった姉弟なんだよ！？」
「タイセー、お前はキサラが可哀想だとは思わないのか？　私よりも数段美人なのに男と付き合うこともせず、家に引きこもりがちで、お前しか目に入っていない」
「だっだからこそキサラ姉さんには現実を見て欲しいんじゃないかっ！」

「……現実を見ろ、か。言ってくれるな」

　ラムネ味の棒付きキャンディがシヅル姉さんの口中でカラコロと転がる音がする。
「現実を見ていないのはお前だタイセー」
「どういう意味さ！？」
「お前は何も分かっていない。それはキサラがお前しか見ない理由を知らないからだ」
「キサラ姉さんが僕しか見ない理由なんてヘンタイな性癖以外にあるのかよ！？」
「……あぁ、あるさ。立派な理由がな」

必死な僕のテンションがどんどん上がっていくのとは対照的に、そう答えたシヅル姉さんの声のトーンは車内の温度までも下げるくらいの低いものだった。

それでも僕はこの二人が愛しいです　【2】

「……お前ももう高校生だ。そろそろ話しておくべきだと思っていた」

「なんの話さ？」

「これから話すことは他言無用だぞ」

気付けばシヅル姉さんは前を見たままで僕を一瞥もしなくなっている。これは言いにくいことを切り出す時のシヅル姉さんの癖だ。

「……キサラは昔から感応力が高かったろう？　だからあいつは幼い頃から自分と近しい者が頭の中で考えていることを、自分の意思とは無関係に読み取れてしまっていたらしいんだ」

「“　近しい者　”　？」

「私たち家族のことだ。そしてすべての事の発端は父さんと母さんが好きモノだったということが原因でな」

「スキモノ……？　それってどういう意味？」

「私らの父さんと母さんが大の性交（セックス）好きだということだよ」

「ぶはっっ！！！」

凄まじい爆弾発言に本気で吹き出す。しかし姉さんはそんな僕にも一切反応しない。ひたすら無表情で話は続く。

「キサラの話によると、私たちが幼い頃は野生の猿も裸足で逃げ出すほどの頻度で交わっていたらしいぞ？　しかもあの二人、食卓の団欒中にしょっちゅう精神感応（テレチャット）でエロトークをしていたらしい。私

らには聞かれていないと思って、かなりえげつないことを赤裸々に語っていたようだ。“　昨日のエリカの〇〇〇の蕾はしとどに濡れてまるで紅く染まったバラのようだったよ　”　など、そこらの官能小説に負けないくらいの卑猥さだったらしいな」

うあああ！　エリカ母さんの名前まで出てきて本気で拒否反応が出てきたよ！！　シヅル姉さんっ、僕っ、もうその話を微塵も聞きたくないんですけど！？

腕の表面にはっきりと分かるほどの鳥肌が立った。青ざめた僕をチラリと見た姉さんは、「な、人づてに聞いてもキツいだろ？」と同意を求める。

「キ、キツいなんてもんじゃないよ姉さん……」

「だが聞きたくないそれらのやり取りを食事の度ごとにダイレクトで毎日聞かされていたのが」

その先を僕の口から言わせたいのか、姉さんはそこで唐突に言葉を切る。

「……キサラ姉さん……？」

「そうだ」

シヅル姉さんが小さく頷く。

「耳に入り始めた当初はキサラも両親の言っている意味が分からなかったらしいのだが、成長するにつれその内容が分かるようになってからあいつの苦悩が始まった。……タイセー、お前は父さんと母さんの性交シーンやそのやり取りの一部始終を見たり聞いたりしたいか？」

「ぜっ、絶対嫌だっっ！！」

猛烈な勢いで否定する。そんなの死んでも絶対に知りたくないよ！！

「だろう？　だが恥ずかしがりやのキサラはそれを誰にも言えずにずっと一人で苦しんでいたんだ。そしてその内、キサラはついに他人の寝物語も無意識にキャッチ出来てしまうようになる。外ですれ違う奴らの昨夜のエロシーンやエロトークを、聞きたくなくても読み取れてしまうようになったんだ」
「もしかしてそれが原因でキサラ姉さんはあまり外に出なくなったの……？」
「あぁ」
　シヅル姉さんはやれやれ、と言いたげに頭を振る。長いポニーテールの先が困ったように大きく揺れた。
「幼い頃から体験してきたその環境のせいで、キサラは男は不純で不潔な生き物、そして性交は穢れた行為だと思い込むようになっている」
「し、知らなかったよ……、キサラ姉さんにそんな悩みがあったなんて……」
「だがキサラだって年頃だ。若い男の一人や二人と恋愛をして付き合いたいという女としての本能はきっとあいつの中にもあるはずだ。しかし今までキサラが目にしてきた実際の男共は、キサラの姿を見た途端に裸に剥いてエロいことばかりを妄想し始める。だからキサラにとって、男という存在はいつになっても不純な生き物としてしか映らない」
　ちゅぽっ、と音を立て、シヅル姉さんが棒付きキャンディを一旦口の中から取り出す。

「そこでお前だ」

「そこで僕っ！？」
「そうだ。お前はキサラに邪な感情を持っていない」
「そんなの実の姉さんなんだから当たり前だよ！！」
「だからそこがいいんだ。お前はヘタレだが優しいところもあるし、

幼い頃から一緒に育ってきたから家族として今まで培ってきた愛情もある。そして何よりキサラを性欲の対象として見ていない。それらのすべての要素がプラスに働いた結果、キサラはお前を愛するようになったんだ。お前になら自分の全てを捧げてもいいとな」
「だからそれはマズいって今まで何度も言ってるだろっ！？」

すると姉さんは少し苛立った様子で僕をジロリと横目で睨んだ。

「そんな事はお前に言われなくても分かっている。だがキサラをまともにするために、家族である私たちが何とかしてやらなければいけないと思うんだ」
「そ、それはそう思うけど……」
「私も色々考えたよ。キサラを連れてあのマンションで二人暮らしを始めたのもそのためだ。まずは好きモノの父さんと母さんの暮らす家から引き離すのが先決だと思ったのでな。あぁ、ちなみにあの二人、今でも毎夜全開バリバリで交わっているらしいぞ？」

うあああああ！　だからそういう話、本気で聞きたくないんですけど！？
今日の下校時にカシムラさんの幼いキュートさにメロメロになって、父さんと母さんがこれから頑張って僕に妹を作ってくれないかなぁ、なんて思っちゃったあの時のバカな自分を今すぐに抹消したいですっ！！

「だが実際に二人暮らしを始めてみて、あるマイナス点も出てきてな」
「マイナス点…？」
まるでその言葉に合わせたように、車が長い赤信号につかまる。姉さんは握っていたハンドルから指を離し、額にかかっていた前髪を手で梳いた。

「マンションで暮らすようになって、キサラはしばらく元気が無くなってたんだ。たぶんお前がいない新生活が寂しかったんだろう。だが月日が経つにつれ、キサラなりに落ち着き出していたところに突然お前が転がり込んで来ることになった。あの時は正直ビックリしたよ。まさかお前があのフルリアナスに合格するなんて夢にも思っていなかったのでな」

「う、うん……」

姉さんのその何気ない一言が、僕の胸の中にある出来立ての傷をじわりとえぐる。胸の中に並々と溜まっているやりきれなさで、つい下唇を噛み締めてしまいそうだ。でもそんな内面にはびこる負の感情と戦う僕に、一番上の姉はどこまでも優しかった。

「だが私は嬉しいぞ。お前がフルリアナスに入学できて本当に良かったと思っている」

運転席からこちらに向けられた姉さんの涼やかな笑顔は、思わず胸がドキリと高鳴るくらいにとても柔らかく、そして思いやりに溢れている。

……シヅル姉さん、ありがとう。そしてごめん。

3月に合格通知書が届いたことをあんなに喜んでくれた姉さんたちには言えないけど、たぶん僕は不正な方法でフルリアナスに入学しています。こんなどうしようもない落ちこぼれの僕を哀れんだカリンが、お金を積んでこっそり入学させてくれたみたいなんだ。

「きっとキサラも同じ気持ちだぞ。それにフルリアナスに通うためにお前が越してきてからというもの、キサラはずっと有頂天だったからな。お前だってそれは感じていただろう？」

「う、うん。なんとなくは感じてたよ……」

フルリアナスから帰ってくる度に、天使のような微笑みで僕を出迎えてくれるキサラ姉さんを思い出し、素直に認める。
「あの父さんや母さんから離れ、そして同じ屋根の下にかわいがっていたお前がやって来た。キサラにとっては最高の環境だ。ところが今日、ナナセの登場によってその幸せな環境が打ち砕かれた。あいつのショックは恐らく私たちの想像以上のものだろう。だから戻ったらフォローをしてやってほしいんだ」
「でっ、でもさ、どうやってフォローすればいいの？」
「それは私にも分からん」

クールな姉さんが珍しく深い溜息をつく。

「ナナセと付き合っていないことを話し、お前がキサラに優しくしてやれば、とりあえず今日のところは収まるかもしれん。だがそれは問題をいたずらに先送りにしているだけだと私は思うんだ。だが今すぐ弟離れをしろと強く言い聞かせてもおそらくキサラは受け入れられないだろう。かといって、元はといえば親が原因で始まったことだから父さんと母さんには話せないし、まったく本当にどうすればいいものか……」
消沈するシヅル姉さんを見て僕も最善の方法を考えてはみたけれど、良い案は思いつかない。
「……実はなタイセー」
「なに？」
「ここだけの話だが、いっそのこと一度お前とキサラに一線を越えさせてしまって、性交の良さをあいつにも実感させることが出来たら、他の男にも目が行くようになるかもと考えたことがあるんだ」
「ぶふぁぁぁっ！！　ごほっげほがほおぉぉっ！！！」
「いくらなんでもむせ過ぎだろお前」

盛大にむせた僕にどこまでもクールな突っ込みが入る。しかしそんなとんでもない計画を聞いた僕はそれどころじゃない。
「なっ何考えてんだよシヅル姉さんっ！？」
「長い人生、時には荒療治が必要な場合があるような気がしてな」
「そんなヘンタイ的な荒療治をしてどうすんだよ！？　それにそんなことをしちゃえばキサラ姉さんは他の男に目がいくどころか、ますます僕から離れなくなるような気がするし！！」
「やはりお前もそう思うか……」
深く長いため息を吐いたシヅル姉さんの胸が一度だけ大きく上下する。
「私もその確率の方が断然高いと予想している。だから今までお前達の性交の手引きはしてこなかったんだ」
「つーかそういうこと自体考えるなよっ！！」
「だがタイセー、私が手引きしなくても、もしキサラが本気でお前と寝ようと思えば簡単に出来るんだぞ？　お前にだってその理屈は分かるはずだ」
「う……」
正論過ぎて返す言葉が無い。
「キサラは念動力（サイコキネシス）のレベルは低い。だがお前はＰＳＩ（サイ）がほとんど使えない。よって主従関係は明白だ。もしあいつが本気でその気になれば、お前の童貞（チェリー）など超能力（ちから）で押さえつけられて一発で吹き飛ぶさ。しかも男ってヤツは女とは違ってそこに気持ちが無くても少々○○○を刺激してやるだけで簡単に勃つ、しょうもない生き物だしな」
「……頼むからそういう話はもう少しオブラートに包んで話してよ姉さん……」
「分かっていないなタイセー。言葉の伝達というものはシンプル、かつストレートに行うべきだ。婉曲な表現の多用はお互いの意思の疎通を阻む要因になりやすいんだぞ？」
ためらうことなく次々にエロ単語をストレートに口にし、しかも

自信満々の顔で語るシヅル姉さん。確かに姉さんの言っている事は全部真実かもしれないけど、でもだからってなんで実の姉弟でこんなエロ話を真剣にしなくっちゃいけないんだよ……。
もうこれは罰ゲームのレベルだと強く思う。もし今までの僕らの会話をＴＶで全国中継でもされていたら、一体何回“　ピー　”という音声が入れられることになるか分からないよ。

「それに僕をむりやり襲うなんて酷いことをキサラ姉さんはしないよ、絶対にね」
ようやく信号が青に切り替わる。再び車は動き出した。
「あぁ、私もそう信じてはいるさ。だがなタイセー。人間は本当に切羽詰ると咄嗟に何をしでかすか分からん生き物でもあるんだ。だからお前への強い想いに囚われて自分を見失ったキサラが万が一にもおかしな気を起こさないように、タイセーと寝るのならまず私が先だぞ、とあいつにいつも釘を刺しているんだ」

「えっ……！？」

シートに預けていた背中をガバッと起こす。
「じゃあ姉さん！　いつも僕に何かするなら年功序列だとかあんなバカなことを言っているのは、僕とキサラ姉さんがおかしな関係にならないためにだったんだねっ！？」
今までこの一番上の姉に「落ち着けよヘンタイ！」とさんざん罵倒してきたことを僕は心の底から恥じた。
ごめんシヅル姉さん！　姉さんは僕のことを考えてくれていたんだね！　姉さんのその姉弟愛、僕、全然分かっていなかったよ！
感謝の心でいっぱいの僕にシヅル姉さんがクールに答える。

「いやタイセー、悪いがそれは少々違うな」

「ハイ…？」
「お前とキサラの関係を先に進ませない意味ももちろんあるが、私は別に余裕でお前とヤれるぞ？　私は生粋のショタコンなのでな。よってお前も充分に私の攻略対象内だ」

「結局ヘンタイなんじゃないかあああ――っっ！！」

僕の絶叫が車内に響く。
なんだよ、感動して損したよ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0952v/

ヴァンプ！！

2012年1月6日01時46分発行